

淨土宗教學院二十年史

淨土宗教學院

序

浄土宗教学院が創設されて以来、早くも三十周年を迎えた。思えば第二次大戦の苛烈な動乱の最中、思想の弾圧のなかで、浄土宗学を、損われることなく護教維持したいという熱意が、真野正順博士を中心として同志的結合となり浄土宗教学院を創設するにいたったのである。そして初代所長となった真野博士が、戦時の空襲下にもめげず、また戦後の極度に疲弊し混乱した時期にも研究活動の継続に努力されたことを深く銘記したい。一方、時代を前後して京都においては、望月信亨博士が、青年学徒の育成と文化科学の振興という立場から、望月仏教文化研究所を設立され、のち仏教文化研究所として継承発展したのである。

浄土宗教学院も仏教文化研究所も、戦後いち早く宗学大会を開催して、学界の先駆的役割を果たした。しかしながらその後宗門の混乱や、人事の移動などによって記録の保存が困難な状態にあった。将来のため、是非とも関係資料の蒐集、および創立当初の関係者に意見を徴しておく必要性を感じ、昭和三十四年に浄土宗教学院創立十五周年を記念して『浄土宗教学院十五年史』を刊行した。

しかし絶版となっている今、せっかく蒐集され纏められた記録が失われることをおそれ、さらにその後十五年を経過し、仏教文化研究所も発展的に解消し、浄土宗教学院として新発足している現在、教学院創立の趣旨とその三十年のあゆみを後世に伝えることも、また意義あることといわねばならない。今後とも関係方面のご助力によって、一層完璧を期すとともに、浄土教学興隆の一助となれば望外の幸いである。編集にあたってご尽力いただいた諸先生に対し厚く御礼を申しあげ、いささか蕪辞をつらねて序にかえる。

昭和五十一年十一月二十日

浄土宗宗務総長
浄土宗教学院院長

稲岡 覚 順

浄土宗教学院三十年史

— 目次 —

I 教学院の創立とあゆみ

創立の趣旨

沿革

事業

一、研究部門

二、編集部門

規程

一、浄土宗教学院規程

浄土宗学大会発表題目

仏教論叢一覽

II 仏教文化研究所の設立

創設の意趣

事業

一、研究部門

三

二、編集部門

五〇

一

三

七

七

八

二五

二七

二九

三三

四二

四一

四二

三、 仏教文化研究所研究会	五
規程	六
一、 宗令仏教文化研究所規程	六
華頂教学大会	三
仏教文化研究一覧	六

III 浄土宗教学院の新発足

新発足の経過	九
浄土宗教学院研究例会	三
一、 西部研究所	三
二、 東部研究所	四
教学院助成研究一覧	七
學術奨励賞	八
規程	七
一、 浄土宗教学院規程	七
二、 浄土宗教学院研究所規程	八
浄土宗教学大会	六
仏教論叢一覧	三
仏教文化研究一覧	三

付録

近代浄土宗教学のあゆみ	一〇
浄土宗教学院関係物故者略伝	一〇

あとがき

I 教學院の創立とあゆみ

創立の趣旨

浄土宗において多くの偉大な学者が輩出したことは、今更いうまでもなく、これら先輩の指導を受けて、更に多くの学人を擁したことはまさしく特筆に価する。しかし、これら多くの学人は、そのほとんどが自己の興味の赴くままに研究を行い、宗学という立場から見ても、不統一に見え、欠陥の多い宗学となっていくのが趨勢であった。この問題は時間の経過によってのみ改まるものではなく、永久に未解決な問題として残されるだけであった。また一面、大正大学と仏教専門学校（現仏教大学）が東西にあって対峙している観さえあり、研究や講義にも連関性がなかったことは、大学としても、あるいは地理的な面からしても止むをえないことであつたかも知れない。

しかしながら学人という立場からは、このような難点を乗り越えて、宗門の学人としての目的のために、打って一丸とした研究に従事すべきことが必要とされるに至つた。また、宗門人の中には学階を持っている人の数は多いが、表面に出ている学人は少く、また、単に学階を持っているに過ぎない人も少くない。

このためには「かくれた学者に活動の場を与える」ことは極めて大切なことであり、また更に、新進の学者を漸次養成して行かなければならないことも急務である。このような問題に対処するためには、宗門からの相当の援助を必要とするとはいうまでもない。即ち、あらゆる学人を動かし、足らざるところを補い、系統だてて、更に新進学人の養成のためには、宗門から研究に充分な資金の調達と、「あるべき宗学」を樹立するための組織を整えなくてはならない。ここに教學院設立の動機があつたのである。しかるに学人は宗政の容喙を嫌い、宗政人の参加を不必要と考えていたが、学界人に

は研究費が乏しく、その資金の捻出に追われてかえって本来の研究が妨げられる結果となり、一面、宗門の要求する教化の基礎研究が疎遠になるといふ傾向にあったことは事実である。宗義顯彰のために存在する宗務所は宗学の大成に万全の援助をするのは当然であり、ここに教學院を創設して、執綱（宗務長）を院長とし、教学部長を常任理事として発足することになった。

この教學院の附属機関として研究所を設け、これには純粋な学人のみで構成する研究機関として組織したのである。研究所は教學院の事実上の行動機関に他ならない。学人が自己の研究分野から、共同の課題を討議し、組織宗学を体系づけ、更に実践するための研究機関の設立こそが、現代に即応すべき浄土宗の宗学たらしめるものとして急務であったのである。これが昭和十八年当初の教學院設立の趣旨であった。

なお資格としては研究所の会員は嗣講を有する者以上の全員とし、その他の学校関係者もしくは卒業生を準会員となし、研究員には題目を与え、労作たる論文に対してはできるだけ優遇したのは、平素の研究費の一助とする考えからに他ならなかったのである。

沿革

昭和十八年五月に実質的に教学院研究所は発足した。あけて昭和十九年、浄土宗教学院に関する件を審議院に諮問し、その議決を経て、四月一口付（達示第八号）を以て、当時の管長郁芳随円院下の名によって公布され、公的活動が開始されることとなった。四月一日午後一時より宗務所において、最初の役員会を開催、里見達雄教学院院长、椎尾弁匡顧問、真野正順研究所長、江藤激英常任理事、大村桂巖、石橋誠道、前田聰瑞、長谷川良信、藤本了泰、惠谷隆戒の各理事、安井大、渡辺真海両部長、杉浦演順主事、村瀬秀雄、大河内隆文両教学院幹事の諸氏が出席し、里見院長の挨拶について江藤常任理事より教学院についての説明があり、会員の銓衡、予算の討議、更に事業内容、研究所の研究課題等についての協議がなされた。理事会において推薦された会員（副講以上）は左記の六十九名で、会員の最初の協議会が五月二十一日に行われたのである。

熊野 宗純	石塚 竜学	岩崎 敬玄	鈴木 靈真	大島 泰信	坂田 良弘	大村 桂巖
中野 隆元	吉原 白覚	石橋 誠道	大野 法道	千葉 良導	小西 存祐	石井 教道
松出 貫了	藤本 浄本	原 聖道	稲垣 真我	前田 聰瑞	長谷川良信	藤本 了泰
林 隆碩	真野 正順	江藤 激英	中島 真孝	阿川 貫達	山口 察常	小林 大巖
須賀 隆賢	小林 義道	高島 寛我	大河内隆弘	友松 円諦	定 恵苗	岸 信宏
佐藤 良智	久保田量遠	三枝樹正道	石井 俊瑞	望月 信成	五島 法眼	清崎 専成
塚本 善隆	岸 覚勇	佐藤 密雄	豊川 玄雄	成田 昌信	藤田 寛雅	藤原 弘道
小沢 勇貫	伊藤 真徹	宅見 春雄	惠谷 隆戒	佐藤 賢順	千賀 真順	中村 康隆
松濤 誠廉	田中 順照	八百谷孝保	江藤 澄賢	伊東 信海	服部 英淳	香月 乗光
藤堂 祐範	藤原 了然	北条 春光	鶴飼 光順	吉井 泰順	諸戸 素純	

この協議会をもとに十有五星霜にわたって多様な研究活動が開始されることとなったが、このような総合研究機関の創設を、強力に推進した初代研究所長真野正順博士の偉大な功績を忘れてはなるまい。博士は設立の趣旨にあるように、組織宗学の大成と、宗門、学界の協力による一体化を念願し、個人の興味本位の研究より共同研究によって大成される宗学を切望され、このような機能を全面的に活動させることのできる機関の設置を考慮しておられた。時あたかも第二次世界大戦の熾烈な様相は日一日と深まり、学人は戦場に駆り立てられるとともに、学術研究の一頓挫は日睫に迫り、学界に断層の生ずることは必然なことであった。かかる時機に研究を目的とする総合機関の存在を期待し、後進の養成を願うのは学人のみならず、宗門人にとって当然のことであつたらう。ここに真野博士を中心として、昭和十八年五月に誕生した研究所のもとに、地味な研究を続行し、翌年の公的活動の準備期間として着実に続けられていったのである。

昭和十九年、公的活動を認められ、宗費の中に教学院費が加えられると一段と活潑な研究活動が開始された。教学院の事業内容は原理、歴史、実践の三部門からなる研究部、月例研究会、古典研究、懇話会、宗侶要問録の編纂、国訳宗典編纂並びに宗典章句調査等と研究分野は広範にして多岐にわたり、その成果も着々と積み重ねられていったのである。しかし、戦争はますます熾烈さを加え、東京はもとより本土全域にわたり、空襲を蒙るようになって、幾多の支障が生じたことはいまさらいうまでもない。月例研究会や懇話会等は警戒警報、空襲警報下に行われ、それがためあるいは避難し、あるいは散会、流会となり、会に参集するまでさえもが並大抵のことではなかつたことを考え合わせると、継続して毎月、例会が催されたことに敬意を表せざるを得ない。おそらくは学人の熱烈なる研究意欲と護教的精神とが継続させたものであろう。そこには戦時下なればこそ研究を継続し完成しなければならぬという悲愴感が含まれていたかもしれない。空襲による災禍はついに宗務所を焼失させ、転々と宗務所の移転を余儀なくさせ、さらに戦後大眼院に設けられたものの、駐留軍の接収によって増上寺へ移動するなど苦難の連続で、教学院の運命も宗務所と同様な状態におかれていたのである。

昭和二十一年、以前より待望されていた京都における教学院研究所が恵谷・前田両理事の尽力によって開設された。終戦を迎える三ヶ月前の五月に発足したことは肝銘しなければならぬことであらう。ここに東西呼応して総合的に充実した機能を発揮することができる段階となったのである。しかしながら、東京における空襲による被害、さらに加えて終戦

時の混乱、物心両面の痛手は等しく経験した者の知るところである。

この空白を埋める意味からも、新進の学徒や在野の研究者に研究の場を与える理由からも、昭和二十一年十一月、京都仏教専門学校（現仏教大学）講堂で第一回浄土宗学大会が開催された。この大会が参加者全員に深い感銘を与えたことはいうまでもない。この大会は現在の学界の先驅をなす運営方法であったことを深く留記すべきである。翌二十二年の大会後、宗門が分裂の事態に直面したことは戦後の混乱から立ち直りかけた財政に支障を生じ、教学院費の予算が計上されても有名無実となり、当事者の苦労には大抵でないものがあった。初代幹事の一人村瀬秀雄氏が昭和二十年四月応召され、その後大河内隆文氏も退任し、代りに二十一年一月、服部仙順氏が教学部と兼任幹事となり、さらに同年四月、吉田宣成氏が帰還後、幹事職に従事した。この間、真野所長は主幹が空席のため、非常な努力をされたことは推察に余りあるものがあるだろう。さらにこの間、真野博士邸において常時、研究会が設けられていたことを考え合わせると、物資不足のこととて、茶菓の接待にも見えざる苦労の跡がしのばれ、感無量なるものがある。このようなことは後まで尾を引いている。交換講座で出張された諸教授も、窓から列車に乗り、食糧持参で出かけたことはもはや語り草となる程である。

昭和二十四年、真野博士が従来から健康に勝れなかったがさらに悪化されたので所長を辞され、吉田幹事もその職を退かれ、代って大野法道博士が研究所長に、佐藤賢順教授がその補佐役として主幹職に、幹事の代りに書記職に真野竜海氏が十一月にそれぞれ就任せられ、新しい陣容で更に進展を計ることになった。研究会も佐藤主幹宅において継続された。宗学大会も地方に出て宗門人と密接な関係を保たんがために、その試みの一つとして東北の教区長、教化局長と相協議し、仙台の願行寺で開催されることとなった。翌二十六年、佐藤賢順主幹の大正大学文学部長就任にもなつて、五月に松濤誠廉教授が主幹職に任ぜられた。その後は別記の事業内容の通りの研究や編纂が継続された。この間に真野竜海書記が職を退かれ、二十八年、水野善朝氏が後任書記となった。この頃もまだ予算はあつても実質が伴わず、主幹の目に見えない苦労が藏されていたであろう。その後更に松濤主幹、水野書記が退任され、昭和二十九年四月、佐藤密雄教授が主幹に、昭和三十年五月、宮林昭彦氏が書記に任ぜられた。この間、宗門の分裂があつても学人は純粋な立場から提携して研究を行わなければならないという趣旨から、従来宗学大会を、知恩院仏教文化研究所と共同主催のもとに教学大会と改名し

て、東西交互に行うことが決議された。

昭和十九年、京都の理事に任ぜられた恵谷隆戒・前田聰瑞両教授の中、前田師は二十四年宗務長即ち教学院長になられたため、その職を退かれ、恵谷理事一人ですべてを負わされていたが、三十一年四月、仏教大学学長稲垣真我教授を新理事に迎え、恵谷教授を京都初代主幹として再発足することとなった。この間東西両地において着実な研究と新進の養成がなされてきたが、この頃より問題視されていた新興宗教対策がとりあげられて、多方面よりの討究がなされ、また、会員並びに研究員は諸学界、諸方面に多様な研究活動を行なっている段階にまで発展をみたのである。戦時下、終戦後の混乱時を考え合わせると、創立当時の御苦労ならびに歴代当事者の苦心を再び想起し、さらに一段と飛躍した発展をなすべく奮起しなければならない。

なお歴代教学院長は次のごとくである。

里見達雄、安井大学、前田聰瑞、渡辺真海、小林大巖

創立以来の教学院予算

昭和一九年度	六、〇〇〇円	昭和二七年度	七〇、〇〇〇円
昭和二〇年度	一五、〇〇〇円	昭和二八年度	七〇、〇〇〇円
昭和二一年度	三五、五〇〇円	昭和二九年度	七〇、〇〇〇円
昭和二二年度	六九、七〇〇円	昭和三〇年度	一五〇、〇〇〇円
昭和二三年度	一〇〇、〇〇〇円	昭和三一年度	一五〇、〇〇〇円
昭和二四年度	一〇〇、〇〇〇円	昭和三二年度	一五〇、〇〇〇円
昭和二五年度	二〇〇、〇〇〇円	昭和三三年度	一五〇、〇〇〇円
昭和二六年度	七〇、〇〇〇円	昭和三四年度	二三〇、〇〇〇円

右の予算は終戦前後、全額が支出されたわけではないが、一応宗費に組み込まれているので記したにすぎない。

事業

教學院の實質的研究は教學院研究所が行うわけであり、誕生以來、數多くの事業並びに研究を続けてきた。以下に爾來
 孜孜として努めてきた業績を順を追って記してみよう。

一、研究部門

○ 研究部

研究の部門を分つて次の三部とする。

- 第一部（原理） 宗義信仰の原理的研究
 - 第二部（歴史） 宗門歴史の総合的把握
 - 第三部（実践） 宗門及び寺院の實踐的行路の調査及び解決に関する研究
- 昭和十九年度

部	題目	範圍	研究員	期限
浄土宗義史	第一部 宗義展開の方向	宗祖より聖岡迄	指導員 椎尾弁匡 研究員 佐藤密雄	一ケ年
			主査 石橋誠道 指導 小西存祐	

第三部 研究	第二部		研究員
	浄土教団史		
	聖岡より徳川末迄	研究員 千賀真順	
徳川時代より明治迄	開宗より徳川迄	主査 石井教道	三ヶ年
	主査 藤本了泰	研究員 服部英淳	
主査 大野法道	指導 前田聰瑞	主査 藤本了泰	研究員 八百谷孝保
主査 大野法道	主査 恵谷隆戒	研究員 坪井俊映	研究員 坪井俊映
一ヶ年	三ヶ年	三ヶ年	三ヶ年

昭和二十年年度

第二部の浄土宗義史ならびに浄土教団史のみが前年に引き続き、範囲、研究員が全く同一で継続研究となった。
昭和二十一年度

第一部	第一部		研究員
	浄土信仰に基づく 浄土宗義史の研究 (原理)		
	徳川期浄土宗史の研究	研究員 坪井俊映	
正傍両明經典における浄土宗義思想 導師・宗祖における浄土宗義思想 宗祖以後列祖における浄土宗義思想 国史に現れたる浄土宗義思想 想浄土宗義の哲学的理解		研究員 江藤澄賢 千賀真順 香月乘光 藤田寛雅 佐藤賢順	期限 一ヶ年

第二	(歴史)	初期大乘經典における弥陀思想 捨世派の宗学	小沢勇賢 岸覚勇	一ケ年
第三部	(実践)	実践宗学方法論 地方習俗と本宗寺院	藤原了然 吉田宣成	一ケ年

研究所が最も力を注いだ組織宗学の構成を以上のように定めた。しかもその成果は極めて大なるものがあつたが、終戦を迎えるに及んで、一応の段落を告げざるを得なくなったのはこの上ない痛感事であつた。しかし、この中で成果のまとめられたものをあげるとつぎのとおりである。

△第一年度第一部

日本学による浄土教の展開

椎尾弁匡

△第一年度第二部

浄土宗教理史(宗祖及び門下)

千賀真順

江戸時代浄土宗教理史

服部英淳

聖阿教学の内容

石井教道

浄土宗団史之研究 上(三編)

坪井俊映

徳川中末期宗団史の研究(上中下)

坪井俊映

中世における名越派教団の成立とその展開

藤本了泰

△第一年度第三部

浄土宗の鍊成観

大野法道

△第二年度第一部

正傍阿明經典における浄仏国土思想(その一)

江藤澄賢

善導・法然両上人における浄仏国土思想

千賀真順

列祖における浄仏国土思想

香月乗光

浄仏国土の哲学的理解

佐藤賢順

△第二年度第三部

仏教信仰民俗化の諸形態

吉田宣成

実践宗学方法論

藤原了然

担当者はみなよく一宗の要望を体し、努力の結果、研究の性格として短時日にもその成果を挙げることはなほだ困難なるにもかかわらず、大部の成果を見事に示したのである。しかし、その成果を出版しえなかつたことは返す返すも残念といわなければならぬ。

○ 聖典講読会（古典研究）

第一回 善導大師観経疏玄義分

講師 大野法道博士

当時の少壮学者多数の熱烈な希望に基づき、毎月二回（第一、第三火曜）古典研究会を催すこととなり、芝公園教学院研究所において開かれた。昭和十九年十月三十一日に開始し、翌二十年二月六日終了したが、毎回熱心な講読と質疑応答がかかわされた。

第二回 無量寿経

講師 阿川貫達教授

昭和二十八年六月より毎月第四火曜日に行われ、十月二十日に至るまで五回にわたって増上寺において、多数の参加のもとに熱心な討議がなされた。

○ 懇話会

昭和十九年第二次大戦も漸く熾烈さを加えたとき、時代の動向を把握することが宗勢の展開に役立つことは当然である。そのため当時の指導的達識者を招き、懇話会を催し、在京全宗侶に公開し、講師と腹藏なき質疑討論を行なって、当時の核心に触れさせることになった。そのため増上寺聡和殿において開催することとし、六月十七日、講師として橋田邦彦氏を招いたが警戒警報発令のため延期となった。十一月七日、再び橋田邦彦氏を招いたが、再度、警報が発令され、惜しくも無期延期となった。従って十月六日、大川周明氏を講師とした懇話会のみが開催されたが、参衆七十名、講演後質疑発で非常に盛況であった。大川氏の演題は「大東亜精神」というのであったが、当時の軍部の抑圧を慨き、軍政の強力なる下では日本の敗戦は免れないことを力説したもので、当時の聴衆に強い感銘を与えたのである。全く異例のもので、ここにこそ教学院主催の懇話会の意義があったのである。

○ 宗義研究会

昭和二十二年のみではあったが、研究所年来の課題であった本宗教義の批判と弁証を左記の形式で行なった。

△東京の部▽

第一回 五月二十四日

題目 「阿弥陀仏とは何か」

解説者 (宗学) 小沢勇貫氏

(思想) 佐藤賢順氏

第二回 九月二十七日

題目 「浄土とは何か」

解説者 (宗学) 香月乘光氏

(思想) 佐藤良智氏

第三回 十一月八日

題目 「さとり及びすくいと何か」

解説者 (宗学) 服部英淳氏

(思想) 松濤誠廉氏

〈京都の部〉

第一回 十月二十三日

題目 「浄土宗の仏身仏土観」

解説者 小西存祐氏

戦後の混乱の中で旧来の布教の殻を破って新しい時代に、装いを新たにした大衆教化のために求められた研究会であった。従って研究方法も、解説者を専門から一人、専門外から一人出席して、対談形式をとり、さらに列席者全体で討論する方法をとった。その結果、二人の解説者が全く対立してしまい、激論を戦わせた場合もあって、なかなか盛会裡に終始した。

○ 東西交換講座

大正大・仏教大の併立するのはそれだけ教学の隆盛を思わしめるものが、他面対立を憂える恐れがないわけでもない。ここにおいて毎年東西の俊秀な学人を相互交流させ、その研磨と親睦を計ることにした。昭和二十一年・二十二年度のみとなったが、最近、再び開かれる見通しとなった。

昭和二十一年

〈京都〉

大野法道博士 六月七日、仏教専門学校

午前「持戒について」(学生に対して)

午後「仏教戒学と大藏経」(会員等に対して)

〈東京〉

塚本善隆博士 十月七日 大正大学

午前「中国仏教大観」(学生に対して)

午後「中華民俗仏教について」(会員等に対して)

昭和二十二年

△東京▽

恵谷隆戒教授 六月三・四日

三日「浄土教の本質」(教学院研究所)

四日「浄土教の現代的批判」(大正大学)

△京都▽

佐藤賢順教授 十月一・二日

一日「浄土教展開の方向」(仏教専門学校)

二日「宗教経験の構造」(右同)

○ 資料展示会

研究会に付属して資料展示会が開かれ、有益な資料が公開され、参加者を大いに裨益した。

△東京▽

昭和二十七年十月二十五日、六日

故鈴木靈真人蒐集、未公開伝書展示会

宗務所講堂 解説 八百谷孝保氏

△京都▽

昭和二十六年十一月二十七日

黒谷光明寺什物資料展観

黒谷光明寺 解説 千葉良導黒山法主

昭和二十六年九月二十八日

清浄華院什物資料展観

清浄華院 解説 石橋誠道浄山法主

昭和二十八年二月二十三日

青蓮院什物資料展観

青蓮院 解説 坂戸公隆氏

○ 新興宗教対策

戦後、新興宗教が隆盛となったため、研究所としてもその対策を考慮せざるを得なくなり、宗門の要望をも容れて研究会を設けた。昭和三十一年九月、新興教団の实地調査と研究を兼ね、横浜の孝道教団本部を見学した。翌三十二年十一月、創価学会の実体とその対策を協議する座談会を宗務所で開き、引き続き新興宗教について審議した。その結果、左の如き方法をとることに決定した。

一、資料の蒐集

- a 新興教団の実態調査のために各教団より出されている雑誌、出版物等を蒐集すること。
- b 対策案をたてるために具体的資料として宗門寺院にアンケートにて調査すること。
- c 教理的な面で内容につき研究。
- d 新興宗教の実態と布教方法について。

二、パンフレット刊行

とりあえず宗報を通して対策を発表。

そのために新興宗教対策委員として次の七氏を選出した。

佐藤賢順、佐藤密雄、佐藤良智、竹中信常、松本徳明（関東）、恵谷隆戒、宅見春雄（関西）。以上の一環として、竹中信常著『新興宗教』が宗務所から刊行され、多大の反響をよんだ。

二、編纂部門

教学院研究所の編纂事業は最も具体的に成果を表現させるものであるが、一面最も費用を必要とするものである。しかるに原稿が集積されていながら、種々の事情で出版されずに終わったものが数多い。以下に記す事業にはそのような事情のあることを考慮すると共に編纂、業務の歴史的経過を述べることになるわけである。

○ 宗侶要問録（仮名）

時代の変化と共に宗侶として、その解決を必要とする種々の難問題が続々生起してくるのは教団の常なるもので、これに簡潔適確なる解答を与え、もって宗門信仰の指針となし、併せて布教上、宗侶が現実の要望に応ぜんとするもので、各方面の協力によって昭和二十年、その第一輯を発行する予定であったが、惜しくも実現しなかった。

○ 国訳宗典の編纂並びに宗典章句調査

昭和二十二年十月研究所において編纂打合会を催し、理事集合の上、所依の経論を基とし、宗学の精髓たるべき典拠を広く綿密に抽出し、現代の要望に応えんとした。主任に大野法道博士を選び数名の新進学徒によって分担検討し、その副産物として宗典章句の調査を合わせ検討することにあつたが、これの完成をみずに終わった。

○ 浄土宗教学院紀要と教学院叢書

ともに研究部や研究例会を基とするもので、すでに原稿もまとまり、教学院叢書第一輯は『浄土宗の鍊成観』（大野法道著）

と具体的であったにもかかわらず、印刷事情その他のため未刊のままなのは甚だ遺憾とするところである。

○ 仏教論叢

昭和二十二年第一号が刊行されて、今日に至るまで七号が出された。内容は教学大会の発表を網羅しているが、第三、四、五回の三回の宗学大会が資金難のため中絶した。第三号にしても「あとがき」に本宗要職の某師が約半分に及ぶ費用を寄附して激励してくれたむね記載されているが、これは他ならぬ渡辺真海宗務長の賜であった。このことは他の『仏教論叢』においてもいえることで、充分の寄附が恐らくは出版の一助となっていたものと考えられる。

○ 服部英淳訳著『新訳選択集』

昭和二十三年刊行、選択集の口語訳で、この種の現代語訳の先鞭として貴重な存在である。

○ 仏教教科書（仏教読本）

阿川貫達著『浄土宗義概説』昭和三十三年

恵谷隆戒著『浄土宗史』昭和三十年

共に高等講習会並びに大学用教科書にふさわしい内容で編纂されたものである。さらにつきのごときものが、新進の手によって分担された。

一、『仏教概要』

二、『各宗綱要』

三、『三國仏教史』

四、『円頓戒概説』

三、十五周年記念事業

◎ 記念事業

- 一、教学院十五年史の編纂
- 一、現代浄土教教化資料に対する指導及び蒐集
- 一、宗祖七百五十年御忌記念、教学院講師団の編成
- 一、新興宗教の実体調査及びその対策研究
- 一、浄土宗定仏教読本の編纂
- 一、寄附 一口 金五百円

◎ 記念行事

浄土宗教学院創立十五周年記念会

期日 昭和三十四年四月二十日(月)

第一部 講演と映画の集い

午後一時 会場 銀座山葉ホール(十二時三十分開場)

一、挨拶

佐藤密雄

一、講演

体 験

森 赫子

諸行無常のはなし

武田泰淳

ひじり法然

佐藤賢順

一、映画

ヘッドライト

フランス映画 ジャン・ギャバン主演

第二部 創立十五周年記念祝賀会

午後五時三十分 会場 神田一ツ橋学生会館

一、式典

功勞者表彰（真野正順博士他）

一、祝賀会

四、教学院研究会

○ 研究会趣旨

教学院全員ならびに熱心なる青年学徒を中心として研究会を設定し、毎月例会を開催してきた。その方法としては、当日担当研究者に真摯なる研究報告原稿を作成させ、まずこれをその席上において朗読し、ついで列席学徒の質疑・討論によって充分に批判を重ね、その結果に対して研究所は発表者よりその原稿を収めて若干の書籍料を交付することになってきた。これは後刻、出版を考慮したものであったが、終戦後の事情はこれを許さず、原稿は各発表者の手もとに保存することとなった（研究所に保存の分は例会発表の上に*印を付した）。これらの出版の中止はいまだに惜しまれている。この挙は学界の非常な好評を博し、例日多数の参会者と卓絶せる研究発表を得て現在に至っている。東西合わせて百八十回になん

なんとする研究会は、けだし稀有な存在といえるであらう。

研究会一覽

〈東京〉

昭和十九年	六月 一休・白隠・隠元の浄土観	服部 英淳	三月 道教について	大野 法道
	七月 捨聖帰浄	佐藤 賢順	四月 シャムに於ける仏教の印象芸術	小島 章見
	八月 日本浄土教と末法思想	香月 乗光	五月 支那上代の宗教について	久保田景遠
	九月 沙門道の興起	松濤 誠廉	六月 伝法要偈	岡本 貫瑩
	十月 米迎信仰とその表現	藤田 寛雅	七月 經典に顯れたる清浄思想	大村 興道
	十一月 信仰の心理	竹中 信常	八月 林語堂と郭沫若	鈴木 靈真
	十二月 經典史上に於ける無量寿經	小沢 勇貫	九月 非合理主義の文学	石黒 弥致
	昭和二十年		十月 宗学に対する疑義	武田 泰淳
	* 一月 法然上人と恵心僧都	坂山 良弘	* 〃 宗学研究の態度と其の方向	塚本 善隆
	二月 浄土思想の政治的特殊性 (三月より六月まで休会)	八百谷孝保	十二月 カソリックの現勢	石井 教道
	七月 宗学の現代的本質	阿川 貫達	* 一月 空仮中の心理	真野 正順
	八月 宗教教育の動向	大村 桂巖	* 二月 謡曲文学と法然伝	松濤 誠廉
	九月 南方仏教について	佐藤 良智	三月 安心論	窪田 正道
	十月 宗教形態論の転向	中村 康隆	* 四月 基督教心理学	服部 英淳
	十一月 無明の根源	佐藤 密雄	* 五月 解脱と隠遁	竹中 信常
				山口 察常
				八百谷順応

* 印は原稿提出分

七月	万葉集と無常観	魚尾 晃久	六月	仏伝よりみたる三国遺事批判	八百谷孝保
八月	生死と涅槃	佐藤 密雄	七月	キリシタンと浄土教	服部 英淳
* 九月	種姓について	前田 竜海	八月	馬鳴について	松濤 誠廉
十月	まつりと文学反省	上田 純明	九月	修道論における信	前田 竜海
* 十二月	救済の条件	吉山 宣成	十一月	選訳集における阿弥陀仏観	石井 教道
	—キエルケゴールの内在の宗教に拠りて—		十二月	上代中国における鬼魂観について	安居 香山
昭和二十三年					
一月	参詣と賽銭の歴史的見方	藤田 寛雅	一月	仏教における物質観	佐藤 良智
二月	仏教の行程論	大野 法道	二月	經典に現われたる治病長寿法について	久保田量遠
三月	羅末麗初の仏教	八百谷孝保	三月	東洋文庫見学(解説)	石黒 弥致
五月	時と事 —華嚴経研究序説—	佐藤 賢順	四月	江戸時代の寺院について	藤田 寛雅
六月	浄土教に於ける自力他力論	小沢 勇貫	五月	ウパニシャットの哲学者	久米原達丈
七月	無我論証	久米原達丈	七月	浄土教における戒について	小沢 勇貫
八月	十六羅漢像と羅漢講式	小島 章見	八月	初期の番場時衆について	大橋 俊雄
九月	宗祖に於ける「宗」の観念	真野 正順	九月	教団における懲罰について	佐藤 密雄
十月	涅槃経の仏性	佐藤 密雄	十一月	仏教美術について	小島 章見
十一月	宗祖に於ける「死」	若林 隆光	十二月	仏教習俗の問題	中村 康隆
十二月	宗教発生の論の構格	中村 康隆	昭和二十六年		
昭和二十四年					
一月	直観と靈観	竹中 信常	二月	華嚴経寿量品における弥陀浄土について	香月 乗光
二月	現実否定の様相	魚尾 晃久	三月	文化変容と宗教概念	竹中 信常
三月	宗田行政の特性	吉山 政雄	四月	ジャイナ教について	松濤 誠廉
四月	現代宗教学における神観念の問題	後藤 元祐	六月	指方立相の本質とその根拠	服部 英淳
五月	実存と死	佐藤 賢順	七月	苦観について	真野 竜海
				現代アメリカの宗教事情	後藤 元祐

九月	書經に見る民族宗教の二、三の問題 —特に大詰篇を中心として—	安居 香山	二月	昭和三十九年 三界と極楽	佐藤 賢順
十月	仏教哲学の方法論	佐藤 賢順	三月	ミリンダパンへの成立	石黒 弥致
十二月	女人往生について	戸松 啓真	十一月	中国に於ける宗学の発生	真野 正順
	昭和二十七年			昭和三十年	
一月	經論の組織的研究と新宗派成立説	久保田 量遠	一月	病床授戒と臨終出家 —法然上人前後の習俗—	中村 康隆
三月	バカバットギーターにおける智と信について	久米原 達丈	二月	法然上人の經济生活	大橋 俊雄
四月	カントの芸術論について	峰島 旭雄	三月	涅槃圖像について	小島 章見
六月	マハーバーラタについて	水野 善朝	四月	米國大陸の仏教及び浄土宗について	長谷川 良信
八月	宗教、文化、社会 —最近のアメリカ心理学の動向—	竹中 信常	六月	唐法照と常行堂念仏	服部 英淳
九月	中世浄土教教団における経済的基盤について	大橋 俊雄	十月	無量壽經の諸問題	小沢 勇賢
十一月	壽靈の華嚴学	石井 教道	十一月	新興教団の構造論的特質	竹中 信常
	昭和二十八年			昭和三十一年	
一月	原始仏教の修道	佐藤 密雄	二月	法然教学と教行信証	結城 令聞
三月	漢代黄帝信仰	安居 香山	四月	浄土宗と戒律	大野 法道
六月	行 <i>Sanskritas</i> を中心として	松濤 誠廉	五月	南方僧伽の戒律生活について	白幡 憲佑
七月	大經發達過程における大乘思想	小沢 勇賢	十月	ドイツ神秘主義思想について —特に、ヤコブベームを中心として—	峰島 旭雄
八月	縁山經藏と藏司について	小島 章見		昭和三十二年	
十月	中陰について	佐藤 良智	七月	浄土教の諸問題	佐藤 賢順
十二月	譬喩と業との聯関について —譬喩經の性格の裏づけとして—	石上 善応	一月	宗祖と親鸞	増谷 文雄

〈京都〉

昭和二十一年

- 五月 教学院研究所について
- 〃 法然仏教の建築美とその構造
- 七月 往生伝に現われたる浄土思想の展開
- 九月 新宗学の建設
- 十月 曇鸞の回心とその理解
- 十一月 浄土信行論序説
- 十二月 康僧鑑訳無量寿経批判
- 昭和二十二年
- 一月 ヒューマニズムと浄土教
- 二月 凡夫性と浄土教
- 三月 浄土仏身論
- 四月 仏教の論理性の問題
- 五月 彭際清のその人と思想
- 六月 浄土教史の一考察
- 七月 南北両伝に現れたる因縁説の展開
- 九月 弥陀本尊論
- 十月 宗学研究の主要課題
- 十一月 玉葉の研究 — 貴族と仏教 —
- 十二月 宗教と社会

(昭和二十三年、二十四年休会)

昭和二十五年

- 十月 阿頼耶識論
- 十一月 仏教の実存
- 昭和二十六年
- 一月 念仏の難行易行について
- 二月 曇鸞教学の一断面について
- 三月 信の構造
- 四月 浄土教本質論
- 五月 文殊般若経について
- 六月 飛鳥芸術の特異性
- 七月 浄土教学史上における冨師の地位
- 九月 仏教に於ける伝統と形成
- 十一月 仏教に於ける人間の問題
- 十二月 藤原時代に於ける浄土教について
- 昭和二十七年
- 一月 日本古代遺跡の研究
- 二月 西山教義の特色
- 三月 華嚴における浄土教
- 四月 聖光寺神阿について
- 五月 中世浄土教の特色
- 〃 宗学の方法論
- 七月 仏教の本質
- 十月 一遍上人の教義とその門下
- 十二月 趙宋仏教の特質
- 〃 西山教義の特色

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 江藤 潔英 | 田村 圓澄 | 岸 覚勇 | 藤堂 恭俊 | 坪井 俊映 | 伊東 信海 | 太田 正元 | 細川 憲我 | 藤原 了然 | 藤吉 慈海 | 牧田 諱亮 | 千賀 真順 | 春日井真也 | 成田 貞寛 | 宅見 春雄 | 伊藤 真徹 | 稲岡 順雄 | |
| 成田 貞寛 | 太田 正元 | 坪井 俊映 | 藤原 弘道 | 千賀 真順 | 宅見 春雄 | 藤原 了然 | 伊藤 真徹 | 竹田 聰洲 | 稲垣 真哲 | 香月 乗光 | 惠谷 隆戒 | 田村 圓澄 | 千賀 真順 | 高島 寛我 | 武田 賢善 | 江藤 澄賢 | 石黒 観道 |

昭和二十八年

一月 浄土教の諸問題

二月 上代日本仏教の信仰形態

五月 浄土教の二大思想型

七月 仏教史学の盲点と民俗学の導入

十月 平安時代における浄土教信仰

十二月 浄土教に於ける理観・観念・口称の展開について

昭和二十九年

二月 念仏と戒の課題

五月 仏教学と宗学との関係

七月 金沢文庫資料による中世仏教教学

十月 太子仏教の研究

十二月 藤原時代に於ける庶民生活と仏教

昭和三十年

二月 仏陀教説の背景に就て

五月 聖徳太子の維摩経疏について

七月 法然上人の往生観

九月 プトラガについて

十月 開宗の意義に關する一考察

〃 Albert Schweitzer の仏教観

十二月 知恩院所藏順次往生講式について

昭和三十一年

二月 菩提寺の系譜 — 封建遺制と寺檀関係 —

五月 源隆国の安養集について

〃 日本靈異記に現われた観音信仰について

〃 義寂の無量寿経述義記について

六月 群疑論見聞について

十一月 勝鬘経の考察

昭和三十二年

二月 鎌倉期南都に於ける戒律復興について

五月 安養集についての諸問題

〃 仏性論と浄土教

六月 無住一門と浄土教

七月 回向発願心の問題について

十月 鎌倉期南都に於ける弥勒信仰について

石井 教道	九月	宅見 春雄
惠谷 隆戒	十月	藤原 了然
石井 教道	〃	藤吉 慈海
竹田 聰洲	十二月	伊藤 真徹
伊藤 真徹	二月	竹田 聰洲
惠谷 隆戒	五月	惠谷 隆戒
千賀 真順	〃	成田 俊治
藤原 了然	〃	中岡 隆善
惠谷 隆戒	〃	坪井 俊映
千賀 真順	六月	香川 孝雄
藤原 了然	十一月	
惠谷 隆戒	〃	
成田 貞寛	二月	成田 貞寛
伊藤 真徹	五月	惠谷 隆戒
宅見 春雄	〃	千賀 真順
成田 貞寛	六月	伊藤 真徹
千賀 真順	七月	藤原 了然
	〃	成田 貞寛

研究会の開催地は東京では、増上寺景光殿、芝妙定院、新旧宗務所講堂、大正大学浄土学研究室、天光院（真野博士宅）願行寺（佐藤賢順教授宅）等と処を変えたことは、沿革に記したとおり空襲による焼失、駐留軍による接収などが想起され、その歴史の推移を知る上からも興味がある。京都では仏教大学、尼衆学校、専修道場、清浄華院、黒谷光明寺、知恩寺、禅林寺、聖光寺、知恩院古経堂、浄福寺、金光寺、誓願寺、大雲院、青蓮院、法然院、華頂短大等と、その寺院に關係ある研究を行なったことは、公員のみならず聴衆に多大の感銘を与え、さらに研究会自体を意義あるものとしたことを特記

したい。なお、京都において昭和二十六年から三十九年に至る研究発表者のレジメを収録した『宗学研究』を第五輯まで油印版で刊行した。

規 程

昭和十九年四月一日付で決定した教学院の規程（宗報三三二一號、昭和十九年四月一日発行、達示第八號）はその後、改められて昭和三十一年四月一日、達示第六號（宗報四六八號、昭和三十一年四月十五日発行）をもって宗議会の議決を経て浄土宗教学院規定が宗務長渡辺其海師の名で発布された。以下がその規程内容である。

一、浄土宗教学院規程

第一条 浄土宗務所内に浄土宗教学院（以下「教学院」という）を置く。

第二条 教学院は、大正大学又は仏教大学の現教職員およびかつてそれらの教職員であった者にして副講以上の学階を有するものならびに宗侶の学事功勞者のうちにつき教学院理事会において推薦したものを会員とする。

第三条 教学院は、会員相互の連絡を図り、浄土宗教学の研究及び発展に寄与し、兼ねて学制、学事及び学階等に関し宗務所の諮問に応ずることを目的とする。

第四条 教学院は、その目的を達するため左の事業を行う。

- 一、大会及び総会の開催
- 二、研究発表会の開催
- 三、公報および紀要の発行
- 四、研究に必要な資料の蒐集
- 五、研究生の指導監督
- 六、その他必要な事業

第五条 教学院に左の役員を置く。

院長 一人

顧問 若干人

理事 若干人（このうちに常務理事一人を含む）

主幹 一人

- 2 前項の外必要により書記、出仕、雇員及び嘱託等の職員を置くことができる。
 - 3 院長は、宗務長が当る。院長は、宗務を統管する。
 - 4 顧問は、学階勸学を有する者を推薦する。顧問は重要院務につき院長の諮問に応ずる。
 - 5 理事は、院長が任命する。理事は院務を執行する。
 - 6 理事のうち一人を常務理事とし、教学部長が当る。常務理事は、常務を行う。
 - 7 主幹は、院長が任命する。主幹は、院長の命を受け、常務理事と協力して院務を掌理する。
 - 8 書記以下の職員は、院長が任命する。書記以下の職員は庶務に従事する。
- 第六条 院長の任期は、宗務長の在任中とする。
- 1 理事および主幹の任期は三年とし、重任を妨げない。但し、補欠により就任した者の任期は、前任者の残任期間とする。
 - 2 常務理事の任期は、教学部長の在任中とする。

第七条 教学院に研究所を附設し、これに関する規定は、別に定める。

附 則

この規程は、発布の日から施行する。

この規程施行に必要な細則は、別に定める。

二、教学院研究所規定

第一条 教学院研究所を「浄土宗教学院」内に置く。

第二条 教学院研究所（以下「研究所」という）は左の各部に分ける。

第一部（教理）宗義および仏教の原理的研究およびその時代的发展に関する研究

第二部（歴史）宗門歴史の総合的研究

第三部（実践）寺院および宗門の現状の調査および发展に関する研究

第三条 研究所は左の事業を行う。

一、総会、研究会の開催

二、講義の開催

三、調査其の他必要な事業

第四条 研究所に左の職員を置く。

所長 一人 主幹 一人

指導教授 若干人

所長および主幹は院長の具申により管長が任命する。ただし主幹は教学院の主幹がこれを兼任する。所長は所務を統管し、主幹は所長の命を承け所務を整理する。

指導教授は所長の具申によって院長が任命する。指導教授は各部の研究指導に当る。

職員の任期は三年とし重任を妨げない。但し補欠により就任したる者の任期は前任者の残任期間とする。第一項の職員の外必要により書記、出仕、雇員、囑託等を置くことを得る。

第五条 研究所に研究員および研究生を置く。

研究員は、会員中より理事会の推薦により院長が選任する。

研究員は、所定の研究に従事すると共に研究生の指導に任ずる。

研究生は、本宗関係の大学卒業生および相当の学力を有する者と認められた者の中より理事会の推薦により院長が採用する。

研究生は所定の部に属し研究に従事する。研究員および研究生の任期は一年として院長が指定する。

第六条 宗務所は研究所に対し必要な監督を為し、特殊の調査研究を命じ、または研究生を委託することを得る。

第七条 研究所に嘱託および聴講生を置くことを得る。

附 則

本規定は発布の日から施行する。この規定施行に必要な細則は別に定める。

この規定は昭和三十一年四月一日より施行する。

浄土宗学大会発表題目

第一回浄土宗学大会

期日 昭和二十一年十一月六・七日

会場 京都市仏教専門学校講堂

開会式

挨拶 安井 大学

挨拶 大会会長 小西 存祐

挨拶 大学院院長代理 眞野 正順

研究所経過報告 眞野 正順

指導講演 眞野 正順

共同研究「浄仏国土思想」

研究序説 大野 法道

正傍両明經典に於ける浄仏国土思想 江藤 澄賢

導師及宗祖に於ける浄仏国土思想 千賀 眞順

宗祖以後列祖に於ける浄仏国土思想 香月 乗光

因史に於ける浄土映現思想 藤田 寛雅

浄仏国土の哲学的理解 佐藤 賢順

一般研究発表

徳川初期に於ける教団伸張の様相 坪井 俊映

再興日本と浄土教 岸 寛勇

念仏の種々相 藤原 了然

善那教に現れたる十二因縁類型

曇鸞の行観

般若経の浄土思想

奥院四十八巻伝私考

梵文四誓偈に就いて

安善虎角の四義説

宗派心

厭欣思想研究序説

上代支那の鬼神の研究

浄仏国土の原語に就いて

宗門文化史展開の基調

養鶴徹定の考証学的著書

浄土神道論の一考察

現観仏教の発展

エドキンスと徹定

科学的宗教研究の根本問題

本居宣長の浄土信仰

近代思想と浄土教

仏典を読む意味

浄土宗義と倫理

中世に於ける京都の浄土宗教団の研究

松濤 誠廉

藤堂 恭俊

小沢 勇貞

八百谷孝保

伊東 信海

服部 英淳

竹中 信常

阿川 貫達

大村 興道

高島 寛我

宝山 正道

小島 章見

石田 典定

前田 竜海

牧田 諦亮

静永 孝英

前島 俊泉

太田 正元

藤吉 慈海

伊藤 智源

嵐 瑞澂

研究討論会

題目「宗門教学の進むべき方向如何」

座長 真野正順

第二回浄土宗学大会

期日 昭和二十二年十一月二十二・二十三日

会場 大正大学

開会式

開会宣言

宗学大会会長 大村桂巖

法 楽

大本山増上寺法主 椎尾弁匡

挨拶

教 学 院 院 長 里見達雄

経過報告

教 学 院 研 究 所 所 長 真野正順

指導講演

選 択 集 の 阿 弥 陀 仏 説

文 学 博 士 山 本 幹 夫

共同研究「仏身仏土論」

浄土教の仏陀観

佐藤 密雄

阿弥陀仏論

藤原 了然

現代思想より見た阿弥陀仏

田中 順照

仏身仏土論

小沢 勇賞

一般研究発表(第一部会)

浄土宗教判説の一考察

香月 乗光

選 択 集 の 「 集 」 の 意 義

千賀 真順

「念」の意義

山口 察常

願生試論

太田 正元

祖伝成立とその意義

井川 定慶

往生要集の一考察

臼井 憲定

往生論の成立と思想的背景

藤堂 恭俊

浄土の「場」的意義

西川 知雄

往生の意義に就て

江藤 澄賢

浄土教は大乗仏教の傍流か

大野 法道

念仏論

藤吉 慈海

指方立相論

服部 英淳

宗学の基本性格

松崎 可定

浄土学の方法論

田村 圓澄

起請文の史的研究

藤原 弘道

仏教実践論に於ける「称名念仏の特色」

石井 教道

生実檀林に就て

嵐 瑞激

浄土信仰の基礎

後藤 元祐

行信の構造

坪井 俊映

宗乗と智の接触面

松濤 誠麻

宗祖に於ける「宗」の觀念

真野 正順

専雑二修論

阿川 貫達

題未詳

恵谷 隆戒

一般研究発表(第二部会)

中世布教文化の一形態

宝田 正道

翻譯に於ける一問題

春日井真也

近世小説における「うきよ」の展開

藤田 寛海

玉葉の研究 —特に宗祖と兼実—

伊藤 真徹

正始学と王弼

修行位と利他行

如来蔵思想の研究

聖者性

梵文譬喩鬘りに於ける極楽思想

華嚴の時間論

仏教に於ける時間空間の問題

信仰団体の紐帯

宗教的団体の形態

清初の宗教統制

日本仏教初伝の学派

宗教と教育

寺院開帳の歴史的意味

危機意識の構造

般舟三昧研究序説

理仏教と事仏教

徳川時代の進門教学余韻

宗教の社会的意義

聖徳太子仏教への一省察

研究討議会

題目「現代生活と念仏」

座長

真野 正順

場所 仙台市東十番町願行寺

開会式

開会の辞

挨拶

経過報告

祝辞

祝辞

指導講演

原始仏教と浄土教

浄土教の人間論

人間存在の根拠と宗教

一般研究発表

浄土機根論

白河藩に於ける宗侶の教化活動の一事例

本宗高僧のアイヌ教化について

元祖作三部経釈の三類型

東北浄土宗史の一齣

浄土教美術と形像論

智慧と無知について

浄土願生の意義

現世の浄土化

有相と無相

教化における浄土教の人間観

隆寛律師の宗祖大師への入門年代考

渋谷 順誠

渡辺 真海

大学院院長

大学院研究所長

大野 法道

大正大学学長

真野 正順

前大正大学学長

大村 桂巖

仏大学長

高島 寛我

大正大教授

石井 教道

東北大教授

石津 照璽

阿川 貫達

足立 俊雄

恵谷 隆戒

大橋 俊雄

神尾 文猷

小島 章見

佐藤 賢順

佐藤 密雄

佐藤 諦毅

佐藤 良智

千賀 真順

相馬 貫雄

期日 昭和二十五年十月六・七・八日

第三回浄土宗学大会

宗教儀礼の否定的意味

念仏信仰の出発と帰結

宗教教育の効果について

西山の念仏 ― 時と方便 ―

不死信仰の形態

浄土曼荼羅に見る宗義と時代感覚

伯翁問答のモデル

寺院と民衆の結合点

「信方便易行」の句について

指方立相の意義

仏教における行の分類

教学上における初期の増上寺について

中国古代におけるトと巫

法式研究会

研究討議会 (兼布教研究会)

「如何にして現代に念仏信仰を生かすべきか」

第四回浄土宗学大会

期日 昭和二十六年十月二十七・二十八日

場所 東京都港区芝公園十九号地

浄土宗務所講堂

開会式

開会の辞

法楽

竹中 信常

坪井 俊暎

筒井 義定

戸松 啓真

中村 康隆

野々村学念

藤田 寛海

藤山 寛雅

前田 竜海

松崎 可定

松橋 誠廉

村上 博了

安居 香山

渡辺 真海

座長 大野 法道

挨拶 樋

経過報告

祝辞

祝辞

祝辞

指導講演

浄土教学の本質

研究討議会

主題「今後の宗学は如何にあるべきか」

一般研究発表

南画僧白雲について

往生伝成立の基本的理念について

世間道と出世間道

往生要集の研究―その説話的意義について

浄土教に於ける救済の論理

元祖及び門下の経済的研究序説

観経領得以前の曇鸞大師

元祖法然上人と恵心僧都

事々無碍元の道

仏教儀礼の受容について

撰論宗成立の基盤

浄土曼荼羅に表現せる宗義と近代的芸術感情

節子賢に於ける有境説

浄土宗教学院長 渡辺 真海

教学院研究所長 大野 法道

増上寺法主 椎尾 弁匡

浄土宗学監 真野 正順

大正大学文学部長 佐藤 賢順

大正大学教授 阿川 貫達

足立 俊雄

伊藤 真徹

伊藤 智源

魚尾 晃久

恵谷 隆戒

太田 正元

大橋 俊雄

久保田景遠

坂田 良弘

田中 順照

中村 康隆

成田 貞寛

野々村学念

真野 竜海

「吾日童唱」と釈了阿について

宗祖法然上人と茶及び浄土宗と茶道

民俗宗教にみらるる宗教と呪術

八百谷孝保

好川 在善

吉田 宣成

仏教哲学に於ける相即の論理

北海道における浄土教流伝の一例

(函館にある貞治碑を心として)

佐藤 賢順

須藤 隆仙

浄土曼陀羅に表現せる宗義と色相の時代性

山形の寺院に残るキリシタン伝記

ヴァガツトギーターの成立と仏教

浄土宗教団成立史上の地理的考察

安心から起行への必然性について

明治時代における宗侶の養成について

女人往生集と女人往生伝の関係

藤原時代の浄土教の特質

ミリンダパンへの念仏

世親の浄土教について

性瑩独湛の「勸修作副念仏図説」について

浄土教における性仏の問題

浄土三心論

研究討議会

主題「現代人と念仏生活」

第五回浄土宗学大会

期日 昭和二十七年十月二十五・二十六日

会場 東京都港区芝公園十九号地浄土宗務所講堂

開会式

開会の辞

法 楽

挨拶

経過報告

祝 辞

祝 辞

祝 辞

指導講演

進む宗学

共同研究 主題「念仏論」

念仏論の先駆としての古代印度の生天思想

大乘仏教より見たる念仏論

元祖上人念仏義の宗教的特質

宗教儀礼としての念仏

一般研究発表

大正大学長 椎尾 介匡
増上寺法主

宅見 春雄

藤原 了然

小沢 勇貫

中村 康隆

第六回浄土宗学大会

期日 昭和二十八年十一月七・八日

会場 東京都豊島区西巢鴨四丁目 大正大学講堂

開会式

法 楽

千賀 真順

恵谷 隆戒

小島 章見

服部 英淳

石黒 弥致

魚尾 晃久

戸松 啓真

八百谷孝保

佐藤 密雄

大橋 俊雄

久米原達丈

藤山 寛海

野々村学念

挨拶

浄土宗教学院長 渡辺 真海

聖徳太子に於ける信の問題

若林 隆光

経過報告

教学院研究所長 大野 法道

念仏と戒

伊藤 智源

祝辞

教学部長 佐山 学順

漢代の迷信を繞る諸問題

安居 香山

祝辞

浄土宗学監 真野 正順

観經的思惟の成立基盤

久米原達丈

祝辞

東京教区长 望月 信道

四十八卷伝成立を繞る諸問題

大橋 俊雄

祝辞

大正大学文学部長 星野 俊英

中国思想史より見た仏性論

大村 興道

指導講演

念仏の言語学的考察

魚尾 晃久

成等正覚について

大正大学教授 大野 法道

初期大乘に於ける本願の教義

小沢 勇貫

共同研究 主題「浄土論」

宗祖の授戒と臨終行儀

中村 康隆

浄土論

服部 英淳

念仏の事的性格

佐藤 良智

平安朝に於ける浄土觀の庶民的性格

伊藤 真徹

日本天台に於ける浄土觀

恵谷 隆戒

浄土觀の発達

千賀 真順

現代哲学の浄土教論

佐藤 賢順

宗教心理学より見たる浄土信仰

竹中 信常

主題「現代生活と浄土往生」

一般研究発表

石黒 弥致

メナンドロスについて

戸松 啓真

三心について

伊藤 唯真

明治仏教徒の危機意識と学問

須藤 隆仙

—福田行誠上人をめぐって—

峰崎 成孝

北海道開教事情の史的考察

峰島 旭雄

浄土論

野々村学念

仏教とギリシャの靈魂觀

真野 竜海

浄土曼陀羅と世觀像心理律動

真野 竜海

浄土の語について

真野 竜海

仏教論叢一覽

第一輯 (昭二十二・二十一)

指導講演

浄仏国土論と浄土教

望月 信亨

梵文四誓偈に就いて
(歴史)

伊東 信海

共同研究

浄仏国土思想の共同研究序説

大野 法道

徳川初期に於ける教団伸張の様相
宗門文化史研究序説
古経堂徹定の考証学的著書
浄土教神道論の一考察
エドキンスと徹定

坪井 俊映

正傍両明経典の浄仏国土思想

江藤 澄賢

善導・法然の浄仏国土思想

千賀 真順

作歌より見たる本居宣長

前田 謙亮

列祖に於ける浄仏国土思想

香月 乘光

中世京都に於ける浄土宗教団の様相

嵐 瑞澂

国史よりみたる浄土映現思想

藤田 寛雅

浄土教史の一断面
(仏教)

中村 康隆

浄仏国土の哲学的理解

佐藤 賢順

一般研究

(宗教)

般若経の浄土思想

小沢 勇貫

耆那教に現れたる十二因縁類型
仏教に於ける人間の在り方
現観仏教の発展

松濤 誠廉

念仏の種々相

藤原 了然

勝鬘経義疏に現れたる如来蔵思想

前田 竜海

選択集と論語

林 隆碩

宗乘学への提言

成山 貞寛

往生論註の教理的意義

藤堂 恭俊

仏典を読む意味
(思想)

佐藤 密雄

安替虎角の四義建立

服部 英淳

宗派心

藤吉 慈海

願生浄土と浄仏国土

田中 順照

上代支那の鬼神の研究

竹中 信常

厭欣思想の研究序説

阿川 貫達

再興日本と浄土教

大村 興道

宗学の方向

松崎 可定

岸 覚勇

科学的宗教研究の根本問題

近代思想と浄土教

浄土宗義と倫理

静永 孝英

太田 正元

伊藤 智源

法然入信体験に於ける恵心普導の宗教学的意味

浄土の場的意義

浄土宗裁判の一考察

「念」の意義(遺稿)

白井 憲定

西川 知雄

香月 乗光

山口 察常

第二輯(昭二十四・二)

指導講演

選択集の阿弥陀仏観

共同研究

浄土教の仏陀観

阿弥陀仏論

現代思想より見た阿弥陀仏

仏身仏土論

一般研究

山本空外(幹夫)

佐藤 密雄

藤原 了然

田中 順照

小沢 勇貫

浄土教は大乗仏教の傍流か

般舟三昧研究序説

如来蔵思想研究序説

往生清浄説

華嚴経の時間論

仏教に於ける時間空間の問題

修業位と利他行

翻譯に於ける一問題

理仏教と事仏教

(歴史)

日本仏教初伝の学派

聖徳太子仏教への一省察

玉葉の研究

起請文に現われた中世人の信仰

中世布教文化の一形態

生実檀林の役割

徳川時代蓮門教学余韻考

近世小説に於ける「うきよ」の展開

清初の宗教統制

大野 法道

池口 政方

成田 貞寛

石黒 弥致

佐藤 賢順

宅見 春雄

前田 竜海

春日井真也

佐藤 良智

徳武 真有

若林 隆光

伊藤 真徹

藤原 弘道

宝山 正道

嵐 瑞激

小島 章見

藤山 寛海

牧田 諱亮

(宗学)

各山歴代聖書の研究略弁

仏教実践論に於ける称名念仏の特色

浄土宗学の基本性格

浄土学の方法論

念仏論序説

選択集に於ける集の意義

行信の構造

往生論の成立と其思想的背景

往生に就ての一考察

願生思想の哲学的考察序論

鈴木 靈真

石井 教道

松崎 可定

田村 圓澄

藤吉 慈海

千賀 真順

坪井 俊映

藤堂 恭俊

江藤 澄賢

太田 正元

(思想)

- 宗乗と智の接触面
- 浄土信仰展開の理論
- 危機意識の構造
- 聖者性
- 宗教の社会的意義
- 宗教団体の紐帯
- 正始学と王弼
- 宗教的集団の形態

第二号 (昭二十九・三)

指導講演

- 成等正覚について
- 浄土教学の本質
- 宗乗および宗史

浄土論

- 平安時代に於ける浄土観の庶民性
- 浄土論 — 衆生の願楽としての —
- 初期大乘に於ける本願の教義
- 四十八巻伝成立を繞る諸問題
- 三心について

一般研究

- メナンドロスについて
- 浄土曼陀羅と直観像心理律動

- 松濤 誠廉
- 後藤 元裕
- 吉田 宜成
- 竹中 信常
- 稲岡 順雄
- 三枝樹正道
- 安居 香山
- 中村 康隆

- 大野 法道
- 阿川 貫達

- 服部 英淳

- 伊藤 真徹
- 峠崎 成孝
- 小沢 勇貫
- 大橋 俊雄
- 戸松 啓真

- 石黒 弥致
- 野々村学念

聖徳太子に於ける信の問題

- 觀経縁起考 — 觀経的思惟の成立基礎第一部 —
- 仏性論より見た中国の性説
- 漢代の俗信を繞る問題
- 特に風俗通にみる応劬の立場について —
- 念仏と戒
- 称名の言語学的考察
- 浄土の語について
- 明治仏教徒の危機意識と学問
- 福田行誠上人をめぐる —
- 北海道開教事情の史的考察
- 宗祖の無常観について
- 仏教とギリシヤ靈魂観
- 三界と浄土

第四号 (昭三十一・三)

指導講演

- 浄土教の再認識
- 宗乗および宗史
- 宗義と現益
- 法然教学に於ける選択と統攝
- 専修念仏停止運動 — 興福寺奏状をめぐる —
- 法然上人の学風
- 法然の法説を中心とする他力論考

第四号 (昭三十一・三)

指導講演

- 浄土教の再認識
- 宗乗および宗史
- 宗義と現益
- 法然教学に於ける選択と統攝
- 専修念仏停止運動 — 興福寺奏状をめぐる —
- 法然上人の学風
- 法然の法説を中心とする他力論考

- 岩林 隆光
- 久米原達丈
- 大村 興道
- 安居 香山
- 伊藤 智源
- 魚尾 晃久
- 真野 竜海

- 伊藤 唯真
- 須藤 隆仙
- 中村 良観
- 峰島 旭雄
- 佐藤 賢順

- 椎尾 弁匡
- 阿川 貫達
- 小沢 勇貫
- 伊藤 真徹
- 千賀 真順

- 藤原 了然

浄土修道の方法 — 四修について —
近世白旗派教団に於ける諸門流統合の過程に就て
法然上人阿弥陀仏觀の特異性

一般研究

教団構造の社会的適応の問題
婆沙論所出諸論教説に就て
明治維新の本質と寺檀關係

聖僧についての一考察 — 藤原時代の公卿と聖と —
Mahāvīryapāṭi の編纂年代について
— G. Tucci 教授の最近の業績より —

鎌倉時代に於ける自然法爾思想
三性についての一考察

第五号 (昭三十一・十一)

共同課題

平安時代の浄土思想

— 特に源信以前の叡山を中心として —

平安朝における善導の往生受容に就て

宗乗および宗史

知恩院所蔵「礼仏懺悔作法」について

諸行生不論の関点

往生要集の見方 — 法然上人の選択眼に学ぶ —

浄土教と情意の論理

番場時來 — 浄土宗一向派教団の性格について —

戸松 啓真

大橋 俊雄

大屋 瑞彦

竹中 信常

宅見 春雄

竹田 聰洲

伊藤 唯真

香川 孝雄

梶村 昇

近藤 徹称

仏身論の一考察 — 特に法然、親鸞を中心に —

法然と親鸞に於ける信仰の構造

義寂の四十八願觀

一般研究

婆沙論所収諸論師所屬部派について
罰とたたりの系譜
思円上人の太子觀
外道と異端

古代仏教と白度僧
増・阿含經における誓願思想
Prāṭihārī について
神子問答に就いて

日本上代に於ける觀音信仰の形態

第六号 (昭三十三・三)

指導講演

教学に対する問題

共同課題

法然教団の教団組織に就て

— 特に法然上人御法語を中心として —

宗乗および宗史

仏性と浄土宗教義 — 導綽と涅槃經 —

「七箇条の起請文」に就いて

「十二問答」について

大屋 瑞彦

梶村 昇

中岡 隆善

宅見 春雄

竹中 信常

成田 貞寛

峰島 旭雄

伊藤 唯真

香川 孝雄

近藤 徹称

鈴木 成元

成田 俊治

佐藤 密雄

大橋 俊雄

千賀 真順

阿川 文正

梶村 昇

「三部經大意」について

初期浄土教典籍の伝来についての一考察

隆堯法印の著書

善導の実践的立場

一般研究

鎌倉時代に於ける諸宗融會合行説

―特に無住一円について―

部派所説の三世区分について

宗教的状況の転機としての死

貞慶の釈迦信仰系譜

金剛針論漢訳攷

宗教的実存

―G・マルセルについて―

補陀落信仰の性

特別寄稿

起信論の観について

第七号(昭三十三・十二)

指導講演

椎尾大僧正「無量仏」

共同研究

十夜念仏と亥子、十月夜の行事

来迎会の形態と意義

特別研究

戸松 啓貞

滝 安雄

鈴木 成元

中岡 隆善

伊藤 真徹

宅見 春雄

竹中 信常

成田 貞寛

香川 孝雄

峰島 旭雄

成田 俊治

松濤 誠廉

彈誓上人の信仰

比丘の三衣と比丘尼の五衣について

魂の医術

ひじりの持つ側面的性格

宗乗および宗史

末法思想と浄土教の実存

「安心起行作業抄」に就いて

―伝法然上人撰述書研究其一―

観智国師について

再び法然上人に関する問題について

浄土開宗に関する法然像の形成

―特に承安五年浄土開宗説の創唱―

兼信因果の立場について

現代に生きる浄土教

宗祖円光大師二十五霊場思想の生起について

正如房へつかはす御文 ―法然上人語録研究―

一般研究

煩惱の語について

―特にクレーシヤとカシヤーヤの用語を中心に―

般舟三昧經を繞る一考察

婆沙論所収の大衆部教義に就て

日本上代仏教美術に於ける色彩と文様について

―特に天寿国曼荼羅及び当麻曼荼羅を中心

として―

伊藤 真徹

佐藤 密雄

竹中 信常

成田 俊治

恵谷 隆波

大橋 俊雄

鈴木 成元

千賀 真順

坪井 俊映

松崎 可定

峰崎 成孝

村上 博了

阿川 文正

石上 善心

香川 孝雄

宅見 春雄

服部 英淳

服部 佐智子

比較文学と比較哲学
初期仏教教団の経済現象

峰島 旭雄
宮林 昭彦

Ⅱ 仏教文化研究所の設立

創設とその意趣

仏教文化研究所は、前浄土門主学士院会員文学博士望月信亨先生が、苦心創立經營せられた東京の大火正大学を退いて、黒谷金戒光明寺法主として京都に在任せられるようになった時に創立せられた。すなわち望月仏教文化研究所を継承発展したものである。

仏教文化研究所は、七十四歳、教育の第一線から引退せられた昭和十七年に先生が黒谷清心院に創設せられ、爾来、戦争、敗戦、降伏の悲境苦境の中に泥迷する日本の最緊要事のひと考えられた文化科学の振興、青年学徒の育成に終始熱情を献げて經營せられた、先生の最後の事業であり、宗門が引きついで先生の尊い遺児であった。先生の後をうけて総本山知恩院門主をつがれた岸門主と宗門当局とは、よく故先生の遺志を継承、これを総本山の事業として発展せしめることとなり、今日の組織を見ることになったものである。

学問が深くなればなるほど、自己の達し得ざりしところ、未知の世界のいよいよひろいことが自覚されるものである。老先生が研究所創立以来、私どもにたえず訓戒され策励せられたことは、「ひろい視野に立つ」ことである。「浄土宗学は浄土宗全書の研究をもってすべきものではない。現在の世界文化の中に、現代世界の思潮の関連の中に浄土宗学は研究せられ把握されなければならぬ。仏教の研究はただ仏典の研究のみにちぢまってはならぬ。ひろくあらゆる社会現象、あらゆる文化事業との関連において考察するべきであり、現代の進歩やまざる諸文化科学はもちろんのこと、自然科学の進歩にも手をつないで、進んでいかなければならぬ」ということであった。けだし老先生は自らの学績を反省されつつ、自ら

なさんとして尚なし得ざりしところ、進まんと欲してももはや進みがたい方向へ向ってわれわれ後継の学徒を進ましめよ
うと熱望せられたのである。わが研究所はこの精神とこの遺訓を継承して進む。「浄土宗内に孤立する浄土学、仏教内に
孤立する仏教学」をのりこえることを忘れずに研究所員は互いに相はげまし精進しつづけたのである。

事業

一、研究部門

仏教文化研究所創設当初の研究会はつぎのとおりである。

法然上人絵伝研究会

各宗高僧の中で、法然上人ほど多数の伝記を有していただける方はない。その多数の伝記を集大成したものと思われるのが所謂勸修御伝と称せられる法然上人行状絵図四十八巻である。原本は知恩院に存して国宝に指定せられている。その数量の龐大なると、絵図の優秀なる点に於て、我が国絵巻物中屈指のものとせられている。しかしこの伝記が諸種の伝説を集成せるために、今日の歴史研究より明らかに誤謬である点も指摘せられ、又この伝記の意図する立場より材料の取舍に批判を加えられる点も少くないのである。つねに宗門の立場を堅持しながらも、歴史的事実を事実として、宗祖法然上人の姿をはっきりと浮び上らせることは私共のつとめである。

私は仏教専門学校在職中、この宗祖の伝記を受持って居った関係上、退職後の宗祖の伝記につねに心を寄せて、事情が許せば余生を宗祖の伝記の研鑽に捧げたいと念願して居った。またたま乏しきを以て昭和二十三年十月当華頂山に晋董することとなり、親しくこの四十八巻の絵伝の原本に接する機会も多く、祖徳鑽仰の思いは、しお深められて行くのであった。幸に当山には前門主望月僧正の創設せられた仏教文化研究所があって、研究員も選任せられ、有為の学徒がそれぞれ専門の研究に従事している。研究員の指導に當っていられる塚本善隆博士に、かねて私の抱いて居ったこの四十八巻伝の綿密なる研究に就ての希望を話した時に研究所の共同研究としてこの四十八巻伝の研究を取り上げることとなった。そうして十年後に迎える宗祖の七百五十年遠忌の記念事業中の学的労作の一つとすることとなった。

第一回の会合を二十四年の八月二十九日に古経堂に開き、研究の方針等について話し合った。宗義、歴史、美術、風俗等、関係ある部門の総合研究を進めることとし、一宗の内に限らず、外にも呼びかけて好意ある有志の参加を求めることとなった。

研究所員は塚本博士を初めとして、藤吉慈海、牧田諦亮、春日井真也、田村圓澄、藤堂恭俊、塚本俊孝等の諸氏であり、宗門内からは黒谷千葉良導法主、小西存祐、千賀真順、伊藤真徹、坪井俊映、定恵苗、井川定慶、須賀隆賢、村上妙清尼、西田直二郎博士等が出席せられ、西山派からは稲垣真哲、森英純の諸氏、西本願寺からは、禿氏祐祥博士、東本願寺からは日下無倫、多屋頼俊の諸氏、京都博物館からは梅津次郎、東京美術研究所島田修二郎、京都学芸大学の下店静市等の諸氏、郷土史研究家の田中緑紅氏等が参加せられる外、奈良博物館亀田孜氏は円光大師絵伝残闕の詞書を、大阪美術館長望月信成氏は四巻伝系統に属する残闕の絵の部分、それぞれ研究資料として提供せられた。

月一回平均に例会を開くこととし、二十四年度には、法然上人の伝記類について、井川定慶・禿氏祐祥両氏の研究発表あり、次いで田中緑紅氏の京都に於ける法然上人の遺跡に関する郷土史的な解説があり、愈々四十八巻伝の講読研究に入り、藤堂恭俊氏の各種伝記の序文の比較研究の発表があった。二十五年度は第五巻までの研究を終り、この間に田村圓澄氏の法然伝に就て、同志社大学の石田一良氏の鎌倉時代の肖像と絵伝の文化史的研究、東京博物館の島田修二郎氏の四十八巻伝と九巻伝との比較対照を主として絵画の方面よりせる綿密なる研究発表があった。これらの中、田村氏の発表は仏教史学第二巻第一号に、石田氏の発表は文化史学第二号に、それぞれ公表せられ、島田氏の研究は雑誌美術研究に発表せられた。二十六年度は第六巻より研究を続けた。

最近に京都を中心にして、四巻伝の系統の法然上人伝の断簡が諸所に発見せられるようになった。京都博物館の梅津次郎氏が苦心収集して、その研究発表を国華（二十五年十二月号）に載せられた。かくの如く近時、法然上人の絵伝の研究が宗門外の学徒によってなされ、その労作が相續いて発表せらるることはまことに感謝にたえざるところで、宗門内の学徒を刺戟することも大きい。かくして世人の関心を法然上人の上に集めつつ、七百五十年の遠忌を迎える態勢をととのえることのできるのには宗侶としての大いなる喜びである。（岸信宏記）

南海寄帰内法伝研究会

自分はどうしたわけか、仏典の内でも殊に律部に関するものが好きで、戦災前大阪の自坊でも、若干の同志と語らい南海寄帰伝の講読をやったことがある。その後、期間は短かったが一時祖山の内局に職を奉ずる身となり、自然に専修道場などにも関係をする事になって、少壮学徒諸君の要望に励まされ、またぞろ、寄帰伝の講読を始める事になった。

寄帰伝二巻はあらためて贅するまでもなく、法顯三蔵の仏国記（一卷）、玄奘三蔵の西域記（十二巻）と共に、東洋学芸の三大文献とも称せらるべきもので、どちらかといえば、我国の学者よりも諸外国の学者の間に珍重がられているといった始末である。殊に面白いことには、仏国記が純然たる旅行記であり、西域記がわが風土記のように一種の地理書であるのに対して、寄帰伝が西暦七世紀（わが推古朝）前後の印度、南海の諸州における僧院生活の実状を伝えていることである。勿論われわれは、そうした上代の僧院生活をそのまま直訳的に、現代に適用しようなどは毛頭考えてはいないが、そうした古代の生活を通じて、その本源に溯り、その精神を偲ぶことによって、自分の現在に寄与したいと思うからである。

註釈としては次のようなものがある。

(1) 解纜鈔（八巻）。葛城の慈雲和上（飲光）が宝曆八年、高野山の真源阿闍梨の激励により註解を施されたもので、法孫の徹洞師（小豆島肥土山）が伝本と会本にせられたものが、仏教全書の遊方伝叢書第二に編入されている。なお自分はまだ能く検べてはいないが、最近仏大の図書館で、解纜鈔の古い写本を覧たことがある。

(2) 私記（四巻）。作者伝らず。写本で高野山大学の図書館に在る。間々有益な註釈が加えられている。

(3) 講義（四巻）。脇谷攝謙師の作。仮名書きの註釈で、写本である。大体の分科を挙げて、一節宛達意的に解説されている。谷大の図書館に現存。

(4) 草訳（Record of the Buddhist Religion）。明治二十九年（西186）高楠博士が、英国牛津大学の印刷局から刊行せられたもので、地図もあれば脚註もあり、また有益な解説も添えてある。初学者にとっては無上の好参考書である。それ

で本伝を通読するには先の解纜鈔と本書とがあれば、大体的見当はつくわけである。(小西存祐記)

宗義研究会

遠くは山崎弁栄上人を師父と仰ぐ光明主義運動が浄土宗内におこり、或は椎尾博士を中心とする共生運動が盛んとなり、さらには若き日の友松円諦師が『我等の希念する浄土教』を書いたりして浄土宗義の近代化が言われてから既に相当の年月をけみしている。然るに浄土の教義や宗義が一体どれだけ近代化したであろうか。成果が出ないまでもすべての浄土教者がどれだけ真剣にこの問題を取挙げて問題として来たか。そして何等かの見通しがついたであろうか。この問題が今日の浄土教にとって最も緊要にして根本的な問題であるだけに、誰しもその成果が待ち遠しく、ある種のもどかしさを感じずにはいられない。

そこでこの問題は他人にまかせず、自らが先ず真剣にこの問題と取組むべきであると思ひ、研究所の宗学研究班員が相談して法然上人の教義を現代の意識でどのように処理してゆくかの問題を検討してみた。それには先ず生まの法然上人の宗教体験に肉迫することが根本的に必要なことではあるが、上人に続いて出られた二祖や三祖が宗祖をどのようにみていられたか。そして二祖や三祖はその当時どのように宗祖を取扱って来られたか。さらには宗祖の滅後二祖や三祖はどのようなことを問題として取挙げられたかを詳しく現代の意識で解剖してみようではないかとの議がまとまった。そこで取挙げられたのが二祖の『西宗要』であった。小西存祐師を中心に塚本博士をはじめ若い研究所の宗義研究班員が主体となつてこの『西宗要』を会読し、そこで問題となつているところを検討し、それが現代の問題と如何なる関連を持ち、それがわれわれの今日の問題を如何に解決してくれるかをつぶさに検討してみようと試みた。会合は毎月一回、知恩院に於いて岸門主をはじめ千葉黒谷法主や仏教大学の若い教授の方々も参加されて、先ず会読の方法論が数回に亘つて論議された。そして方法として採用されたものが大体右にのべた如き研究の仕方である。西山派の稲垣真哲師も毎回かかさず参加せられ側面から色々と有益な意見を提出される。師はわれわれのこの方法を巧みに評せられて曰く、「要するに法然上人をはだかにして、親しくその体温に触れ、随分永く着ていられたお衣を洗濯し、破れたところがあればよくつくり、そのお

衣がまだ着られるものならもう一度おきせ申しませう。しかし、もしそのお衣がもはやお着せ出来ないほどいたんでい
るなら、ここで一つ奮発して新しい着物を新調し法然上人に着て頂くのではないか。その仕事がわれわれの任務である」
と。もって宗義研究会の方法と雰囲気とを推察して頂きたい。われわれ研究班員は宗祖にお着せ申し、また白らが着用す
べきニューファッションドスタイルを広く天下に募集するにやぶさかではないが、それは白らの努力と責任とを回避しよ
うとする意志では毛頭ない。(藤吉慈海記)

仏教文化研究員・研究テーマ

昭和二十六・二十七年度(二号所収)

昭和二十五年度(一号所収)

共同研究

- 一、法然上人四十八巻伝の研究 班長 岸 門 主
- 一、西宗要の基礎的研究 班長 小西 存祐
- 一、僧史略研究 班長 塚本 善隆

個人研究

- 第一部 宗学
 - 一、浄土教の課題 藤吉 慈海
 - 一、法然上人伝の研究 田村 圓澄
 - 一、浄土教体系の原典的研究 春日井真也
 - 一、曇鸞教学の研究 藤堂 恭俊
- 第二部 仏教学
 - 一、中国仏教成立期の研究 塚本 俊孝
 - 一、中国近世仏教史の研究 牧田 諦亮

個人研究としては前号の彙報所掲の各研究員の研究が継続されて
いるほか、左記の諸君が新たに研究員として任命され、各その研究
に従事している。

- 一、日本上世における浄土教の発達 香月 乗光 (二六、五、一)
 - 一、聖岡上人の研究 諸戸 素純 (二七、七、二二)
 - 一、一言芳談の研究 三田 全信 (二七、七、二九)
- また、昨年より浄土宗社会事業史の研究に従っていた研究生松尾英
俊君は辞任し(二七、五、一四)、新たに左記諸君が研究生に任命さ
れた。
- 一、選撰集の研究 岡田 玄哉 (二七、六、一〇)
 - 一、鎌倉時代の浄土教 高根 俊成 (二七、七、二九)

一、仏教社会事業史

花田 順信

(二七、七、二九)

一、仏教用語の解説

小林 義弘

(二七、八、五)

昭和二十八年年度 (三号所収)

現在本研究所において研究に従事している研究員および研究生とその研究題目は左の通りである。(五十音順)

研究員

一、宗教の必然性 —— 特に社会的考察 ——

稲岡 順雄

一、浄土教体系の原典的研究

春日井真也

一、日本上世における浄土教の発達

香月 乗光

一、一言芳談の研究

三田 全信

一、法然上人伝の研究

田村 圓澄

一、中国仏教成立期の研究

塚本 俊孝

一、曇鸞教学の研究

藤堂 恭俊

一、浄土教の課題

藤吉 慈海

一、中国近世仏教史の研究

牧田 諦亮

一、聖岡上人の研究

諸戸 素純

研究生

一、仏教用語の解説

小林 義弘

一、選択伝弘決疑鈔の研究

新保 義道

一、鎌倉時代の浄土教

高根 俊成

一、仏教社会事業史

花田 順信

一、如来藏思想成立に関する研究

水谷 幸正

一、仏教のシナにおける展開とその形態

—— 鳩摩羅什を中心として ——

山下 英次

昭和二十九年年度 (四号所収)

本研究所の研究員、研究生とその研究題目は、現在次の通りである。(五十音順)

研究員

一、宗教の必然性 —— 特に社会的考察 ——

稲岡 順雄

一、浄土教体系の原典的研究

春日井真也

一、日本上世における浄土教の発達

香月 乗光

一、一言芳談の研究

三田 全信

一、法然上人伝の研究

田村 圓澄

一、中国仏教成立期の研究

塚本 俊孝

一、曇鸞教学の研究

藤堂 恭俊

一、浄土教の課題

藤吉 慈海

一、中国近世仏教史の研究

牧田 諦亮

一、聖岡上人の研究

諸戸 素純

研究生

一、仏教用語の解説

小林 義弘

一、選択伝弘決疑鈔の研究

新保 義道

一、鎌倉時代の浄土教

高根 俊成

一、仏教社会事業史

花田 順信

一、如来藏思想成立に関する研究

水谷 幸正

一、仏教のシナにおける展開とその形態
——鳩摩羅什を中心として——

山下 英弑

昭和三十年年度（五号所収）

本研究所の研究員、研究生とその研究題目は、次の通りである。

（五十首順）

研究員

- 一、宗教の必然性 ——特に社会的考察—— 稲岡 順雄
 - 一、浄土教体系の原典的研究 春日井真也
 - 一、日本における浄土教の発達 香月 乗光
 - 一、一言芳談の研究 三田 全信
 - 一、法然上人伝の研究 田村 圓澄
 - 一、中国仏教成立期の研究 塚本 俊孝
 - 一、曇鸞教学の研究 藤堂 恭俊
 - 一、浄土教の課題 藤吉 慈海
 - 一、中国近世仏教史の研究 牧山 諦亮
 - 一、漢訳仏典の語学的研究 水谷 真成
 - 一、聖岡聖人の研究 諸戸 素純
- 研究生
- 一、支那華嚴宗成立に関する研究 梅辻 昭音
 - 一、南北朝時代における如来蔵義の研究 加藤 善淨
 - 一、初期大乘仏教の研究 賀幡 亮俊
 - 特に部派思想との関連—— 小林 義弘
 - 一、仏教用語の解説

一、選択伝弘決疑鈔の研究

新保 義道

一、鎌倉時代の浄土教

高根 俊成

一、近世仏教の本山及び本末制度の研究

——知恩院日鑑を中心として——

平 祐史

一、仏教社会事業史

花田 順信

一、如来蔵思想成立に関する研究

水谷 幸正

一、宗教経験における理性と心情との関係についての研究

——特にパスカルを中心として——

南 慈朗

一、仏教のシナにおける展開とその形態

——鳩摩羅什を中心として——

山下 英弑

昭和三十一年度（六・七号所収）

研究員・研究生の研究課題

研究員

- 一、浄土宗史の研究 嵐 瑞澂
 - 一、仏教美術の研究 ——特に肖像画—— 裏辻 憲道
 - 一、法然上人の浄土教思想 西川 知雄
 - 一、漢代宗教思想の研究 安居 香山
 - 一、教育者としての法然上人 山田 智旭
- 研究生
- 一、中国仏教思想の研究 石原 良純
 - 特に浄土思想の展開—— 佐藤 宏賢
 - 一、選択集の研究 沢田 謙照
 - 一、空思想における実践の問題

一、原始仏教の研究

竹本 寿光

一、明治仏教史の研究

田村 圓澄

研究題目の変更

(三十一年以降の就任者)

一、浄土教理史の研究

藤堂 恭俊

一、浄土宗史の研究

三田 全信

二、浄土教の原理に関する研究

香月 乗光

二、編集部門

仏教文化研究所においては、昭和二十六年より昭和三十七年までの間に、右記図書について編集および刊行を行なった。

一、研究年報

仏教文化研究所編 仏教文化研究

第一号より第十一号まで

二、研究報告

牧田諦亮著 策彦入明記の研究

上A5版 三九六頁 一二〇〇円
下A5版 三五八頁 八〇〇円

田村圓澄著 法然上人伝の研究

A5版 三二二頁 七〇〇円

牧田諦亮著 中国近世仏教史研究

A5版 三一頁 八〇〇円

藤堂恭俊著 無量寿経論註の研究

A5版 二六五頁 六五〇円

三田全信著 浄土宗史の諸研究

A5版 五四四頁 一二〇〇円

三、仏教文化叢書

藤吉慈海著 印度セイロン紀行

A5版 四二八頁 七〇〇円

ク 編 ビ ル マ 遊 記

B6版 一七六頁 二五〇円

四、その他

塚本善隆著 魏書釈老志の研究

A5版 五四四頁 一五〇〇円

仏教文化研究所編	漢藏三訳対照如来蔵經 B 5版	一三二頁	三〇〇円
法然上人伝研究会編	法然上人伝の成立史的 研究 三卷 A 4版	岡版 一二二頁 本文 三七六頁 各卷 二〇〇〇円	
聖典編集委員会編	新編浄土聖語集 B 6版	三一六頁	三〇〇円
ク	新訳浄土聖語集 B 5版	一一〇頁	二〇〇円

三、仏教文化研究所研究会

昭和二十五年五月以降ひらかれた各種研究会は次のとおりである。

昭和二十五年

五月 一日	法然上人絵伝研究会	七月 二十日	僧史略読書会	
五月 二十二日	同	七月 二十二日	法然上人絵伝研究会	
六月 十五日	研究発表会	七月 二十七日	僧史略読書会	
	宗教学の立場と限界	八月 三日	同	
	法然上人伝の研究	九月 二日	法然上人絵伝研究会	島田修二郎
六月 二十九日	法然上人絵伝研究会	九月 七日	僧史略読書会	
同 日	僧史略読書会	九月 十四日	同	
七月 六日	同	九月 二十八日	所員研究会	安居 香山
七月 十三日	同	同	支那の占卜について	
七月 十五日	研究発表会	同 日	僧史略読書会	
	法然上人伝の研究	十月 一日	法然上人絵伝研究会	
	浄土教の課題	同 日	宗義研究会	
		宗義研究の方法		小西 存祐
		十月二十二日	所員研究打合せ会	

十一月 一日 宗義研究会『西宗要』会誌

十一月十一日 所員研究会学報編纂打ち合せ

十二月 三日 法然上人絵伝研究会

十二月二十七日 僧史略読書会

同 日 研究発表会

北魏の仏教受容について

昭和二十六年二月三日

法然上人絵伝研究会

同 日 研究発表会

宋初の仏教史観

二月二十四日 研究発表会

石刻より観たる北魏浄土教の性格

三月 三日 法然上人絵伝研究会

三月二十五日 研究発表会

新宗乗形成の試論

昭和二十六年年度

五月二十六日

悪人正機説について

六月二十九日 『仏教文化研究』第一号合評会

七月 二十日

仏教における批判的精神の問題

九月二十九日

見生の論理と無生の論理

論文評 専修念仏の受容過程(田村圓澄君稿)

十一月 十日

日本上代における薬師信仰と浄土教

十二月十四日

慈鎮と法然

昭和二十七年二月十二日

Saichō and Ariha

彭際清と其の思想

二月二十三日

中国における密教受容

無量寿経の原典的研究

三月 八日

浄土教の機根について

華嚴経寿命品における弥陀浄土

昭和二十七年年度

五月 三十日

全真教の成立について

六月 二十日

無量寿経にある聞信偈について

論文評 浄土宗確立過程における法然と兼実との関係

(重松明久氏稿)

七月二十二日

支那における民俗仏教成立の一過程

香月 乘光

香月 乘光

梅溪 昇

藤堂 恭俊

牧田 諦亮

藤堂 恭俊

牧田 諦亮

塚本 俊孝

塚本 俊孝

春日井真也

田村 圓澄

田村 圓澄

香月 乗光

香月 乗光

春日井真也

塚本 俊孝

塚本 俊孝

春日井真也

春日井真也

田村 圓澄

田村 圓澄

牧田 諦亮

牧田 諦亮

論文評 法然と永観(井上光貞氏稿)

田村 圓澄

昭和二十八年一月二十四日

なお二十七年六月十八日に知恩院古経において浄土宗教学院京都研究会と本研究所との合同研究会を左のとおり行なった。

仏教学における二、三の問題
——二分依他性と空の問題——

田中 順照

現代における宗学研究の課題

千賀 真順

書評 中国仏教史(高雄義堅氏著)

牧田 諦亮

法然上人研究の動向

田村 圓澄

論文評 中岡浄土教家の研究(小笠原宣秀氏著)

高根 俊成

その他、法然上人伝研究会が、二十六年五月二十九日、七月二十日の両度公開して行われ、二十七年一月より毎週一回非公開により行われている。

二月二十八日
如来蔵思想研究序説

水谷 幸正

一遍上人と神祇

田村 圓澄

書評 原始仏教思想の研究(舟橋一哉氏著)

春日井真也

書評 玄奘三蔵(前島信次氏著)

春日井真也

印度仏教史の性格(水野弘元氏著)「竜谷大学論叢」
三十周年記念号

香月 乗光

哲学的文化(中村元氏他教氏著)

春日井真也

蓮華蔵世界と極楽浄土

春日井真也

策彦入明記管見

牧田 諦亮

書評 印度仏教銘文(静谷正雄氏著)

春日井真也

一言芳談の撰者について

三田 全信

論文評 師 解題(金山正好氏稿)

三田 全信

「仏教文化研究」第二号合評会(第二回)

春日井真也

四月二十七日
観無量寿仏経の諸問題

春日井真也

十一月二十四日

藤堂 恭俊

南唐の帝室と仏教

塚本 俊孝

難易二道説の形成

春日井真也

五月九日

牧田 諦亮

書評 唯識學術語索引(稲葉正就氏著)

諸戸 素純

伯史略の世界

春日井真也

十二月十八日

諸戸 素純

金剛般若経における塔崇拜の問題

春日井真也

仏教教団の本質について

諸戸 素純

金剛般若経における塔崇拜の問題

春日井真也

如来蔵の識説的理解 —— 六朝仏教の一特相 —— 藤堂 恭俊

五月二十三日

観無量寿仏經の翻譯と成立 春日井真也

六月 六日

浄土宗義發達の跡を辿りて 岸 覚勇

書評 IRANO-INDICA(H. WEALEY)

形態論より見たる西蔵語文法(稲葉正就氏田辺一

郎氏共著) 春日井真也

七月 四日

祖先崇拜の社会的基盤 稲岡 順雄

神仏習合について 田村 圓澄

七月 十八日

十住毘婆沙論漢訳考 藤堂 恭俊

書評 安慧唯識三十頌釈論(宇井伯寿氏著)

護法 四訳 对照唯識二十論研究(宇井伯寿氏著) 水谷 幸正

護国尊者所問經(Ensink) 春日井真也

九月 十五日

選訳要決の撰者について 三田 全信

書評 プラフマナとシユラウタストラとの關係(辻直

四郎氏著) 春日井真也

世親唯識の原典解明(山口益氏著)

十月 三日

天台宗成立の背景 塚本 善隆

十一月 九日

末法思想の先驅 藤堂 恭俊

書評 西蔵撰述仏典目録(東北大学) 春日井真也

遼金の仏教(野上俊静氏著) 牧田 諦亮

大石仏(塚本善隆氏著) 水谷 真成

十二月二十四日

漢訳仏典における義と音とについて 水谷 真成

『仏教文化研究』第三号 合評会(第一回)

昭和二十九年一月十八日

『仏教文化研究』第三号 合評会(第二回)

二月 六日

インド及びセイロンの仏教事情(幻燈映写) 藤吉 慈海

二月二十七日

鎮西教学における称名深勝説 香月 乘光

仏教用語の解説について 小林 義弘

書評 原始仏教における般若の研究(西義雄氏著) 春日井真也

『大谷大学研究年報』第六号

論文評 日本の浄土教(『思想』二月号、田村圓澄氏稿) 藤吉 慈海

高野山における浄土教の形成と崩壊(東京大学

教養学部人文科学科紀要)二、井上光貞氏稿) 田村 圓澄

田村 圓澄

昭和二十九年

四月二十六日

浄土教の種々相

山村 圓澄

論文評 鎌倉時代における「一向専修」と「本地垂迹」

三月三十一日

〔史林〕第三六卷第四号黒山俊雄氏稿) 高根 俊成

書評 本生経類の思想史的研究(干潟竜祥氏著) 春日井真也

稲岡 順雄

五月三十一日

西紀前後における西北印度の一断面 春日井真也

三月三十一日 賤民思想と宗教

水谷 幸正

如来蔵義の解明 —— それに関する問題五つ —— 水谷 幸正

実性論における如来蔵義

昭和三十年度

九月 十一日

日本における末法思想 田村 圓澄

四月二十八日

中国仏教の今日と明日

『仏教文化研究』第四号合評会(第二回)

仏教用語の解説について

小林 義弘

九月 三十日

日本の浄土教 井上 光貞

五月三十日

浄土宗における諸行往生義について

真宗教団における蓮如の地位 笠原 一男

書評 中国仏学史大綱(英文、周祥光氏著)

香月 乗光

十一月十八日

阿弥陀経に関する二、三の問題再考 春日井真也

七月二十七日

曇鸞の名号観

十一月二十九日

『仏教文化研究』第四号合評会(第二回)

十月四日(浄土宗教学院京都研究所と合同)開宗の意義に関する考察

藤堂 恭俊

十二月二十一日

愚勧住信の法然上人伝成立攷 藤堂 恭俊

Albert Schweitzer の仏教観

藤吉 慈海

『仏教文化研究』第四号合評会(第三回)

昭和三十一年一月十六日

昭和三十年一月十七日

玄心と慧琳 —— 梵漢対訳の問題 —— 水谷 真成

二月二日

罪悪の意識について

書評 sir John Marshall : Taxila. 3 vols 春日井真也

二月二十七日

田村 圓澄

二月 十九日

如米蔵と阿頼耶識 田中 順照

円頓戒の変遷 —— 宗祖滅後一世紀問における ——

三田 全信

——山上憶良の場合——

香月 乘光

昭和三十一年度

昭和三十一年度

四月三十日

音訳語の歴史

仏教史学の一視点

五月 十九日

第二回浄土教学大会打合せ会

六月九・十日

第二回 浄土教学大会

六月二十五日

第二回浄土教学大会反省批評会

七月 十日

永観律師の浄土教思想

七月 三十日

往生要集の思想

罪惡思想の系譜

十二月二十六日

嵯峨釈迦堂本像の江戸出開帳

昭和三十二年二月二日

五代仏教の資料

最近五十年間の日本仏教界

三月 六日

日本の上代における仏教受容の一断面

五月二十一日

禅仏教の問題

パスカルのみた人間の二重性について

六月十日 第三回浄土教学大会打合せ会

六月二十二・二十三日 第三回浄土教学大会

七月二十七日

雍正帝と仏教

機根名義攷

第三回浄土教学大会反省批評会

十一月十四日

私日記と醍醐本法然上人伝

中国を訪問して —— スライド使用 ——

十二月二十一日

浄土教における出世本懐説

法然上人の遺文に見られたる「他力」の用語例

昭和三十三年度

四月二十三日

近世浄土宗団の形成

六月五・六日 (於大正大学)

第四回浄土教学大会

水谷 真成

平 祐史

藤吉 慈海

南 慈朗

藤堂 恭俊

藤吉 慈海

田村 圓澄

田村 圓澄

塚本 俊孝

塚本 俊孝

牧田 謙亮

田村 圓澄

三田 全信

牧田 謙亮

香月 乘光

藤堂 恭俊

平 祐史

七月 十八日 第四回浄土教学大会反省会

『仏教文化研究』第六・七号合評会(第一回)

九月十五日

『仏教文化研究』第六・七号合評会(第二回)

香港仏教事情(付スライド)

十月 三日

インドの仏教遺跡からみた三尊形式と浄土教

十一月二十七日

鎮西教学における結婦一行説の構造

十二月二十二日

如来蔵經の思想的背景

原始仏教における過去仏思想の形成

昭和三十四年二月五日

法然上人の浄土開宗の年次について

二月二十四日

ダーツとゴートラ

東南アジアの近況(付スライド)

三月 十六日

『大智度論』における涅槃観

僧肇の『注維摩經』における十地思想

昭和三十四年度

五月 七日

『選撰集』における一問題

六月二十二日

法然上人の此叡山と広谷の居住

七月 十三日 『仏教文化研究』第八号合評会

九月二十九日

明初の浄土教

十一月六日 第五回浄土教学大会反省会

十二月二十七日

鳩摩羅什訳といわれる禪經典にあらわれた念仏観

昭和三十五年二月二日

浄土教における還相性

雍正帝の儒仏道三教一体観

昭和三十五年度

三月三十一日

空の三態

四月二十八日

近世村落における浄土宗寺院の成立

九月二十七日

大唐蘇堂侍写真定本

唐代宦官の仏教信仰

十月三十一日

浄土教私観

藤堂 恭俊

三田 全信

牧田 諦亮

藤堂 恭俊

藤吉 慈海

塚本 俊孝

沢田 謙照

平 祐史

牧田 諦亮

藤吉 慈海

十二月 八日

世界宗教史学会に参加して——スライド映写——諸戸 素純
第六回浄土教学会反省批評会

昭和三十六年度

四月

『知恩伝』について

三田 全信

七月 三日

支那仏教史研究の諸問題

牧田 諱亮

五月

仏教に於ける過去仏思想の展開

竹本 寿光

春日井氏論文批評

高橋 弘次

六月 『仏教文化研究』第九号合評会

近藤徹称氏論文批評

水谷 幸正

塚本氏論文批評

牧田 諱亮

九月

法について

近藤 徹称

九月 十四日 『仏教文化研究』第十一号合評会

藤吉氏論文批評

香月 乗光

十一月 『仏教文化研究』第十号合評会(第一回)

藤吉氏論文批評

藤堂 恭俊

藤堂氏論文批評

平 祐史

西川氏論文批評

藤吉 慈海

十月 十六日

十二月 『仏教文化研究』第十号合評会(第二回)

三田氏論文批評

香月 乗光

各種法然上人伝に引用されたる法然上人の言葉

藤堂 恭俊

岸門主論文批評

三田 全信

十一月十三日

昭和三十七年一月

『法然聖人絵』に引用される法然上人の詞

藤堂 恭俊

現代思想家の浄土教批判

藤吉 慈海

三月

大原問答考

香月 乗光

阿弥陀仏と衆生

高橋 弘次

善導の引用した疑經について

牧田 諱亮

十二月十一日

楊皓の宋版法華經の刊記

塚本 俊孝

第十三世紀初期のインドの浄土教

藤吉 慈海

昭和三十七年度

五月 十五日

ハワイの宗教事情

新保 義道

昭和三十八年一月三十日

方便について

現代インドの仏教研究事情

三月二日

信仰言明の正当性の問題

沢田 謙照

佐藤 良純

清水 澄

規 程

一、宗令仏教文化研究所規程

第一条 本規程は宗規第十四号第三条及び第八条に依て定める。

第二条 本研究所は仏教研究所（以下本所と称する）と称し、総本山知恩院内に設ける。

第三条 本所は、宗祖開宗の真精神を体し、宗規第十四号第三条の目的、及び宗学、仏教学、並に仏教文化に関する研究をなし、人類文化の発展に寄与するを以て目的とする。

第四条 本所は教師の養成の他、左の事項を行う。

- 一、仏教文化に関する、学術的研究、文献の蒐集、及び出版
- 二、仏教文化の普及を目的とする講座、講演の開設
- 三、其の他必要と認めたる事項

第五条 本所に修学する者を研究生と称し、二カ年を以て修了せしめる。

研究生は左記各項の一に該当する者にして、所長の許可を得たる者とす。

一、華頂専修学院を卒業し、成績優良なる者

一、相当学歴を有し、本所の目的に適應する学力と人格とを具備する者

第六条 本所において所長の許可を得、特別の研究に当る者を研究員と称する。

第七条 本所に左の役職員を置く。

- 一、総裁 一名 門主を推戴する

- 二、所長 一名 執事長これに当り、本所を代表する
 - 三、学頭 一名 所長の命を受けて本所を統理する
 - 四、主任 一名 本所の事務を処理する
 - 五、講師 若干名
- 第八条 本所の年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月末日に終る。
- 第九条 本所の運営、その他に關しては別にこれを定める。

二、仏教文化研究所細則

- 第一条 本研究所（以下本所と称する）の事業並に事務運営に關しては、所長、学頭、主任、及び講師中より選出せられた代表二名、及び学事課長を以て構成する運営委員会において決定する。
- 第二条 本所の研究員、及び研究生に登録せらるべき者は左記各項の一に該当し、運営委員会の承認を得たる者とする。
- 一、華頂専修学院卒業生にして、学力、人物共に研究生として適當と認めらるる者
 - 二、学力、学歴、相当と認めらるる者
- 第三条 研究員及び研究生たらんとする者は、履歷書を添え、保証人連署を以て所長に申請する。
- 第四条 本所は毎年度の初め、その年度の研究員、及び研究生を登録する。
- 第五条 研究員は毎年度の初め、その研究題目を提出し、研究成果をその年末に報告するものとする。
- 第六条 研究員及び研究生には、研究補助費を支給することがある。
- 第七条 本所に指導講師を囑託することが出来る。
- 第八条 本所は随時、研究発表会を開く。

華頂教学大会

昭和二十八年、前門主望月信亨博士の七回忌を迎え、六月二十七日、雪香殿において、本研究所主催のもとに第一回華頂教学大会を開催した。午前九時開会式、岸門主を導師として七回忌の回顧を修し、望月博士未亡人、望月信成氏も参列された。続いて香月研究員の司会により、塚本学頭の開会の辞、田中執事長・井川教務部長の挨拶、祝電披露、ついで別項のごとく記念講演ならびに特別講演に移った。新しく上梓した増訂版『仏教大辞典』第三巻を靈前に供えた。

午後大殿における望月博士の七回忌法要の後、二時より二部会に分れ、田村・藤堂・藤吉・牧田・春日井・塚本各研究員の司会のもとに、二十一名の研究発表が行われた。午後五時大方丈前庭において記念撮影をなし、続いて雪香殿において総会を開き、「教学振興の具体策について」と題し、春日井研究員の司会により、塚本学頭座長となり、熱心な協議が行われた。最後に古経堂において門主を中心に懇親会を催し、四十余名の出席を得て和やかに歓談が交され、教学の発展を念じて、九時散会した。

この日浄土宗教学院長渡辺真海、大正大学長椎尾弁匡、宮本正尊、真野正順、友松円諦、柴田竜勝の諸氏から祝電をたまわり、黒谷法主千葉良導上人、京大新村出、長尾雅人、岡見正雄、竜大佐藤哲英、小笠原宣秀、芳村修基、谷大藤島達朗、兵庫農大井上善右衛門、西山短大稲垣真哲、森英純、仏大伊藤真徹、須賀隆賢らの諸教授を始め、宗門内外からの来会者三百名に達し、すこぶる盛会であった。

(香月乘光記)

趣 旨

本大会は教学振興の精神を確立するを意図し、かねて本研究所を創設された前門主望月信亨上人の七回忌を記念して、開催するものである。これによって宗内学人の研究成果を結集し、宗侶の学的関心を伸暢することを期待し、併せて元祖法然上人七百五十年大遠忌を迎えるための挙宗態勢の実を醸成せんことを希念する。

第一回華頂教学大会

期日 昭和二十八年六月二十七日

会場 京都・知恩院雪香殿

記念講演

一、法然上人と聖如房 — 四十八卷伝の一節 —

岸 信宏

二、清涼寺釈迦像新出の諸資料について

塚本 善隆

三、鎌倉芸術の写実性

望月 信成

特別講演

一、安居院流の学派について

— 特に新出の草案集を中心として —

曼殊院門跡 山口光園師

講演に際し、知恩院蔵四十八卷伝の第十九卷、清涼寺釈迦像新出の諸資料、並に草案集を展観した。

研究発表表

第一部

- 1、専修念仏と戒 田村 圓澄
- 2、世親の浄土観 藤堂 恭俊
- 3、法然上人以前の弥陀信仰 静永 湛澄
- 4、法然門下における浄土宗義展開の思想的背景 出井 真有
- 5、浄土教に於ける罪惡について 坪井 俊映
- 6、謡曲と浄土教 小林 知道
- 7、興福寺奏状の歴史的背景 高根 俊成

第二部

- 8、印度浄土教展開の断面
— 菩薩十地思想を中心として — 静永 賢道
 - 9、現在浄土教に課せられた諸問題 田中 順照
 - 10、二尊院の礼廟と祖山勅修御伝とについて 小川 竜彦
 - 1、明代仏教の庶民教化について 牧山 謙亮
 - 2、宋初の仏教と裔然 塚本 俊孝
 - 3、仏典翻訳成立の基盤 — 春台と履善と — 春日井 真也
 - 4、檀子部の教義に対する印度学的解明
— 特に諸部派との交渉の断面から — 賀幡 亮俊
 - 5、パスカルの宗教的個性について 南 慈朗
 - 6、如来蔵縁起宗の別立について 梅辻 昭音
 - 7、仏教用語の解説について 小林 義弘
 - 8、六朝時代における勝鬘經の如来蔵に関する諸義 加藤 善浄
 - 9、宗教集団の性格 稲岡 順雄
 - 10、Dhātuについて — 仏教思想の用語による解明への一つの試み — 水谷 幸正
 - 11、知恩の意味 諸戸 素純
- 右の外第一部について
- 愚鈍念仏往生の機 岸 覚勇
- 源信の浄土教における称名念仏 香月 乗光

仏教文化研究一覽

第一号 (昭二十六・六・十)

巻頭言

知恩院門主

岸 信宏 一

寶卷と近代シナの宗教

塚本 善隆 三

瑜伽行派における浄土教の問題

——世親浄土論の瑜伽行学的考察——

藤吉 慈海 二五

法然伝の諸問題

田村 圓澄 三

中国古代文化の性格

春日井真也 六

北魏における浄土教の受容とその形成

——主として造像銘との関連において——

藤堂 恭俊 三

北魏の仏教受容について

塚本 俊孝 二三

清朝における仏寺道観及び宗教生活に
関する法律

M. de Groot
牧田 諦亮 二五

報

仏教文化研究所(塚本) 法然上人絵伝研究会(岸、藤堂) 京都

附近法然上人史蹟伝説地(田中) 南海寄婦伝研究会(小西、春

口井) 宗義研究会(藤吉) 仏説護國経の訳場列位(牧田)

第二号 (昭二十七・九・三十)

明・清政治の仏教去勢——特に乾隆帝の政策——

塚本 善隆 一

華嚴經寿命品の弥陀浄土説とその展開

香月 乗光 七

居士仏教における彭際清の地位

牧田 諦亮 三

原始無量寿経思想形態推定への課題

春日井真也 四

法然伝の諸問題(続)

田村 圓澄 三

無量寿経論註に説示せられる仏身土に関する見解

藤堂 恭俊 七

中国における密教受容について

——伝入期たる善無畏金剛智不空の時代—— 塚本 俊孝 六

仏教とベニエダンカにおける弁証法

チャンドラダス、シャルマ著 藤吉 慈海 二〇

法然上人伝研究会紀要(二三)——再評(三三)—— 仏教関係論文

目録(三三)——彙報(三七)——インド通信(三三)

第三号 (昭二十八・十一・二十)

隋の江南征服と仏教

——晋王広(煬帝)と江南仏教—— 塚本 善隆 一

仏教における道徳と宗教

観無量寿仏経における諸問題 春日井真也 三

十住毘婆沙論漢訳攷 藤堂 恭俊 五

君主独裁社会における仏教教団の立場(上)

——宋僧贊寧を中心として—— 牧田 諦亮 三

五代南唐の王室と仏教

一言芳談の編者について——頓阿と推考す—— 塚本 俊孝 八

遁世者の宗教的考察 田村 圓澄 九

法然上人伝研究会紀要(一) — 学界展望(七) — 書評(二)
— 仏教関係論文目録(二四) — 彙報(三三)

第四号 (昭二十九・七・十三)

望月信亨先生記念号

望月信亨先生肖像と筆蹟

— 望月信亨上人の七回忌を記念して —

生天思想と兜率上生の(遺稿)

清涼寺釈迦像封蔵の東大寺齋然の朱印立誓書

法然教学に於ける称名勝行説の成立

専修念仏の受容と弾圧

宗史より観た鎮西上人剛法の意義

宋初の仏教と齋然

君主独裁社会における仏教教団の立場(下)

— 宋僧契嵩を中心として —

阿弥陀経に於ける一、二の問題

摂大乘論に於ける唯識観

世親の浄土観 — 無量寿経論の瑜伽派的理解 —

セイロンの宗教事情(覚書)

祖先崇拜の社会的基盤

法然上人伝研究会紀要(四)

学界展望

仏教関係論文目録

彙報

第五号 (昭三十・十一・十)

聖如房に就いて

新出「草案集」と安居院流学派

曇鸞の号号観とその背景

嵯峨清涼寺史 平安朝篇 — 棲霞清涼二寺盛衰考 —

嵯峨清涼寺における浄土宗鎮西流の伝入とその展開

— 清涼寺史近世篇 —

原「知恩院」の変遷について

— 法然上人と隆寛已講 —

慧琳の言語系譜 — 北天系転写漢字の対音 —

法然上人伝研究会紀要(五)

書評

仏教関係論文目録

彙報

第六・七号 (昭三十三・三・二十五)

法然上人の常の詞に就いて

法然上人の浄土開宗の年時に關する諸説とその批判

— 承安五年開宗説の解明 —

法然上人の円頓戒の正統者について

曇鸞の浄土に關する見解

嵯峨釈迦の江戸出開帳について

岸 信宏 一

山口 光圓 九

藤堂 恭俊 三

塚本 善隆 四

塚本 俊孝 三

三田 全信 七

水谷 真成 二

岸 信宏 一

香月 乗光 五

三田 全信 元

藤堂 恭俊 四

塚本 俊孝 三

岸 信宏 一

香月 乗光 五

三田 全信 元

藤堂 恭俊 四

塚本 俊孝 三

岸 信宏 一

香月 乗光 五

「精神主義」の限界

ムルティ教授著「仏教の中心哲学」に於ける空の

理解

禅仏教の問題

——胡適と鈴木大拙との対論をめぐって——

訳註 魏書積老志(一)

The Oldest Commentary of the Mahāyānaśāstra

Sāstra 大乘起信論

インドに於ける仏教研究の現況(一)

法然上人伝研究会紀要(六)

浄土教学大会研究発表概要

衆 報

田村 圓澄 壹

田中 順照 壹

藤吉 慈海 弍

塚本 善隆 一〇

Walter Liebenthal 一

春日井真也 九

(二九)

(三四)

(一八)

第九号 (昭三十五・三・三十一)

還相廻向論

——浄土教における還相性の問題——

燉煌絵観無量寿仏経変相に於ける未生怨因縁譚の

完成経過

法然上人の下山について

無始時來界における相依性の問題

仏教における信の本質とその構造

訳註 魏書積老志(三)

浄土教学大会研究発表概要

衆 報

藤吉 慈海 一

春日井真也 九

三田 全信 弍

近藤 徹称 三

沢山 謙照 三

塚本 善隆 三

(九三)

(一〇七)

第八号 (昭三十四・三・三十一)

法然上人の和歌に就いて

「七箇条起請文」と「送山門起請文」とについて

——その偽作説に対する反論——

鈴木正三の念仏観

機根名義攷

インド仏教における過去仏思想の形成

訳註 魏書積老志(一)

香港の仏教事情

浄土教学大会研究発表概要

衆 報

岸 信宏 一

香月 乗光 弍

藤吉 慈海 二元

水谷 幸正 四

竹本 寿光 四

塚本 善隆 三

近藤 徹称 (七)

(八)

(一〇)

第十号 (昭三十六・三・三十)

法然上人七百五十年遠忌特集号

東大寺十問答に就いて

信機と信法

法然上人の浄土観

——その時機相応性をめぐって——

法然上人絵伝の種類とその系列の考究

正信房湛空について

——特に七箇条起請文及び四卷伝の著者に關する私見——

法然上人行状絵図の弘伝に努めし人々……(遺稿)

——殊に横井金谷について——

岸 信宏 一

西川 知雄 弍

藤吉 慈海 弍

井川 定慶 三

三田 全信 三

藤堂 祐範 充

殊に横井金谷について

法然上人と重源上人

——統善導大師伝の一考察——

裏辻 憲道 五

法然上人の出家の因由一考

浄土教における観・称の問題

三田 全信 四
藤堂 恭俊 五

書評

(九七)

——特にシナ浄土教にみられる観より称への移行——

彙報

(一〇〇)

十住毘婆沙論易行品の構成

分別と空

静水 賢道 三
近藤 徹称 五

第十一号 (昭三十七・三・三十一)

「法然聖人絵」に関する諸問題

——特に法然の詞を中心として——

藤堂 恭俊 一

——「中辺分別論」相品第一の註釈的研究——

仏教における「方便」の思想について

沢山 謙照 七
藤吉 慈海 二七

民間に伝承する法然上人

——讃岐国仏生山法然寺藏伝親刻法然上人像と無形文化財滝宮念仏踊をめぐって——

平 祐史 五

ハワイの宗教事情

新保 義道 三三

——特に仏教を中心として——

信機と信法

近藤 徹称 五

書評

(三五)

念仏論

藤吉 慈海 二

彙報

(三五)

インド学研究の動向と日本の立場

インド仏教における過去仏思想の展開

春日井真也 四

乾隆帝の教団肅正政策と雍正帝

漢字訳阿本より見たる如来蔵経

塚本 俊孝 三

三教優劣伝について

賀幡 亮俊 六

書評と紹介

(九九)

彙報

(一〇三)

第十二号 (昭三十八・三・三十一)

要義問答に就いて

岸 信宏 一

法然上人の浄土開宗における仏教の転換

香月 乗光 五

Ⅲ 浄土宗教学院の新発足

新発足の経過

宗門分裂という不幸な出来事から、苦節十五年、浄土宗と本派浄土宗がすべての行きがかり上の感情をすて去り、誤解、混乱を避けて、小異を捨てて大同に帰入し、新生浄土宗が誕生したのが、昭和三十七年のことである。「覆水盆に返らず」の譬えのごとく、過去において分裂した宗門が合同した例はなく、まさに空前の出来事であった。しかし、このことは単に宗政上、行政上の問題だけでなく、吉水の門流が危機感のもとに一丸となって合同への意欲が結集されたところに、合同の悲願が成就されたことはもちろんである。あわせて見過してならないことは、浄土宗教学院、仏教文化研究所の関係者、および東西の学人の交流の積み重ねが、合同への働きかける力となったことである。特に若手研究者たちが「法然学会」を結成して教学一体の立前から、合同への機運に拍車をかけた。このような表裏の動きが数年来続けられ、相互の研鑽交流が実を結んで、昭和三十年に浄土宗教学院と仏教文化研究所共催による、第一回浄土教学大会が開催され、宗門合同より一步先んじて、教学組織が一体となって研究を前進させる運びとなった。爾来、教学大会および研究会を通じて交流がなされ、宗門が正式に合同した時点において、教学院の規程も新しく改正されたのである。その間、当時の浄土宗教学院の主幹佐藤密雄、仏教文化研究所長の塚本善隆の両師と、それぞれの主事であった藤堂恭俊・宮林昭彦の両氏が新浄土宗教学院規程の骨子を創案し宗議会の議決を経て新発足したのである。

因みに前述の「法然学会」は、昭和三十年六月総本山知恩院における第一回浄土教学大会を機縁として、大正大学、仏教大学の浄土宗に関係する若い学徒によって、昭和三十一年十月二十一日に結成された研究機関であるが、この会の趣意

と会則はつぎのとおりである。

法然学会趣意書

おもりに十一年前の敗戦による打撃は政治、経済、文化のみならず宗教界までも波及し、我が浄土宗門も均しく不振と衰微の奈落へと墮するのではなからうかと考えられた。

しかるに宗門当局並びに諸先賢は一宗を挙げて「宗門復興は教学の振興から」との合言葉をもって、暗澹たる宗門前途への懸念を一掃し着々とその難事を超克されたのであり、その努力に衷心より敬意を表するものであります。

他方、我が国の学界の復興も著しく、今や国際的水準に達しその進歩と発展は戦前を凌駕するものがあります。かかる学界の趨勢に伍さんとする宗門教学担当諸先生の努力は、幾多の先輩を国際的学会に送り出してあります。また内には、他宗に比類のない学界を昭和三十年六月知恩院に於いて第一回浄土教学大会の名の下に催されたのであり、就中、参加した研究者の中で青年学徒の研究発表がその大半を占めたことは特に注目されたところであります。

そして、本大会を機縁として、全宗門学徒を結ぶところの思想交流の場を求めんとする声が青年学徒の間に東西いづれともなく興ったのであり、その論波はまたたくうちに全国に拡がり、仏教学、宗学の領域に閉ざされることなく、広く諸般科学の研究に従事する宗門学徒をも含めた研究会を創設し、将来の教学振興を目指すことになったのであります。

時あたかも、宗祖法然上人七百五十年大遠忌を目前に控え、祖恩に報いんとする趣旨の下に参駆した全国の同志五十有余名を大同団結、仏教界唯一の浄土宗門出身青年学徒の学的研究機関「法然学会」をここに結縁し、所期の目的を達成せんとするものであります。

願わくば元祖大師の御加護と、一宗諸大徳の絶大なる御指導と御支援を垂れ給わんことを切に希い、「法然学会」発会の趣旨を声明する次第であります。

昭和三十一年十月二十一日

法然学会会則

法然学会会員一同

第一条 (名称) 本会は法然学会と称する。

第二条 (事務所) 本会の事務は東西の二事務所によって運営し、東部は大正大学内、西部は仏教大学内に置く。

第三条 (目的) 本会は浄土教学並びに諸般の学術的研究をなす個人の研究上の連絡を計り、宗門学術の興隆を期し、合せて会員相互の親睦和合に寄与する事を目的とする。

第四条 (事業) 本会は第二条の目的を達する為に左の事業を行う。

一、毎月一回研究会を開催

二、毎年一回総会を開催

三、毎年一回研究論文集を刊行

一、宗学、仏教学に関係ある諸学会との連絡

一、その他必要な事業

第五条 (会員) 本会の目的に賛同する浄土宗門人にして、現在研究に従事しつつある若き学徒を以て会員とする。

新入会員は、会員二名以上の推薦による。

第六条 (役員) 本会に幹事若干名を置く。幹事は会務の運営を担当する。なお幹事は会員の互選とし、任期は一年とする。但し重任を妨げない。

第七条 (顧問・参与) 本会に顧問・参与を置くことができる。顧問は会員の希望により委嘱され、その指導に当る。参与は会員出身者にして会員の推薦による。

第八条 (会費) 会員は会費として、月百円を納める。

第九条 (附則)

一、本会則の変更は会員三分の二以上の議決による。

二、本会則は昭和三十一年十月二十二日より施行する。

三、本会の年度は四月一日に始まり、翌年三月末日に終る。

尚、大正大学・仏教大学の両大学に事務所をもつ東西の「法然学会」は、ともに競いながら研究をもち、その機関誌『法然学会論叢』創刊号（昭和三十五年十一月）も出版された。また大正大学の若い学徒を中心とした現在の「水曜会」はこの「法然学会」の継続であり、また仏教大学の現在の推進力となっている勢力もこの「法然学会」を母体として育ったものである。

浄土宗教学院研究例会

一、西部研究所

昭和三十九年度

昭和三十九年九月十二日（於知恩院）

第一回教学院総会

講演 真実なるものの自開

昭和三十九年十月三十一日（於知恩院）

一、鎌倉二位禅尼の消息の背後考

二、宗教研究の方向

昭和四十年一月三十日（於吉水学園）

一、称名念仏の内相

二、無量寿経雑考

昭和四十四年度

昭和四十四年七月二日（於仏教大学）

一、浄土教の人間観

二、往生捨因を中心として往生要集・決定往生集の比較研究序説

昭和四十四年十二月十二日（於宗学研究所）

一、浄土教における宗教的主体性の一断面

——末法思想の宗教哲学的考察——
二、後白河院政時代と法然上人

昭和四十五年度

昭和四十五年六月二十七日（於仏教大学）

一、法然上人遁世の背景

二、婦三宝傷の和訳

昭和四十五年十二月十六日（於仏教大学）

一、悪人往生思想再考

二、法然上人の名号論

昭和四十六年度

昭和四十六年七月十六日（於仏教大学）

一、道綽禅師の人間観

二、鎌倉浄土教の展開とその文化

——特に建築を中心に——

昭和四十六年十二月十六日（於仏教大学）

一、兵庫津西光寺の庭寺について

昭和四十七年三月三十日（於仏教大学）

一、禁忌否定と一向専修

二、浄土教美術試論

藤本 浄彦
伊藤 唯真

平 祐史
三枝樹隆善

池見 澄隆
高橋 弘次

佐藤 健

成田 俊治

野田 秀雄

池見 澄隆
藤吉 慈海

昭和四十七年度

昭和四十七年十二月十五日（於仏教大学）

- 一、中世後期から近世初頭にかけての知恩院と京都門中

中井 真孝

昭和四十八年二月十六日（於仏教大学）

- 一、発願文の読み方について

三枝樹隆善

昭和四十八年度

昭和四十八年十月二十七日（於仏教大学）

- 一、法然教学と往生礼讃

明山 安雄

- 二、阿弥陀信仰成立の背景

香川 孝雄

昭和四十九年二月二十五日（於仏教大学）

- 一、叡山浄土教管見

福原 隆善

- 二、選択集をめぐる史的諸問題

三田 全信

昭和五十年度

昭和五十年七月五日（於仏教大学）

- 一、道練禪師における菩提心の問題

佐藤 健

- 二、室町期における貴族の浄土教信仰

西山 円我

——師檀関係の固定化をめぐる——

昭和五十一年一月二十四日（於仏教大学）

- 一、近代における浄土宗学史の研究

高橋 弘次

——特に山崎弁榮を中心として——

二、南都浄土教における善導教学の需要と新念仏義の組成

明山 安雄

二、東部研究所

昭和四十四年度

昭和四十四年十月三日（於大正大学）

- 一、関東浄土宗法度について

宇高 良哲

- 二、隠遁者と浄土教

丸山 博正

昭和四十四年十二月十一日（於大正大学）

- 一、末代念仏授手印伝承本について

柴田 哲彦

- 二、都市化と宗教行事

芹川 博通

昭和四十五年一月二十三日（於大正大学）

- 一、十二縁起解釈の分類

大南 竜昇

- 二、中世末期における寺院経済の一考察

佐々木洋之

昭和四十五年度

昭和四十五年六月二十五日（於大正大学）

- 一、近世末期女性の信仰

田中 祥雄

——徳本の布教を中心として——

- 二、西山教学における他力「観門」の特質

広川 堯敏

昭和四十五年十一月十三日（於大正大学）

- 一、大乘莊嚴経論における国上清浄について

小沢 憲珠

昭和四十六年一月二十八日（於大正大学）

- 一、微選撰集の教学的立場
- 二、西福寺文書について

- 後藤 尚孝
- 宇高 良哲
- 一、浄土三派の菩薩道観
- 二、福田行誠上人の伝法改革論
- 後藤 尚孝
- 柴田 哲彦

昭和四十六年度

昭和四十九年度

昭和四十六年六月二十四日（於大正大学）

昭和五十年一月二十三日（於大正大学）

- 一、靈験の構造
- 聖なるもののハイエロフアニー ——
- 二、善導大師の敬称について

- 鷲見 定信
- 金子 寛哉
- 一、善導大師の観仏三昧について
- 二、花園院の信仰について
- 稲岡 了順
- 小此木輝之

（昭和四十六年十一月の例会は学内学生問題のため中止）

昭和五十年度

昭和四十七年一月二十日（於大正大学）

昭和五十年六月十一日（於大正大学）

- 一、児童の宗教意識について
- 二、往生記について

- 安井 昭雄
- 前田 孝雄
- 一、選撰集における「しばらく」について
- 大谷 旭雄

昭和四十七年度

昭和四十七年十二月十四日（於大正大学）

- 一、行具の三心について
- 二、知恩と報恩

- 丸山 博正
- 大南 竜昇

昭和四十八年一月十八日（於大正大学）

- 一、北周武帝をめぐる三教一致論とその背景
- 二、念仏講の成立について
- 特に徳本の布教を中心として ——

- 佐藤 成順
- 田中 祥雄

昭和四十八年度

昭和四十八年十月五日（於大正大学）

教学院助成研究一覽

浄土宗教学院では、昭和三十九年より教学振興の立場より、グループ研究、個人研究それぞれに助成して、研究活動を活潑ならしめ、その成果を『仏教文化研究』に発表することとした。採用分の研究生および研究課題はつぎのとおりである。

昭和三十九年度

伝統宗学の現代的理解

選択集の総合的研究

法然上人伝の成立史的研究

大乘仏教思想の研究

新興宗教の研究

五重相伝の研究

大乘の帰結としての浄土教

昭和四十年年度

大乘仏教思想の研究

法然上人伝の成立史的研究

五重相伝の研究

大乘の帰結としての浄土教

変革期における浄土宗教団とその教育

伝統宗学の現代的理解

選択集の総合的研究

戸松 啓真

真野 竜海

三田 全信

水谷 幸正

安居 香山

坪井 俊映

近藤 徹称

新興教団の構造論的研究

現代宗教思潮の世界史的展開

善導教学の基礎的構造

昭和四十一年度

浄土教における人間形成の問題

浄土教における人間形成論

インド初期仏教における人間形成論

インド大乘仏教における人間形成論

中国仏教における人間形成論

——一般中国思想との関連において——

欧米思想における人間形成論

現代日本における人間関係の実態調査

法然上人の浄土開宗に関する総合的研究

日本浄土教と法然上人の浄土開宗

仏教における宗の観念と浄土開宗

宗教改革者としての法然とルター

法然浄土教の信仰構造

服部 英淳

田丸 徳善

安居 香山

香川 孝雄

香川 孝雄

高橋 弘次

水谷 幸正

深貝 慈孝

沢山 謙照

加藤 信孝

香月 乗光

香月 乗光

沢田 謙照

清水 澄

高橋 弘次

高橋 弘次

法然浄土教と実存哲学

シナ浄土教と法然上人の浄土開宗

法然上人の浄土開宗と中世思想

変革期における浄土宗教団とその教育

変革期における浄土宗教団の教育史的総観

宗門教育制度の変遷とその背景

新思想と明治宗学の形成

変革期宗団の社会教化活動

変革期における学僧について

仏教教団の近代化と浄土宗の動向

シナ仏教における仮思想と無性法認(仏教認識論の研究)

法然教学に於ける用語に関する研究

用語の形態論的研究

用語の歴史的研究 他教学用語との比較研究

用語の歴史的研究 法然門下撰述用語との比較

用語の歴史的研究 他教学用語との比較研究

用語の歴史的研究 用語の鎌倉文学に与えた影響

浄土教に於ける倫理と道德の問題

涅槃教の展開と浄土教

部派仏教的事実と浄土教

華嚴教学の展開と浄土教

唯識中観の立場と浄土教

浄土宗をめぐる在家仏教運動の研究

白川 恵俊

大北 裕生

平 祐史

藤原 弘道

藤原 弘道

石井 俊恭

藤堂 恭俊

牧 達雄

多那瀬顯良

伊藤 唯真

山本 法純

太田 正元

太田 正元

石橋 真誠

沢田 謙照

太田 忠師

藤原 弘宣

伏見 誓寛

岩城 成忍

賀幡 亮俊

梅辻 昭音

近藤 徹称

宮林 昭彦

光明会

共生会

おてつき運動

真生会

総括と展望

法然上人の思想史的研究

日本仏教思想史上の法然上人

日本倫理思想史上の法然上人

中国仏教思想と法然上人の著作

門弟の著作に現われた法然上人

比較思想史における法然上人の位置

日本浄土教に現われた法然上人の特色

法然上人の往生思想の展開

法然上人の往生思想(序)

法然上人以前の往生思想

法然上人門下の往生思想

現代社会と往生思想

昭和四十二年度

法然上人の浄土開宗に関する総合的研究

日本浄土教と法然上人の浄土開宗

シナ浄土教と法然上人の浄土開宗

法然上人の浄土開宗と中世思想

宗教改革者としての法然上人とルター

宮林 昭彦

安居 香山

藤井 正雄

芹川 博通

竹中 信常

土屋 光道

土屋 光道

奈良 博順

佐藤 成順

鈴木 成元

田丸 徳善

戸松 啓真

戸松 啓真

戸松 啓真

大谷 旭雄

丸山 博正

梶村 昇

代表 香月 乗光

代表 香月 乗光

代表 大北 裕生

代表 平 祐史

代表 清水 澄

法然上人の浄土教と実存哲学

法然上人の思想史的研究

浄土教に於ける人間形成の問題

法然上人の往生思想の展開

明治浄土宗における教学と教団の近代化過程に関する研究

研究

明治時代における浄土宗の教学僧の伝記と著作

明治時代における宗学の形成とその理念

明治時代の浄土宗団の歴史の展開

浄土宗伝法史の研究

三代相承より岡師以前の伝法

岡師の五重相伝の判定

道・感二師及びそれ以後の伝法

円戒・布薩戒の伝承と興廃

浄土宗発展の基礎的研究

近世浄土宗史

近代（明治）浄土宗史

中世浄土宗史

浄土教教理の社会的展開の諸問題

—五悪と非行の問題に於ける浄土教の意味—

唯藏学説の立場から見る浄土教

華嚴教学の展見と浄土教

部派仏教的事実と浄土教

涅槃経の展開と浄土教

昭和四十三年度

浄土宗伝法史の研究

教団史論からみた“おてつき運動”の考察

—新旧両教団の比較を通して

指導と総括

共生会運動と浄土宗の近代化

光明会運動と浄土宗の近代化

真生会運動と浄土宗の近代化

浄土宗発展の基礎的研究（2）

—特に三河浄土宗寺院の調査を中心として—

室町時代

戦国時代

江戸時代

法然上人の往生思想の展開

浄土教の倫理観

法然上人の倫理観

道徳悪と宗教的悪

浄土経典における罪の観念

曇鸞の倫理観

善導の倫理観

仏教における善悪の問題

我国における念仏儀礼の研究

念仏儀礼の史的研究

白川 恵俊

土屋 光道

香川 孝雄

戸松 啓真

代表 藤原 弘道

藤原 弘道

藤堂 恭俊

伊藤 唯真

阿川 文正

代表 柴田 哲彦

柴田 哲彦

金子 真補

大橋 俊雄

阿川 文正

代表 鈴木 成元

鈴木 成元

宇高 良哲

田中 祥雄

佐々木洋之

代表 伏見 哲寛

伏見 哲寛

近藤 徹称

梅辻 昭音

賀幡 亮俊

阿川 文正

藤井 正雄

竹中 信常

安居 香山

宮林 昭彦

芹川 博通

玉山 成元

宇高 良哲

田中 祥雄

佐々木洋之

戸松 啓真

高橋 弘次

高橋 弘次

水谷 幸正

香川 孝雄

加藤 善浄

深貝 慈孝

沢田 謙照

成田 俊治

成田 俊治

成田 俊治

成田 俊治

成田 俊治

成田 俊治

念仏儀の貴族法会への展開

四天王寺西門を中心とする念仏儀礼

並びに別所における念仏儀礼の研究

村落共同体における念仏儀礼の研究

浄土宗教団の発展と念仏儀礼の研究

自力と他力―現象学的アプローチ―

劇文学と浄土教（特に黙阿弥物の研究）

浄土宗典の既刊本に関する調査とその目録の作製

池見 澄隆

総括

関西を中心とした分析

関東を中心とした分析

団参者を中心とした分析

唐代浄土教の教理背景

釈浄土群疑論に引用する諸経論について

群疑論における唯識思想の受容形態

念仏三昧宝論の思想的特質

浄土教の倫理観

竹中 信常

安居 香山

宮林 昭彦

芹川 博通

宮林 昭彦

佐藤 成順

大南 竜昇

小沢 憲珠

高橋 弘次

昭和四十四年度

自力と他力―現象学的アプローチ―

近世より近代へかけての浄土宗教化活動の様相

―三河地方念仏講の災態調査とその研究―

善導大師の『観経疏』の訳注

語句の現代語訳

法然上人伝の総合的研究

浄土宗伝法史上に於ける法然上人の地位について

法然上人の浄土教行儀に関する研究

浄土開宗に関する諸問題

語録の研究

法然浄土教思想の美術的表現

法然上人伝にみえたる帰依層について

法然伝の歴史民俗学的研究

「おとしぎ」運動の現状分析―会員を中心に―

峰島 旭雄

牧 達雄

三枝樹隆善

佐藤 心岳

三田 全信

三田 全信

伊藤 真徹

香月 乗光

藤堂 恭俊

成田 俊治

伊藤 唯真

平 祐史

藤井 正雄

昭和四十五年度

浄土教者の宗教的体験の研究

法然上人の宗教的体験の研究

中世浄土教者の宗教的体験の研究

近世浄土教者の宗教的体験の研究

宗教的体験の心理学的研究

宗教的体験の特質の研究

西山派における浄土教者の宗教的体験の研究

中国浄土教者の宗教的体験の研究

往生記の総合的研究

代表 藤吉 慈滬

藤堂 恭俊

近藤 徹称

河波 昌

古瀬 順啓

藤本 浄彦

広川 堯敏

金子 寛哉

代表 阿川 文正

阿川 文正

大橋 俊雄

金子 真補

柴田 哲彦

法然上人伝の総合的研究	前田 孝雄	鹿ヶ谷法然院文書の研究	代表 玉山 成元
浄土教における如来蔵思想の研究	三田 全信	古文書部門担当	宇高 良哲
法然上人における如来蔵説	深貝 慈孝	古記録部門担当	田中 祥雄
如来蔵思想の根本義	深貝 慈孝	聖教部門担当	佐々木洋之
般若思想と如来蔵説	水谷 幸正	法然上人の浄土開宗と教団の形成	代表 成田 俊治
瑜伽唯識思想と如来蔵説	香川 孝雄	法然上人における宗の觀念と教団の特質	香月 乗光
浄土教思想と如来蔵説	沢田 謙照	付法相承からみたる教団形成	三田 全信
シナ浄土教思想における如来蔵説	高橋 弘次	法然教団の形成と異端の問題	伊藤 真徹
道の基礎的研究	加藤 善浄	法然教団と既成教団との諸關係	藤堂 恭俊
善導大師の『観経疏』の訳註	真野 竜海	法然教団の社会的基盤	伊藤 唯真
寿経と観経の認識論的関連	三枝樹隆善	法然教団の地域的發展	平 祐史
唐代浄土教の教理背景	山本 啓量	法然教団と美術	成田 俊治
近世より近代にかけての浄土宗教化活動の様相	宮林 昭彦	浄土教における救済概念の種々相	代表 藤吉 慈海
——三河地方念仏講の実態調査とその研究——	牧 達雄	救済概念の哲學的研究	藤吉 慈海
昭和四十六年度		同	河波 昌
浄土宗伝法史の研究 —— 往生記の総合的研究 ——	阿川 文正	救済概念の仏教的研究	藤本 浄彦
道の基礎的研究	真野 竜海	同	近藤 徹称
宗派意識に関する調査研究	安居 香山	救済概念の宗学的研究	藤堂 恭俊
本研究に関する総括と展望	代表 竹中 信常	同	広川 堯敏
文献上よりみた宗派意識に関する研究	宮林 昭彦	近世浄土宗寺院に関する基礎的研究	金子 寛哉
調査上よりみた宗派意識に関する研究	藤井 正雄	近世浄土宗寺院の本末・寺檀關係史料の調査及び研究	代表 平 祐史
同	芹川 博通	近世浄土宗寺院の經濟關係史料の調査及び研究	伊藤 唯真
		近世浄土宗寺院の教學關係史料の調査及び研究	成田 俊治

近世浄土宗寺院の政治関係史料の調査及び研究

近世浄土宗寺院別所蔵史料の作成

中世思想史における浄土教と倫理

浄土教と倫理思想

昭和四十七年度

徳本行者の研究

徳本行者伝の研究

徳本行者の和歌について

全国教化と名号石

史料疏解

浄土教における救済概念の種々相

法然および伝統宗乗における救済の研究

救済概念の仏教学的研究

救済概念の比較思想史的研究

中国浄土教における救済の研究

法然門下の救済の研究

救済概念の宗教哲学的研究

法然上人の浄土開宗と教団の形成

古典文芸に描かれた法然上人像の研究

近世浄土宗寺院に関する基礎的研究

宗派意識に関する調査研究

本研究に関する総括と展望

中井 真孝

平 祐輝

池見 澄隆

深貝 慈孝

代表 戸松 啓真

戸松 啓真

阿川 文正

大谷 旭雄

田中 祥雄

代表 藤吉 慈海

藤堂 恭俊

近藤 徹称

河波 昌

古瀬 順啓

金子 寛哉

広川 堯敏

藤本 淨彦

成山 俊治

榊 泰純

平 祐史

代表 安居 香山

竹中 信常

宗派意識の全般的考察

文献上よりみた宗派意識に関する研究

調査上よりみた宗派意識に関する研究

調査上よりみた宗派意識に関する研究

維新时期浄土宗の基礎的研究

浄土教における如来蔵思想

鹿ヶ谷法然院文書の研究

法然院文書の総合的研究

法然院の草創と忍濃

法然院の本末関係

法然院の経済基盤

昭和四十八年度

徳本行者の研究

維新时期浄土宗の基礎的研究

法然上人遺蹟信仰の総合的研究

諸伝記上の宗祖遺蹟

遺蹟と地方文化

遺蹟寺の縁起

遺蹟寺の宗祖像

宗祖霊場の形成と巡拝

遺蹟と周辺地域の伝承

古典文芸に描かれた法然上人像の研究

浄土宗における実践体系の研究

安居 香山

宮林 昭彦

藤井 正雄

芹川 博通

野田 秀雄

深貝 慈孝

代表 玉山 成元

玉山 成元

宇高 良哲

田中 祥雄

佐々木洋之

戸松 啓真

野田 秀雄

伊藤 唯真

三田 全信

伊藤 真徹

藤堂 恭俊

成田 俊治

伊藤 唯真

平 祐史

代表 榊 泰純

藤堂 恭俊

法然上人における実践体系の研究

その特質と論理構造について

善導との関係におけるその論理的根拠と背景

源信との関係におけるその論理的根拠と背景

浄土宗列祖における実践の解明

二祖弁長における実践の組織化

三祖良忠における実践論

七祖聖岡における実践の展開

浄土宗における実践論の課題

往相と還相としての考察

親鸞・一遍の実践との比較考察

浄土宗実践論の宗教哲学的考察

浄土教と対話の原理

浄土教と対話の原理(その一)

宗教哲学的研究

浄土教と対話の原理(その二)

比較宗教学的研究

浄土教と対話の原理(その三)

宗教心理学的研究

法然教学の基礎的研究

——特に法然上人の著書語録(法然上人全集/望月・

石井・浄全)索引の作製——

総論

人名索引の製作

地名索引の製作

寺院名索引の製作

書名索引の製作

術語索引の製作

法数索引の製作

論日索引の製作

成句索引の製作

年次・雑索引の製作

浄土教典の文献学的研究

地方における浄土宗檀林の展開

——江戸崎大念寺を中心として

浄土教の根本原理

——特に華嚴経との関連において

華嚴部経典と浄土教典

華嚴教学と浄土教

原始華嚴経の成立史的研究

華嚴部経典と西蔵華嚴経との関連性の研究

華嚴部経典別品殊経の研究

華嚴部経典の漢字訳の研究

華嚴部疑偽経の研究

法然浄土教の成立とその波紋に関する研究

法然浄土教成立の社会的基礎に関する研究

法然浄土教に於ける南都浄土教の思想的意義の研究

日本浄土教に於ける善導教学受容の研究

高橋 弘次

三枝樹隆善

成田 俊治

深貝 慈孝

明山 安雄

久下 隆

池見 澄隆

大北 裕生

真野 竜海

長谷川 尾俊

代表 香川 孝雄

香川 孝雄

藤堂 恭俊

水谷 幸正

沢田 謙照

高橋 弘次

加藤 善浄

深貝 慈孝

代表 成田 貞寛

成田 貞寛

佐藤 心岳

明山 安雄

三枝樹隆善

法然浄土教に於ける語燈録の思想的研究

三昧経典の基礎的研究

三昧経典の思想的諸形態

三昧経典の成立問題(一)

三昧経典の成立問題(二)

中国仏教における三昧経典の受容

昭和四十九年度

法然浄土教の成立とその波紋に関する研究

浄土宗列祖伝類に関する総合的研究

成立の背景

素材の分析

各伝の比較研究(以上「成立史的側面」)

思想史的考察

相承の形成と展開

教義的概念の様相

教義的概念の様相(以上「教義的側面」)

菩提心の研究

法然上人伝研究の動向に関する基礎的研究

中世における法然上人伝の研究

近世前半期における法然上人伝研究の動向

近世後半期における法然上人伝研究の動向

近代前半期における法然上人伝研究の動向

近代後半期における法然上人伝研究の動向

深貝 慈孝

宮林 昭彦

小沢 憲珠

大南 竜昇

金子 英一

佐藤 成順

現代における法然上人伝研究の動向

浄土教の根本義

——特に華嚴部経典群との関係において——

浄土宗における実践体系の研究

法然上人の基礎的研究

——特に法然上人の著書語録(法然上人全集)——

／望月・石井浄全／索引の作製

三昧経典の基礎的研究

京畿浄土宗寺院の古文書調査とその研究

浄土教と対話の原理

聞名欲往生の研究

——「法然と親鸞の信仰の接点」——

平 祐史

香川 孝雄

藤堂 恭俊

坪井 俊映

宮林 昭彦

中井 真孝

峰島 加雄

伊達 亮芝

伊達 胖哉

牧野 輝道

加藤 暢彦

佐伯 哲雄

佐藤 忠彦

加藤 依彦

三輪 晴彦

津秋 法宣

藤井 真光

その他

長谷川匡俊

真野 竜海

成田 俊治

伊藤 唯真

藤堂 恭俊

三田 全信

伊藤 真徹

平 祐史

山本 法純

地方における檀林の展開

浄土経典の文献学的研究

昭和五十年年度

如来藏思想經典の成立史的研究	代表 石橋 真誠	善導大師研究——特に浄土教の成立とその展開に関する基礎的研究	代表 三枝樹隆善
法然上人における善導教学の受容と展開	代表 藤堂 恭俊	善導教学に及ぼした曇鸞・道綽の思想的影響	三枝樹隆善
善導教学の基本的性格	河波 昌	善導教学に及ぼした聖道諸師の思想的影響	三輪 晴雄
法然教学の基本的性格	藤吉 慈海	善導教学成立の歴史的必然性とその社会的影響	佐藤 心岳
南都聖道家における善導教学の受容と展開	近藤 徹称	叡山浄土教における善導教学の受容形態	北崎 耕堂
北嶺聖道家における善導教学の受容と展開	福原 隆善	南都浄土教における善導教学の受容形態	成山 貞寛
善導と法然とにおける二昧思想	杉田 正善	近代における浄土宗史の研究	代表 高橋 弘次
善導と法然とにおける光明思想	藤堂 俊英	山崎弁栄の光明主義に関する研究	高橋 弘次
法然における善導教学の受容	藤本 浄彦	明治維新前後の混乱期における教学に関する研究	水谷 幸正
法然における善導教学の展開	藤堂 恭俊	椎尾弁匡の共生思想に関する研究	香川 孝雄
日本中世における浄土教家の善導教学の受容と新念仏義の組成についての研究	代表 明山 安雄	浄土教学におよぼせる西洋思想に関する研究	清水 澄
法然浄土教における善導教学の受容とその批判	坪井 俊映	浄土教学における問題意識とその解明の変遷に関する研究	沢山 謙照
証空の西山義における善導教学の受容と新念仏義の組成	深貝 慈孝	京畿浄土宗寺院の古文書調査とその研究	中井 真孝
長西の諸行本願義における善導教学の受容と新念仏義の組成	池見 澄隆	法然上人伝研究の動向に関する基礎的研究	代表 平 祐史
親鸞の真宗義における善導教学の受容と新念仏義の組成	久下 隆	中世における法然上人伝研究の動向	伊藤 真徹
南都浄土教（永観、珍海、良遍）における善導教学の受容と新念仏義の組成	明山 安雄	近世前半期における法然上人伝研究の動向	三山 全信
その他の浄土教家（幸西、隆寛等）の善導教学の受		近世後半期における法然上人伝研究の動向	藤堂 恭俊
		近世後半期における法然上人伝研究の動向	伊藤 唯真
		現代における法然上人伝研究の動向	成田 俊治
		東寺三密蔵所蔵浄土宗関係諸資料の研究	代表 平 祐史
			玉山 成元

佐藤 健

総合的研究

古文書部分担当

古記録部分担当

仏教寺院の社会的機能に関する研究

農山村における寺院の成立と展開

寺院と村落構造

寺院と民間信仰

玉山 成元

宇高 良哲

田中 祥雄

代表 藤井 正雄

田中 祥雄

広瀬 卓爾

鷺見 定信

(協力者) 中嶋 寛

中村 文樹

大阿弥陀経の基礎的研究(聞名欲往生の研究の継統として)

伊達 亮芝

浄土宗列祖伝類に関する総合的研究

成立の背景

素材の分析

各伝の比較研究(以上「成立史的側面」)

思想史的考察

相承の形成と展開

教義的概念の様相

教義的概念の様相(以上「教義的側面」)

中国における末法思想の展開

中国諸宗派の末法意識(1)

末法思想の諸形態

中国諸宗派の末法意識(2)

代表

佐藤 成順

宮林 昭彦

大南 竜昇

小沢 憲珠

学術奨励賞

昭和四十年年度より、本宗教師によって出版された学術書を対象に、その年度に学界および教界に寄与した著書に対して奨励賞を授与し、その功績を讃えることとなった。受賞者はつぎのとおりである。

昭和四十年度

魏書釈老志の研究

原始仏教教団の研究

昭和四十一年度

成立史的法然上人諸伝の研究

昭和四十二年度

宗教心理の研究・日本人の仏教

昭和四十四年度

緯書の研究

浄土教思想研究

昭和四十五年度

空観と唯識観

観智国師の研究

六朝古逸観世音応驗記の研究

昭和四十六年度

民俗仏教と祖先信仰

昭和四十七年度

現観莊嚴論の研究

昭和四十九年度

浄土教思想論

日本浄土教文化史研究

昭和五十年度

飛鳥白鳳仏教論

真野 竜海

服部 英淳

伊藤 真徹

出村 圓澄

安居 香山

藤吉 慈海

田中 順照

玉山 成元

牧田 諦亮

竹田 聴洲

規程

宗規 第三十一号 浄土宗教学院規程

改正正
昭和三八年三月二日發布達示第一九号
昭和四四年六月二十九日達示第二五号
昭和四七年一月二日達示第三五号
昭和四九年三月九日達示第一七六号

第一条 浄土宗務庁内に、浄土宗教学院（以下「教学院」という）をおく。

第二条 教学院は、左の者を会員とする。

一 学階所有者

二 学階所有者以外の教師にして、理事会において選考された者

第三条 教学院は、会員相互の連絡を図り、浄土宗教学の研究及び一宗教学振興に関して寄与するをもって目的とする。

第四条 教学院は、その目的を達するため左の事業を行う。

一 総会及び研修会の開催

二 浄土宗教学大会を年一回開催

三 月例研究会の開催

四 研究生の養成及び指導

五 仏教論叢、仏教文化研究の発行並びに學術書の蒐集及び発行

六 その他必要な事業

第五条 教学院は、浄土門主を総裁として推戴する。

第六条 教学院に顧問若干人をおく。顧問は、大木山法主及び学階勸学を有する者をあて、重要院務につき院長の諮問に
応ずる。

第七条 教学院に左の役員をおく。

一 院長 一人

二 理事 若干人（このうちに常務理事一人をふくむ）

三 主幹 一人

2 前項の他必要により、職員をおくことができる。

3 院長は、宗務総長が当り、院務を統轄する。

4 理事は、院長が任命し、院務の執行及び学階進叙の諮問に應ずる。

5 理事のうち一人を常務理事とし、教学局長が当り、常務を行う。

6 主幹は、院長が任命し、院務を掌理する。

第八条 理事及び主幹の任期は、四年とし重任を妨げない。但し、補欠により就任した者の任期は、前任期の残任期間とする。

宗令 第七号 浄土宗教学院研究所規程

改正 昭和三八年三月二日發布達示第一九号
昭和四八年三月九日達示第一八二号

第一条 浄土宗教学院に研究所をおき、浄土宗教学院研究所（以下「研究所」という）という。

第二条 研究所は、教学院の指導により研究をなすとともにその成果を教学院に報告しなければならない。

第三条 研究所は、その目的を達するため左の事業を行う。

一 年二回学術研究誌（教学院紀要）を発刊する

二 研究に必要な資料の蒐集並びに助成の要請

三 研究生の指導監督

四 教化資料の研究

五 その他必要な事業

第四条 研究所に左の職員をおく。

一 所長 一人

二 主任 二人

三 主事 二人

2 所長は、理事の中から選定し、教学院長が任命し、主任並びに主事は、所長の具中により教学院長が任命する。

3 所長、主任の任期は四年とし、重任を妨げない。

第五条 研究所において専門の研究に従事するものを研究員という。

2 研究員は、教師で学歴学力共に研究員として適当と認められ、所長の指示に従い所定の研究に当る者をいう。

第六条 研究所において研究に従事するものを研究生という。

2 研究生は、教師で学歴学力共に研究生として適当と認められ、所長の命ずる研究に当る者をいう。

第七条 研究員の研究期間は、二年とする。但し、所長の認定によってその期間を延長することができる。

第八条 研究所の運営、その他この規程を施行するため必要な事項は、細則で定めることができる。

附 則

この規程は、昭和三十八年三月二日より施行する。

浄土宗教学大会

本宗全学侶の長老、新進を問わず、悉く一堂に会さしめ、その蘊蓄と識見とを吐露し、浄土宗学人の動向を知り、教学の金字塔を樹立することを目的としている。そのために次の諸規定を設けた。

一、研究の範囲 広義の宗学、即ち宗門教学振興に寄与するもの。

二、発表方法 原稿朗読法により十五分間以内。

三、発表者の資格 教学院会員、同研究会会員並びに相当実力ある好学の宗侶にして会員の責任ある推薦によるもの。

この大会を実行するためには宗門人に認識させる必要を感じ、地方の教務所、教化団と提携して一般の注意を喚起した。その一端として仙台、名古屋において大会を催したのである。しかし、残念ながら第二回大会を終了した直後、宗門の分裂にあい、大会にも支障をきたしたが、学人のみでも協力すべきであるとの意見のもとに、従来の宗学大会を改名して教学大会とし、主催も浄土宗教学院、仏教文化研究所共催とした。その最初が昭和三十年で宗学大会以来、十度の大会がもたれたのである。ここで特筆すべきことは大会の運営方法である。共同研究は、四人の発表者が同一課題のもとに発表し、討議会は現在宗門が直面している課題を討議するシンポジウム形式をとっていることで、まさしく現在の学界がとっている運営方法に他ならず、これを逸早く採用したことに対し当事者の慧眼に敬服せざるを得ない。現在の学界は全く教学大会の模倣といっても過言ではあるまい。

現行教学大会は、宗門が合同する七年前、即ち昭和三十年大会を第一回とし、開宗八百年の昭和四十九年には第二十回大会が開催されている。

第一回浄土教学大会

期日 昭和三十年六月二十五・二十六日

会場 京都・総本山知恩院雪香殿

特別講演

清涼寺本尊胎藏品に見られる信仰情熱

—スライド使用—

京都大学教授

浄土教の再認識

大正大学長

共同研究 主題「法然上人の研究」

専修念仏停止運動 —興福寺奏状をめぐる—

伊藤 真徹

法然教学に於ける選択と統攝原「知恩院」の変遷に

ついて

小沢 勇貫

法然上人と隆寛已講

三田 全信

浄土教の課題

田村 圓澄

討議 浄土宗学興隆の具体的方策如何

一般研究発表(第一部会)

金沢文庫所蔵『群疑論疑芥』

坪井 俊映

平安時代における観音靈驗所の分布並にその形態

成田 俊治

珍海已講の浄土教—特に善導教との関聯について—

中岡 隆善

法然上人と解脱上人

高根 俊成

聖の宗教活動について—皮聖行円の場合—

伊藤 唯真

法然上人阿弥陀仏鏡の特異性

大屋 瑞彦

元和条目の成立史的一考察

平 祐史

鎌倉時代における自然法爾思想

梶村 昇

浄土修道の方法

戸松 啓真

法然上人の法語に於ける「殿上」の語を一資料として

小川 竜彦

法然上人の学風

千賀 真順

三業を超える念仏

藤吉 慈海

近世初期白旗派教団の諸門流統合過程に就て

大橋 俊雄

浄土教美術の特色

小島 章見

浄土諸系譜に就ての一考察

嵐 瑞澂

自力他力論

藤原 了然

法然上人の人間観

西川 知雄

古逸書静照の極楽遊意について

恵谷 隆戒

近世に於ける念仏真言両系の清涼寺一山支配に関する紛争

塚本 俊孝

日本初期浄土教に於ける二、三の問題

服部 英淳

曼鸞教学に於ける觀經の受容過程とその役割

藤堂 恭俊

出過三界道について

佐藤 賢順

蓮華藏世界と極楽浄土

香月 乗光

宗義と現益

阿川 貫達

一般研究発表(第二部会)

阿育王小摩崖法勅の教团的意義

春日井真也

仏教の女性観

静永 湛澄

太子疏の特色—維摩経義疏を中心として—

成山 貞寛

初期仏教教団の分布状態推定に関する問題

賀幡 亮俊

婆沙所出諸論師説に就て

宅見 春雄

浄影寺慧遠の如来蔵思想

梅辻 昭音

五輪塔成立史の研究

明治維新の本質と寺檀関係

涅槃經集解における如米藏義

「法」の基本概念について

唐代読誦音の一遺影

「五事」について

宗教生活への関心

Mahāvīrutpati の編纂年代について

仏教用語の現代語訳について

三性についての一考察

大乘義章における仏性義

宗教発生に関する生物学的一考察

漢代の封禅についての一考察

中国における仏教信仰の推移—宝誌和尚伝攷—

日本人の宗教的心性

即の論理

第二回浄土教学大会

期 日 昭和三十一年六月九・十日

会 場 名古屋市東区筒井町 建中寺徳興殿

指導講演

広開浄土門の本義

浄土教美術と浄土信仰

共同課題 平安朝の往生浄土思想

齋藤 彦松

竹田 聴洲

加藤 善浄

松崎 可定

水谷 真成

佐藤 良智

山下 英弑

香川 孝雄

小林 義弘

近藤 徹称

水谷 幸正

南 慈朗

安居 香山

牧田 諦亮

稲岡 順雄

田中 順照

平安朝の往生思想—特に天台系の思想について—

平安朝における善導大師の往生思想受容について

『往生要集』の思想

禅林寺永観の思想—『往生捨因』を中心として—

一般研究発表(第一部会)

法然上人の円頓戒正統者について

法然教学における悪の問題

大乘起信論に於ける念仏論

浄土教と情意の論理

法然滅後の宗義流布とその外的事情

仏身論の一考察—特に法然・親鸞を中心に—

往生要集の見方、法然上人の選択眼

諸行生不論の問題点

門中寺院の説明と門中法要についての解説

一般研究発表(第二部会)

炎肩像をあらわすクシャーン王朝貨錢の仏教経典史

意義

思円上人の太子観

漢訳仏典に於ける二人称代名詞について

「古今小説」に現われた明代仏教の庶民性

願 (Prāidhāna) のこと

Prāipati のこと

六卷泥洹経について

如来蔵依持説について

阿川 貫達

恵谷 隆戒

藤吉 慈海

藤堂 恭俊

三田 全信

坪井 俊映

藤原 了然

松崎 可定

戸松 啓真

大屋 瑞彦

藤井 実心

小沢 勇貫

吉水 文雄

春日井真也

成田 貞寛

水谷 真成

牧田 諦亮

香川 孝雄

近藤 徹称

水谷 幸正

加藤 善浄

一般研究発表(第一部会)

- 日本上代における観音信仰の形態
- 義寂の四十八願観
- 嵯峨釈迦如来信仰と徳川氏
 - 江戸開扉と元禄の再建—
- 法然と親鸞における信仰の構造
- 番場時衆—浄土宗一向派教団の性格について—
- 近世仏教教団統制の性格について
 - 特に浄土宗教団の場合—
- 法然上人における「苦」について
- 日本浄土祖師石幢塔の研究
- 知恩院所蔵「礼仏懺悔作法」について
- 法然上人の往生思想
 - 特に平安朝の往生思想に比して—
- 念仏信仰の二面性—その習俗性の修道性—
- 浄土教に於けるアナログア論理
- 行願結構の場について

一般研究発表(第二部会)

- 尊者物懐子について
- 嘉祥大師における空の理解
- 外道と異端
- 古代仏教と白度僧
- 第六結集の仏典編纂について
- パーソナリティと宗教的適応に就て

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| 成田 俊治 | 中岡 隆善 | 塚本 俊孝 | 梶村 昇 | 大橋 俊雄 | 平 祐史 | 西川 知雄 | 斎藤 彦松 | 伊藤 真徹 | 千賀 真順 | 中村 康隆 | 佐藤 賢順 | 林 碩聞 | 賀幡 亮俊 | 田中 順照 | 峰島 旭雄 | 伊藤 唯真 | 石橋 真誠 | 南 慈朗 |
|-------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|

相応部有偈品偈頌の構成について

漢末における黄老と仏教

仏教の宋学に及ぼした影響とその背景

—特に宗密と周濂溪について—

神子問答について

「寿」について

婆沙所収諸論師所屬部派について

信生法師日記

罰とたたりの系譜

討議 青年教化と五重相伝

第三回浄土教学大会

期日 昭和三十二年六月二十二・二十三日

会場 京都・知恩院山内華頂会館・華頂短期大学

特別研究発表 法然上人の開宗とその教団について

法然上人の浄土開宗の年時と教化の態度について

法然教団の教団組織について

—特に法然上人の御法話を中心として—

法然上人伝の諸問題

一般研究発表(第一部会)

我国に於ける念仏門の系譜—空也上人と良忍上人—

補陀落信仰の性格

「機根」名義放

善導の実践的立場

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 石上 善広 | 安居 香山 | 広山 秀則 | 鈴木 成元 | 佐藤 良智 | 宅見 春雄 | 鶴田 湛泉 | 竹中 信常 | 大橋 俊雄 | 福井 康順 | 静永 湛澄 | 成田 俊治 | 水谷 幸正 | 中岡 隆善 | 香月 乗光 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|

隆堯法印の著書

『往生論』より『論註』への展開

臨終行儀について

『三部經大意』について

鈴木正三の念仏について

浄土宗寺院に於ける朱印地成立の一例

『十二問答』について

七箇条の起請文について

法然上人の『三昧発得記』

般若波羅蜜と念仏三昧

一般研究発表(第二部会)

パスカルに於ける宗教への動機づけについて

『現觀莊嚴論』の結構と現觀の意味

初期仏教教団に於ける経済現象

仏滅年紀による『末法燈明記』の撰述期の研究

『宇治拾遺物語』の仏教説話について

漢訳仏典に及ぼせる西域語音の影響

鎌倉時代に於ける諸宗融會合行説

—特に無住一門について—

アッシューカ王碑文における問題

—Bhobru法勅における法門—

部派所説の三世区分について

部派仏教教団形成に關する考察

無始時來界について

鈴木 成元

藤堂 恭俊

中村 康隆

戸松 啓真

藤吉 慈海

佐藤 行信

梶村 昇

阿川 文正

嵐 瑞激

服部 英淳

南 慈朗

石橋 真誠

宮林 昭彦

斎藤 彦松

武田 斎彦

水谷 真成

伊藤 真徹

竹本 寿光

宅見 春雄

賀幡 亮俊

近藤 徹称

雍正帝と仏教

『金剛針論』漢訳攷

ラダクリシュナン「信仰の回復」について

一般研究発表(第一部会)

謡曲に見えたる弥陀信仰と浄土観

浄土念仏安心の一考察

至誠心の体は何か

初期浄土教典籍の伝来についての一考察

仏性論と浄土宗教義

念仏と諸行の關係について

法然教学における善導像の受容過程

廻向発願心の問題

定明夜襲の疑点について

浄土教大乘傍流説への反論

貞慶の釈迦信仰の系譜

敦煌本『廬山遠公記』

一般研究発表(第二部会)

宋学の源流と仏教—韓愈の排仏・李朝の学—

道生の思想

宗教的実存—G・マルセルについて—

仏教用語の現代語訳に關する賛否両論とその問題点

について

『三才談』の出典について

智儼五教訓の成立について

塚本 俊孝

香川 孝雄

佐藤 賢順

古水 琢磨

佐々木堯海

郁芳 随潤

滝 安雄

千賀 真順

松崎 可定

坪井 俊映

藤原 了然

三田 全信

小沢 勇貫

成山 貞観

牧田 諦亮

広山 秀則

加藤 善浄

峰島 旭雄

小林 義弘

石上 善心

梅辻 昭音

Abhidhammattha-sangaha に於ける心・心所法

漢代図讖の宗教思想

中観派と唯識説

『起信論』の観について — 年代論の一部として —

「問」について

宗教的状况の転機としての死

南北仏教の相違

称名の事的性格

愚人正機

共同討議

現代に於て浄土教のいかなる点を私は強調するか

佐藤 良純

安居 香山

田中 順照

松濤 誠廉

西川 知雄

竹中 信常

佐藤 密雄

佐藤 良智

阿川 貫達

塚本 善隆

佐藤 賢順

西川 知雄

千賀 真順

家康と観智国師との関係

近世浄土宗形成の精神的素地

宗祖大師二十五霊場思想の生起について

現代に生きる浄土教

浄土三部経音読法について

浄土開宗についての法然像の形成

浄土教に於ける廻向の意義

絵伝法然について — 類比と象徴 —

『醍醐本法然上人伝記』と『源空聖人私日記』との比較

『七箇条起請文』と『送山門起請状』とについて

念仏別時意説について

末法思想と浄土教の実存

一般研究発表 (第二部会)

文化概念について

持戒と反持戒について

聖のもつ側面的性格

煩惱の語について

日本仏教に関する外国語文献について

未 詳

十地説と菩薩の総願について

般舟三昧経を繰る考察

比較文学と比較哲学

上代仏教美術における色彩と文様

鈴木 成元

平 祐史

村上 博了

峯崎 成孝

八百谷孝保

坪井 俊映

藤原 了然

佐藤 賢順

三田 全信

香月 乗光

阿川 貫達

恵谷 隆戒

藤井 正雄

宮林 昭彦

成田 俊治

石上 善応

佐藤 良純

水谷 幸正

石川 孝之

香川 孝雄

峰島 旭雄

第四回浄土教学大会

期 日 昭和三十三年六月五・六日

会 場 東京・大正大学

指導講演

宝 号

大正大学名誉教授

椎尾 弁匡

一般研究発表 (第一部会)

正如房へつかはす御文について

未 詳

七箇条起請文について

阿川 文正

松野 瑞昌

大橋 俊雄

―特に天寿国曼荼羅及び当麻曼荼羅について―

曼鸞の「広略相入」観について

化成院始末記

婆沙論所収の大家部教説に就いて

乞食について

弾誓上人の信仰

一般研究発表（第一部会）

兼信因果の立場について

宗祖の教義と日蓮上人

仏教倫理と浄土教倫理

再び法然上人に関する問題について

一般研究発表（第二部会）

筑後善導寺開山塔の研究

雍正帝の念仏

魂の医術

生死解脱の意義

特別研究発表

「行事儀礼に現われた浄土教信仰の形態」

十夜念仏と秋亥子・十間夜アキイノコ トウカンヤの行儀

―純浄・俗浄の二交点―

往生思想と往生に関する行事儀礼

来迎会と臨終行儀

浄土宗制定「日常勤行式」について

服部 英淳

服部佐智子

藤堂 恭俊

中村 康隆

宅見 春雄

宮沢 正順

伊藤 真徹

松崎 可定

小沢 勇賢

佐藤 良智

千賀 真順

齋藤 彦松

塚本 俊孝

竹中 信常

佐藤 密雄

竹田 聴洲

三田 全信

戸松 啓真

藤堂 恭俊

シンポジウム

浄土宗寺院に於いて行われている行事儀礼と浄土宗学

第五回浄土教学大会

期 日 昭和三十四年十月二十六・七日

会 場 京都・知恩院雪香殿

特別研究発表

念仏一行の選択に関する三代の見解

本願観の展開

三代教学に於ける相承の意義

三代宗義に於ける念仏と諸行

一般研究発表

『選択集』第三章段の十八文字と平家物語

欧米における浄土教的契機

『日没礼讃』説傷発願の文について

『知恩伝』の再吟味

祖師伝に見る二河白道の図

仏教と現代科学

原始仏教に於ける五蘊説―特に行について―

刻文資料による説法沙門

信の一考察―特に竜樹を中心として―

唯識所現の浄土

空と中

『注維摩詰経』に現われた僧肇の十地思想

香月 乘光

藤堂 恭俊

千賀 真順

小沢 勇賢

小川 竜彦

藤吉 慈海

水谷 幸正

三田 全信

井川 定慶

静水 湛澄

高橋 弘次

賀幡 亮俊

沢田 謙照

近藤 徹称

田中 順照

石原 良純

破邪法華三卷抄

鎮護国家について

敦煌本浄度三昧経について

シナの史書にみられるクシャーナ族の動向

パスカルに於ける愛の情念と宗教的動機の問題

山路愛山の仏教論

人間関係における「誤解」について

浄土文学としての平家物語

仏教的民俗芸能の一形態について

—特に但馬地方における郷土芸能を中心として—

惣堂について—その発展と機能—

選択ということ

津戸三郎へつかわす御返事について

越中国光明房へつかわす御返事について

法然上人の罪惡について

「われ浄土宗をたつところは」の意義

「二枚起請文」の教学的位置について

往生の念仏と人格形成の念仏

日課念仏について

元興寺智光の本願観についての一考察

近世浄土宗教学史上における二祖三代教学の提唱

経量部思想の展開に関する一考察

般舟三昧経における念仏
阿含における生天思想について

小林 知道

山村 圓澄

牧田 諦亮

佐藤 心岳

南 慈朗

高根 俊成

西川 知雄

吉水 琢磨

田村 信隆

平 祐史

小林 義弘

阿川 文正

木村 貫学

戸松 啓真

三枝樹隆善

松崎 可定

別府 信空

伊藤 真徹

滝 安雄

坪井 俊映

若麻績侑孝

香川 孝雄

平野 真完

仏教史伝の成立についての一考察

日蓮の戒律観

覚盛と叡尊

三論教義の教格について

出家受具論

mahavastu に於ける倫理観

門前町に就いて—その現代的性格—

池田光政の宗教政策と民間信仰

創価学会の危機意識

一ツ目小僧出現—宗教の粉飾—

無知と不知

『看病用心抄』について

近世における護法運動の展開とその思想

近世浄土宗寺院の成立と発展

—本宗寺院成立の諸類型—

近江(湖南地区)における本宗教団の発展

われわれの寺院はどうして出来たか

シンポジウム

将来における浄土宗義の展開の方向

宅見 春雄

宮林 昭彦

成田 貞寛

藤原 了然

佐藤 密雄

石川 孝之

吉田 雅男

鴨谷 円我

竹中 信常

中村 康隆

佐藤 賢順

鈴木 成元

恵谷 隆戒

成田 俊治

伊藤 唯真

竹田 聰洲

提起

佐藤 良智

藤吉 慈海

可会 恵谷 隆戒

塚本 善隆

第六回浄土教学大会

期日 昭和三十五年十一月二十二・二十三日

会場 京都・仏教大学

特別研究発表

法然上人の往生観

法然上人の御忌について

法然上人の浄土観

法然上人の御忌について—中世篇—

一般研究発表

南都三論系の浄土教について

乃至十念の反省（寿経の十声称念について）

善導教学における苦・楽の理解

善光寺大本願の浄土宗所屬年代に関する一考察

法然上人伝（増上寺本）について

法然上人の雑行に対する態度

法然上人の選択という意義

宗祖の他力観について

室町期の浄土教信仰史序説

法然上人と現代人

西福寺の成立について

散心念仏について

法然門下における信空の位置

信と悪について

法然上人と解脱上人

太胡太郎実秀につかはす御返事について

観称勝劣論に対する宗義史的考察

念仏と煩惱

本宗寺院の一般的成立方法論的総括

東日本に於ける寺院の開創年次について

西日本に於ける寺院の開創年次について

世親の報身仏論

文雄の『金剛宝戒章真偽介』について

檀家と檀那寺

中国に於ける起信論の理解

祖師伝の非史実性の意義に就て

「迷信」の機能とその心理性

法然教学に於ける業思想

念の一考察

「比丘大戒序」について

廃仏毀釈に於ける人的対応の諸相

頼子部の補特伽羅説

九品浄土の理解について

閩通教学の特色

疑偽經典と浄土教

塚本博士頌寿記念『仏教史学論集』所収「シナ浄土教における随逐擁護説の成立過程について」

法然上人の下山について

成田 貞寛

戸松 啓真

藤原 了然

阿川 貫達

竹田 聰洲

成田 俊治

伊藤 唯真

金子 真補

峰島 旭雄

吉田 雅男

石橋 真誠

宅見 春雄

藤井 正雄

香川 孝雄

石上 善心

宮林 昭彦

中村 康隆

佐藤 良智

小沢 勇賀

深貝 慈孝

藤堂 恭俊

「仏教文化研究」第九号所収一

- 法然上人伝に記するところの浄土閉宗の異説
- 西山派の記主上人について
- 法然上人の至誠心積における四句分別について
- 山城国における本末組織について
- 民俗と仏教 — 個有信仰と仏教の受容について —
- 原始仏教における人間形成論
- 仏典にあらわれるアンヴァゾーシャの人間像
- 一圃提攷
- 高僧伝にあらわれた僧侶の儒・道思想
- 天台の空
- 大乘仏教における經典書写の問題
- 仏身(三身)説の意味するもの
- 名号の論理
- パスカルにおける象徴と奇蹟の意味について
- 唐詩から観た六時礼懺
- 転業と念仏
- 信機信法について
- 『仏教文化研究』第十号所収 —
- 雍正帝の著『棟庵弁異録』の主張
- 『岐阜大学文学部研究報告』(人文科学)第九号所収
- 華嚴学よりみたる聖浄二門について
- シンポジウム

- 三山 全信
- 井川 定慶
- 嵐 瑞澂
- 香月 乗光
- 平 祐史
- 田村 信隆
- 高橋 弘次
- 佐藤 心岳
- 水谷 幸正
- 安居 香山
- 田中 順照
- 竹本 寿光
- 沢田 謙照
- 近藤 徹称
- 南 慈朗
- 小林 知雄
- 静永 湛澄
- 西川 知雄
- 塚本 俊孝
- 小松 説愨

べきか

第七回浄土教学大会

期日 昭和三十六年十一月四・五日
 会場 京都・知恩院雪香殿
 特別研究発表
 法然上人の浄土観
 一般研究発表

第一部会

- 南都浄土教と光明山寺をめぐる一考察
- 起行に於ける規定と無規定
- 嘉禄法難の疑問
- 袋中上人諸伝記の成立について
- 和語燈録と四十八巻伝
- 正信房湛空について——特に七箇条起請文および四巻伝の著者に関する私見——
- 臨終米迎について
- 熊谷蓮生房について
- 善導教学に於ける罪惡意識
- 浄土教と縁起の問題
- 新宗乘の建設
- 称名と散撰
- 浄土教の非神話化について

- 佐藤 賢順
- 香月 乗光
- 明山 安雄
- 別府 信空
- 鈴木 成元
- 丸山 博正
- 戸松 啓真
- 三田 全信
- 松崎 可定
- 阿川 文正
- 三枝樹隆善
- 近藤 徹称
- 岸 覚勇
- 大谷 旭雄
- 藤吉 慈海

観経の心理像

椎尾法主の「正伝法会」について

一念多念―教団史的考察―

観経正依説について

「善導十徳」の成立について

指方立相私見

示現凝然『往生註論議』について

浄土三派の諸行生不生論について

念仏易行に関する考察

往生論についての一考察

法然上人の念と戒について

第二部会

別所と散所

行と業

戦後に於ける宗教調査の方法について

如来蔵思想經典の成立について

カニシカ王の仏教帰依に関する説話

浄禅一致について

宗教私見―罪について―

古版本『寒山詩集』について

月蓮説話の系譜

如来蔵義の中国的展開
日本人の宗教に於ける知識と信仰について

竹中 信常

千賀 真順

伊藤 唯真

小沢 勇實

大橋 俊雄

沢田 謙照

峰島 旭雄

金子 真補

坪井 俊映

松野 瑞海

吉川 瑞浩

伊藤 真徹

鴨谷 円我

高橋 弘次

吉田 雅男

石橋 真誠

佐藤 心岳

塚本 俊孝

清水 澄

広山 秀則

石上 善応

水谷 幸正

西大寺叡尊の戒律復興について

民間に伝承する法然上人

増上寺一山の神仏分類について

経道滅尽と称名行

法難についての一視点

法滅尽経と一、二の疑偽經典

初期仏教史伝の虚構と象徴について

道宣の戒律観の一考察

称名の語について

過去仏について

鬼の念仏

敦煌本往生礼讚について

七箇条起請文についての一考察

現代のモラルと仏教

方便と俗諦

僧中有仏無仏論

シンポジウム
念仏をいかに生活にいかすべきか

成田 貞寛

平 祐史

江良 成実

小林 知道

成田 俊治

藤堂 恭俊

宅見 春雄

宮林 昭彦

香川 孝雄

竹本 寿光

中村 康隆

牧田 諱亮

柴田 哲彦

静永 泚澄

服部 英淳

佐藤 良智

藤原 了然

西川 知雄

第八回浄土教学大会

期日 昭和三十七年十一月十七・十八日

会場 東京・大正大学

記念講演

現代科学と仏教

東大助教授

武藤義一氏

特別研究発表

浄土宗における異安心論

伊藤 真徹

小沢 勇貫

香月 乗光

一般研究発表(第一部会)

浄土宗における神祇信仰の系譜

大橋 俊雄

『選撰集』撰述の理由

鈴木 成元

法然上人絵伝の重写に就いて

阿川 文正

『小消息』私考

清水 澄

『九卷伝』の疑義

三田 全信

各種法然上人伝に引用されている法然の詞について

藤堂 恭俊

定散二善の念仏

戸松 啓真

阿弥陀仏と衆生

高橋 弘次

法然教学の主体性

高橋 松海

法然教学における弁証法的性格

松崎 可定

偏依善導論

服部 英淳

阿弥陀経の経題について

内田 諱賢

唐代に於ける浄土教興隆の原因

柴田 哲彦

浄土教と方便 — 経典論的立場からの考察 —

沢田 謙照

念仏の一考察

別府 信空

経典に説示せられた念仏と信

香川 孝雄

現代思想と念仏信仰の生活

峯崎 成孝

浄土教の非神話化について

藤吉 慈海

念仏断惑論

称名と信心

現今我国に現存する民間念仏の諸型態

民間念仏実態調査

遠州大念仏と芸能(8ミリ映画使用)

兩乞念仏と民俗信仰(スライド使用)

— 特に天草若宮地方を中心に —

六斎念仏講と村落

融通念仏宗に於ける御回在行事(8ミリ映画使用)

一般研究発表(第二部会)

行誡上人の布教行について

江良 成実

無量寿経における中国思想の考察

吉田慧日丸

極楽浄土九品往生義における称名念仏について

佐藤 成順

曇鸞大師の往生思想

金子 真補

興福寺奏状の思想的背景についての考察

成川 貞寛

法身について

水谷 幸正

往生要集における観勝称劣論

藤原 了然

十往生阿弥陀仏国経と阿弥陀覚諸大衆観身

牧田 諱亮

— 浄土教家と疑似経典 —

宮林 昭彦

『増一阿含序』について

宮林 昭彦

現代庶民信仰とその運動

安居 香山

— 創価学会を中心として —

竹中 信常

現代社会における非宗教化作用の諸相

藤井 正雄

仏教寺院の地縁類型

藤井 正雄

政権動揺時代の西福寺

誓願と誓願画 (Pranidhi-Bild)

近世善光寺の出開帳

—特に享和・文政両度江戸開帳用記に基づき—

仏教思想の合理性・科学性について

如来蔵経についての一考察

Netipakarana について

弥勒授記におけるユートピアについて

般若経の内容的発展について

文学に表われた浄土教

「スーフィズム」発達史上に於ける若干の問題

パスカルの人間観

佐藤賢順博士の宗教哲学思想

社会変革における適応関係と宗教変容

アビダルマ倫理

シンポジウム

称名と信心

佐藤 行信

平野 真完

鷹司 誓玉

静永 湛澄

賀幡 亮俊

佐藤 良純

石上 善心

真野 竜海

白川 忠俊

石井 道彦

南 慈朗

峰島 旭雄

中村 康隆

佐藤 良智

宅見 春雄

藤堂 恭俊

真野 竜海

司会 佐藤 良智

記念学術講演

浄土教の成立

特別研究発表

念仏三昧の本質と称名

本縁文学に於ける弥陀・極楽の思想

一般研究発表(第一部会)

法然上人の筆蹟について

教学と信仰

別時意説に対する善導大師の見解

念仏についての一考察

念仏論考

禅と念仏の問題

法然教学の主体性 その2 —但念仏について—

法然上人の念仏思想

法然教学における善とされるもの

法然上人の捨聖帰浄の理由について

唯心の浄土説について

選択集の綱格について

浄土教の非神話化批判

浄土教今日の課題 —現世利益について—

浄土宗学の性格について

報身の一考察

阿弥陀仏信仰の起源—渡辺照宏博士の説への反論—

阿弥陀経の成立についての一考察

大谷大学名誉教授 金子大栄氏

服部 英淳

高島 寛我

小川 竜彦

梶村 昇

八木 宜諦

白川 恵俊

戸松 啓真

山丸 徳善

高橋 松海

藤堂 恭俊

坪井 俊映

香月 乗光

深貝 慈孝

高橋 弘次

峰島 旭雄

岸 覚勇

清水 澄

沢田 謙照

香川 孝雄

内田 謙賢

第九回浄土教学大会

会期 昭和三十八年十一月二十二・二十三日

会場 京都・仏教大学

法然教学に於ける弁証法的性格

曇鸞大師の浄土観

道綽祥師の懺悔とその背景

安樂集における引用文の一考察

善導教学における「観」について

鎮西教学における創意性の問題

一般研究発表(第二部会)

我が国浄土教芸能伝承の変異性について

会津八葉寺の空也念仏について

大峯信仰の儀礼 — 戸閉式について —

墓地の層位 — 大和郡介野来迎寺中間報告1 —

齋衆について

法然門下における降寛の位置

桜ヶ池の伝説と法然教団

維摩経の一考察

虚構の宗教的意義について

カニシカ王の仏典結集の信憑性

未定

鎌倉期南都諸師の太子観

四分律宗の分派について

松崎 可定

金子 真補

大谷 旭雄

諸隈 良泰

三枝樹隆善

藤原 了然

伊藤 真徹

明山 安雄

成田 俊治

竹田 聰洲

伊藤 唯真

鈴木 成元

平 祐史

水谷 幸正

宅見 春雄

佐藤 心岳

佐藤 良純

成田 貞寛

宮林 昭彦

忍性上人の持戒念仏論について

法然上人伝記の重写について

如法経聖としての法然上人

田辺哲学と浄土教

敦煌の浄土教系擬経について

宗教における制度の機能と近代性

念仏芸能の一考察

円台寺趾石塔群の研究

創価学会の浄土教批判

再び浄土教大乘傍流説に対して

シンポジウム

称名念仏の現代的意義

大橋 俊雄

阿川 文正

三山 全信

藤吉 慈海

牧田 諦亮

藤井 正雄

鴨谷 円我

斎藤 彦松

安居 香山

小沢 勇貫

小沢 勇貫

水谷 幸正

藤吉 慈海

司会

丸山 博正

高橋 松海

阿川 文正

静永 賢道

第十回浄土教学大会

会期 昭和二十九年十一月十一・十二日

会場 東京・大正大学

一般研究発表(第一部会)

鎮西・西山両派の安心論

法然教学の主体性

法然上人伝の一考察 — 拾遺古徳伝絵詞について —

浄土教批判論

浄土宗伝道史上における民俗伝承の位置

浄土宗における阿彌陀仏名の依用について

法然教学の客観的基盤

三心の解釈における二、三の問題

異類の助業について

「唯心浄土説」について

法然上人に於ける実存について

元祖の仏身論について

南都戒と実範

—法然上人の南都歴訪を視点として—

法然上人に描かれた法要について

浄土經典解釈学の新しい立場

南都浄土教における観經疏受容について

浄土宗民間念仏行事の形成過程

—特に湖山栖岸寺の場合—

宗史の意味の問題 —一つの説問として—

宗学と布教との関係についての問題点に対する二、

三の考究

浄土宗布教の問題点

黒田聖人考

徳本行者はウバイに非ず

浄土の理解について

無量寿經と法蔵菩薩

一般研究発表(第二部会)

平 祐史

大橋 俊雄

松崎 可定

小沢 勇貫

香月 乗光

服部 英淳

白川 恵俊

高橋 弘次

大谷 旭雄

榊 泰純

賀幡 亮俊

明山 安雄

成田 俊治

戸川 靈俊

藤原 了然

藤吉 慈海

三田 全信

伊藤 真徹

千賀 真順

福富 海岳

無観の称名について

中国における浄土教受用の特殊性

—特に唐代を中心として—

成実論師の思想的立場

仏教教団近代化の一考察

ネットイにおけるユッテイについて

古文書にみる日蓮像

寺院と布教圏 —宗門の現代化をめぐる(2)—

婦命と呼称

仏教における竜蛇信仰

宗教の外延

彼土、此土の問題

M・ウェーバーの「経済倫理」の概念

大赦と放生

蓮社念仏の研究序説

中国における『勝鬘經』の流伝

宗学と神学(1)

善導における憶念の意義

弥陀本生説話の成立について

『往生論註』と偈證

鎌倉期南都諸師の末法観とその思想背景

婆沙所収異部派教義に就いて

アショーカ王法勅解釈の立場

—「一切の人は皆これ朕の子である」の章—

三宅 光二

柴田 哲彦

佐藤 成順

宮林 昭彦

佐藤 良純

鈴木 成元

藤井 正雄

真野 范海

中村 康隆

佐藤 良智

清水 澄

芹川 博道

野田 秀雄

金子 真補

佐藤 心岳

峰島 旭雄

三枝樹隆善

香川 孝雄

藤堂 恭俊

成田 貞寛

宅見 春雄

春日井真也

布教の真義 — 吉岡呵成の沛雨遺書について —
 特別研究発表
 牧田 謙亮

— 教學院研究所研究成果報告 —
 五重相伝の研究

— 寺院布教における化他五重の機能について —
 法然上人伝の成立史的研究
 坪井 俊映
 三田 全信

如来藏思想の研究
 水谷 幸正
 近藤 徹称
 戸松 啓真

大乘の帰結として浄土教
 伝統宗学の現代的理解
 峰島 旭雄
 安居 香山

新興宗教の研究
 シンポジウム
 浄土開宗年時の問題
 浄土教に於ける行と信の意味
 西山派における五重相伝について
 村落寺院における化他五重
 法然上人伝に描かれた音楽(その三) 遊女と今様
 専念と専称について
 聖道浄土二門判について
 念仏と題目の根本問題
 念仏の現験について
 信空の白川本房について
 浄土宗における現世利益の系譜
 浄土宗正依の經典現代訳について
 一無名寺院の本尊一件
 浄土宗に於ける現世利益の扱い方
 往生と山離生死

△教化▽寺と檀家の在り方
 問題提起者
 須藤 隆仙
 香川 孝雄
 伊藤 唯真
 北村 謙順

第十一回浄土教学大会

会 期 昭和四十年十一月六・七日
 会 場 京都・仏教大学

一般研究発表(第、部会)
 法然上人の阿弥陀仏觀(その二)
 別時念仏について
 高橋 弘次
 阿川 文正

近世浄土宗における主体性の理念の展開についての
 一考察
 ただ「現在其前」の浄土あるのみ
 念仏実修に当り行の觀念を打破して乘彼願力の信念
 の上に「称の業たれ
 神学と宗学(二)
 浄土教と人間関係
 新発見の法然伝記史料
 — 東寺藏「天台法華学生式問答」 —
 浄土宗に於ける行と信の意味
 西山派における五重相伝について
 村落寺院における化他五重
 法然上人伝に描かれた音楽(その三) 遊女と今様
 専念と専称について
 聖道浄土二門判について
 念仏と題目の根本問題
 念仏の現験について
 信空の白川本房について
 浄土宗における現世利益の系譜
 浄土宗正依の經典現代訳について
 一無名寺院の本尊一件
 浄土宗に於ける現世利益の扱い方
 往生と山離生死

河波 昌
 福富 海岳

佐々木堯海
 峰島 旭雄
 西川 知雄
 鈴木 成元

井川 定慶

藤原 了然
 深貝 慈孝

明山 安雄
 榊 泰純

三枝樹隆善
 丸山 博正

千賀 真順
 大谷 旭雄

三田 全信
 大橋 俊雄

古瀬 靈隆
 平 祐史

岸 覚勇
 戸松 啓真

法然教学構成の根拠
 法然上人の五正行観
 念仏の完結と未完結 — 傍正論の理解 —
 廃助傍の三義について
 宗教における危機の所在

一般研究発表(第二部会)

日本上代における宗教と政治
 聞名思想について

諸訳無量寿経の願文を中心として

無量寿経に於ける七宝の取扱

七仏通誠偈の倫理的立場と無量寿経の交流

無量寿経連義述文賛について

一、二、三の特徴とその意義 —

無量寿経諸訳と十住毘婆沙論との交渉に於ける諸問

題(一) 五十三仏対照の成果から

無量寿経と戒思想

所謂五悪段について

如法経について

芸州瀬戸田法然寺の由来について

中世別所の諸類型

廬山慧遠と曇鸞との思想関係

日本人の梵字表現法

南海寄帰内法伝に見られる「医学」について

僧伽藍摩考

高橋 松海

藤堂 恭俊

松崎 可定

香月 乗光

竹中 信常

梶村 昇

沢田 謙照

岩城 成忍

伏見 誓寛

賀幡 亮俊

梅辻 昭音

真野 竜海

春日井 真也

伊藤 真徹

別府 信空

鴨谷 円我

金子 真補

斎藤 彦松

杉田 暉道

網干 善教

宗教の現代化 — その三 —

宗教集団の類型(一)

タイ仏教の現状調査

教義の伝承的理解について

節分と鬼

道禪禅師と教判説

仏教集団の構造的類型

予言と革命

彦琮の梵語仏典の重視について

白居易の浄土宗

日本に於ける悲華経の流伝とその意義

徹定上人と古文化財 — 浙西七十五年に因みて —

三聚淨戒について

特別研究発表

— 教学院研究所研究成果報告 —

法然上人伝の成立史的研究

伝統宗学の現代的理解

大乘仏教思想の研究 — 華嚴経如来性起品について —

選択集の総合的研究

大乘の帰結としての浄土教 — 無量寿経序説 —

新興教団の構造論的研究

変革期に於ける浄土宗教団とその教育

現代宗教思潮の世界史的研究

善導教学の基礎的構造

藤井 正雄

芹川 博通

藤吉 慈海

宅見 春雄

中村 康隆

広川 堯敏

石橋 真誠

安居 香山

佐藤 心岳

柴田 哲彦

成田 貞寛

牧田 諦亮

宮林 昭彦

伊藤 唯真

金子 真補

香川 孝雄

土屋 光道

近藤 徹称

藤井 正雄

石井 俊恭

田丸 徳善

服部 英淳

五重相伝の研究

シンポジウム

往生浄土の現代的理解

坪井 俊映

一行三昧と結婦、行三昧

服部 英淳

法然上人の上品往生観

大谷 旭雄

一紙小消息について

阿川 文正

浄土教に於ける忍の考察

山本 法純

一 仏身仏土論上における仮思想について

鈴木 成元

徳川家康の浄土信仰

戸松 啓真

念仏と現世利益

藤堂 恭俊

明治期における宗門人の出版について

伊藤 真徹

三善為康の浄土教信仰について

竹中 信常

浄土教における人間疎外

千賀 真順

「往生浄土」の理解について

宇高 良哲

一 特に來迎思想と関連して

金子 真補

観智国師存底門下に於ける正智廓山の地位

松崎 可定

曇鸞大師の名号観

早坂 博顕

仏教の靈魂観について

中村 康隆

横川首楞嚴院二十五三昧会について

藤井 正雄

一 信仰の形態と特色

明山 安雄

一 近江安土浄嚴院本末に見る

成田 貞寛

法然上人の学問観について

一田 洋寿

宗義組織について

南無阿弥陀仏

法然上人伝に於ける説戒の史実について

鎌倉時代に於ける仏教史典籍について

浄土教の人間観

善導大師の著作年次

一 試論

社会構造と産業化について

法然上人の浄土観

香月 乗光

第十二回浄土教学大会

会期 昭和四十一年十一月十一・十二日

会場 東京・三康文化研究所

一般研究発表(第一部会)

一念多念について

後藤 尚孝

法然教学の能動的主体性

高橋 松海

一 教学のベルグソンの把握について

伊藤 唯真

本宗地方教団の近代化

大橋 俊雄

一 近江安土浄嚴院本末に見る

小沢 勇實

法然上人の学問観について

福富 海岳

宗義組織について

三山 全信

南無阿弥陀仏

近藤 徹称

法然上人伝に於ける説戒の史実について

香月 乗光

浄土教の人間観

法然上人の浄土観

一 試論

香月 乗光

法然上人の浄土観

香月 乗光

—特にA・G・I・L理論を中心に—

因縁心釈論開決記の著者について

聞名について

隋代における『勝鬘經』流布の実情

摩訶僧祇律にみられる医学

善導の念・観両宗説について

仏教より見たる「期待される人間像」

緯書と神話伝説

教義理解の伝承と発展

共同課題研究発表

△浄土宗義を宗教教育において、いかに生かしているか▽

加藤 信孝

大南 竜昇

沢田 謙照

佐藤 心岳

杉田 暉道

三枝樹隆善

香川 孝雄

安居 香山

宅見 春雄

高橋 弘次

土屋 光道

戸松 啓真

第十三回浄土教学大会

会 期 昭和四十二年十一月十一・十二日

会 場 京都・仏教大学

一般研究発表(第一部会)

東大寺上人と法然上人

法然浄土教における啓示

知恩院と新知恩院の関係

周誉珠琳の五重伝法について

新知恩院所蔵の禁制について

常福寺蓮勝上人の伝記について

厭離穢土 欲求浄土

浄土宗寺院の前生について

念仏現益の論理

三河大樹寺の寺内法度について

立石寺夜行念仏と阿弥陀仏信仰

『往生捨因』における二、三の問題

—源信・珍海とに関連して—

野守鏡に於ける念仏門の批判

五重伝法の組織について

法然教学の能動的主体性 其二

鴨谷 円我

坪井 俊映

宇高 良哲

佐々木洋之

田中 祥雄

柴山 哲彦

梶村 玄昇

平 祐史

松崎 可定

水口 正俊

榊 泰純

発表者

芝 学 園 榊 随純

大乗淑徳学園 山田 弁信

東山学園 牧 達雄

東海女子高校 大田 敬光

鎮西高校 平野 誓寛

司 会 佐藤 良智

問題提起者

塩入 良道

田中 文盛

佐藤 隆賢

シンポジウム

宗学の現代的問題点

— 教学の「佗び理念」的把握に就いて—
名体不離のご名号について

宗学と神学 (三)

浄土宗と現代人

『迷扶集』第七章段について

十六門記その他の製作年時の確認方法について

念仏の習俗化と個性化

私の阿弥陀仏観

『愚管抄』の法然上人観

安土宗論の周辺について

授手印の宗義行相に関する諸派の異説

浄土宗伝法の時宗に及ぼした影響について

浄土宗義における持戒の意義

一般研究発表 (第二部会)

浄影慧遠の観無量寿経疏の一考察

勝鬘経における如来蔵思想

佐渡における日蓮

徹定上人の遺稿について

無量寿経諸本の本願について

三十六願経に於ける本願の特相

無量寿経願文における二三の問題

懐感の伝記について

概旭乗の生涯

戒体について

談義本の一方法をめぐる二、三の問題

— 思想的試論 —

— 思想史的試論 —

特別研究発表

— 思想史的試論 —

— 思想史的試論 —

— 思想史的試論 —

池見 澄隆

沢田 謙照

藤本 浄彦

河波 昌

成田 貞寛

宮林 昭彦

佐藤 心岳

成田 俊治

宅見 春雄

伊藤 真徹

小沢 勇賢

三枝樹隆善

佐藤 良純

村下 順学

三輪 晴雄

山本 啓量

竹本 寿光

安居 香山

高橋 弘次

清水 澄

法然上人の思想史的研究について

法然上人の往生思想の展開

浄土教教理の現代的反省における一、二の問題

浄土宗伝法史の研究序説―授手印伝承本について―

明治浄土宗に於ける教学と教団

近代化過程に於ける研究

浄土宗発展の基礎的研究(一)

―伊香立新知恩院を中心に―

シンポジウム

浄土宗義を学校教育にいかにかに生かすか

問題提起者

上宮学園

東海学園

家政学園

華頂学園

東山学園

大島 祥仙
滝 俊立
石橋 真誠
竹本 寿光
牧 達雄

第十四回浄土教学大会

期日 昭和四十三年十一月十六・十七日

会場 東京・大正大学

特別研究発表

浄土宗伝法史の研究

教団史論からみたおてつき運動の考察

―新旧教団の比較を通して―

柴田 哲彦

芹川 博通

浄土宗発展の基礎的研究(2)

―特に三河浄土宗寺院の調査を中心として―

法然上人の往生思想の展開

浄土教の倫理観

我国における念仏儀礼の研究

自力と他力

浄土宗典の既刊本に関する調査とその目録の作製

一般研究発表

法然上人の人間観

兼好と浄土教

懐感について

安土宗論の周辺 ―特に聖普貞安の活躍について―

大樹寺開山勢普愚底について

浄土布教法の根底としての法然上人の信仰について

神阿隆音の行業とその思想

凡夫の菩薩行と法性生身

法然教学の能動的主体性

―教学の人間の把握について 其の三―

念仏の宗教的象徴としての意味

法然上人の仏身論 其の二

了恵の看病御用心と臨終講式について

開宗ご文と一枚起請文

専修念仏衆と神祇信仰

往生捨因における一心称念について

宇高 良哲

大谷 旭雄

沢田 謙照

成田 俊治

峰島 旭雄

藤堂 恭俊

大北 裕生

丸山 博正

金子 寛哉

工藤 観真

佐々木洋之

金子 真補

大橋 俊雄

服部 英淳

高橋 松海

伊藤 正穩

高橋 弘次

三田 全信

福富 海岳

伊藤 唯真

明山 安雄

法然上人の往生要集の成立について

法然上人の浄土五祖相承説の成立について

シナ仏教に於ける仮思想と無生法忍

—特に浄土経典における認識論について—

看病用心について

高野山法然廟の紀年銘の発見報告

四十八卷伝の複写について

信仰の特質としての個別性と関与性

無明と真如との領域関係非確定性の構造

—Nan kōshō—

古代僧官考

Kanalsia の二譚説

南北朝期の奥州における寺社の位置

伊豆における口蓮の生活について

徳本の布教、銚子浄国寺教化をめぐって

Arya vinukhisena 所引の般若経

三心の心理構造

生と死の境

禅僧鈴木正三について

宗教と芸術に因する随想

経典と註釈書

建礼門院と妙音菩薩

—長門本平家物語卷二十を中心として—

法然上人とマルチン・ルター —人間観について—

坪井 俊映

香月 乗光

山本 法純

伊藤 真徹

小川 竜彦

井川 定慶

藤本 浄彦

武山 耕道

中井 真孝

大南 竜昇

渡辺 清

荻須 真教

田中 祥雄

真野 竜海

竹中 信常

中村 康隆

杉田 暉道

峯崎 成孝

佐藤 良純

榊 泰純

清水 澄

清浄道論にみられるヨーガについて

無生の生と見生無生について

浄影寺慧遠の観經の序文について

中国における維摩經の流布について

無名寺院の中興開創期における師檀関係について

浄土教における危機の意識

宝生論における仏身論

初期仏教教義よりの発展とその理解

古経題跋について

観門要義鈔について

浄土教における死の取扱について

口称念仏の秘鍵

シンポジウム

幼児の宗教教育について

平 祐輝

松崎 可定

三枝樹隆善

佐藤 心岳

平 祐史

香川 孝雄

水谷 幸正

宅見 春雄

牧田 諱亮

広川 堯敏

愛宕 颯呂

静永 湛澄

問題提起者

福井 豊信

渡辺 真澄

形部 英一

可会 佐藤 介正

真野 竜海

第十五回浄土宗教学大会

期日 昭和四十四年十月十一・十二日

会場 京都・仏教大学

特別研究発表

浄土教者の宗教体験の研究序説

藤吉 慈海

初期浄土宗伝法に於ける花押と手印

三田 全信

自力と他力(統)——現象学的解釈学的アプローチ——

峰島 旭雄

醍醐本法然上人伝記成立考

梶村 昇

善導大師の倫理観

深貝 慈孝

中世末期にみられる寺院経済機関について

佐々木洋之

善導大師の『観経疏』の訳注

三枝樹隆淳

近世初期における知恩院と増上寺

宇高 良哲

念仏三昧室王論における念仏観の特色

小沢 憲珠

福山行誠と渡辺魏山——観音像の造立を中心として——

大橋 俊雄

遊蓮房門照について

伊藤 唯真

日蓮の法難——小松原法難について——

荻須 真教

——特に法然上人との関係を繞って——

牧 達雄

寺封の成立について

中井 真孝

近世から近代にかけての浄土宗教化活動の様相

藤井 正雄

浄土教における宗教的主体性の問題(一)

花木 泰堅

——三河地方念仏講の実態調査とその研究——

服部 英淳

所謂非神話化について

藤本 浄彦

“おてつき運動”と教団再編成の問題点

竹中 信常

黙阿弥劇に見えたる浄土、日蓮信仰と民間信仰

愛宕 顕昌

一般研究発表

金子 真補

慈悲思想の具現化について

吉水 琢磨

往生想と引接想の念仏

山本 啓量

『観経疏教相鈔』における定散料簡について

北崎 耕堂

浄土教の心理型

金子 寛哉

十往生阿弥陀仏国経の一考察

広川 堯敏

仏教認識論上の思惟と正受

久下 陞

往生捨因を中心として往生要集・決定往生集の比較研究

大南 竜昇

実相身、為物身について

坪井 俊映

二十五菩薩来迎思想について

明山 安雄

——華胎と似無漏の浄土を中心として——

高橋 松海

——十往生経説の日本の展開——

佐藤 成順

往生要集における同行善知識の思想

静永 湛澄

良遍の念仏思想

安孫子虔悦

法然浄土教の研究——特に懺悔について——

福富 海岳

宗学の規範的根拠について

高橋 弘次

再び法然上人の他の法門を論ず

西山 円我

法然上人の出家と通世

平 祐史

口称念仏の秘鍵

井川 定慶

初期念仏教団の形成と美術

成田 俊治

ご本願の弥陀名号について

醍醐 海岳

『長門本平家物語』の法然上人像

榊 泰純

俊乘房重源の東大寺再建について

醍醐 海岳

当麻奥院本尊の遷移について

井川 定慶

『長門本平家物語』の法然上人像

榊 泰純

忍許澄浄と指方立相(信と観)

増上寺文書の疑問

摩訶薩について

初期大乘仏教の修道体系について

行誠の晩年の健康について

念仏と「忌」に関する二、三の問題

南北朝に於ける菩薩戒伝持

唐代における「維摩経」の研究講説

五戒、十戒経について

勘文と緯書

仏教における人間観

お盆の墓参りと魂迎え

—民間儀礼の構造論的理解—

成道の問題について

シンポジウム

現代における教化の問題点

松崎 可定

玉山 成元

真野 竜海

平 祐輝

田中 祥雄

池見 澄隆

三輪 晴雄

佐藤 心岳

宮林 昭彦

安居 香山

成田 貞寛

中村 康隆

宅見 春雄

香月 乗光

戸松 啓真

上野 馨雄

後藤 真雄

宅見 春雄

特別研究発表

道の基礎的研究序説(1) —道の語について—

浄土教における如来蔵思想

寿経と観経との認識論的関連

浄土教者の宗教体験

慈恩大師の浄土観

善導大師の『観経疏』の訳注(その二)

往生記の総合的研究序説

九卷伝と四十八卷伝

慈木尼の信仰と教化活動

一般研究発表

三昧発得

絶対的念仏

名号について —特に万徳所帰について—

宗学と神学(4) —状況倫理と浄土教倫理—

浄土教における宗教的主体性の問題(1)

—「選択」の概念をめぐって—

法然浄土教における善導教学の受容について

—特に諸行本願義の批判に關連して—

往生の三身観 —四師往生観の一理解—

法然教学の主体性 其九 —法然教学の義勢論—

宗学研究資料、三題

宗学研究の基本的な一側面について

—特に經典観を中心として—

真野 竜海

水谷 幸正

山本 啓豊

河波 昌

大南 竜昇

三枝樹隆善

柴田 折彦

三田 全信

牧 達雄

竹中 信常

藤吉 慈海

高橋 弘次

峠島 旭雄

藤本 浄彦

坪井 俊映

松崎 可定

高橋 松海

福富 海岳

吉水 光慈

第十六回浄土宗教学大会

期日 昭和四十五年十一月二十二・二十三日

会場 東京・大正大学

司会

宅見 春雄

問題提起者

香月 乗光

五種正行の系列について	小沢 勇慈	中世末期における本末争いについて	佐々木洋之
往生浄土論註の末書について	藤堂 恭俊	増上寺所蔵『蝦夷善光寺御寄附金勘定帳』について	田中 祥雄
『群疑論』及び『安樂集』に引用される『法句経』について	金子 寛哉	日蓮の浄土教批判についての一考察	萩須 真教
曇鸞大師の御伝記を拜してその浄土帰入と布教教化を偲ぶ	金子 真補	脱先祖化と無縁仏	藤井 正雄
聖光上人の選択集観	江島 俊雄	「おてつき」運動と信行奉仕団	芹川 博通
法然門下禪寂と月講式	三田 全信	三心積の実践概念について	北崎 耕堂
『二言芳談』の性格	丸山 博正	宗教随想	峰崎 成孝
名越派の五重相伝について	嵐 瑞激	発心集に描かれた念仏	柳 泰純
浄土教の起源推定の問題点	春日井真也	中国仏教における戒壇について	宮林 昭彦
中央アジアの浄土教と法然浄土教	賀幡 亮俊	異部派教義について	宅見 春雄
インド、パキスタンの旅より	近藤 徹称	中国における『涅槃経』の研究講説	佐藤 心岳
—浄土教との連関において—	神谷 正義	恵心僧都の浄土教に關して	市村 智幸
仏性論について(一)	田中 典彦	証空教学における正因正行について	広川 堯敏
—特に心性本淨説と如来藏思想について—	小沢 憲珠	一枚起請文の七十種の写本について	小川 竜彦
初期仏教における無我の考察 (一)	杉田 暉道	観經所説の三福について	香月 乘光
—特にその立場について—	中井 真孝	選択集の末法観	山田 正進
大乘莊嚴經論における国土清淨思想	成山 俊治	悪人往生と不淨人往生	池見 澄隆
仏教における身体観	井川 定慶	珍海の名号観	明山 安雄
新羅浄土信仰について	宇高 良哲	三昧発得記について	戸松 啓真
滅罪と往生 —六往生伝を中心に—		安土問答の経緯	伊藤 真徹
貝塚本願寺と富田頼雄		西山派の正定業について	野々川 宏
檀林法度の研究		聖光の通別念仏説について	後藤 尚孝
		良遍の三心観	安孫子虔悦
		法然浄土教成立の基盤	大北 祐生

東大寺十問答について

三昧について

法然上人の諸行往生について

念仏思想の伝播について — 法然上人と平家物語 —

山・院・寺号よりみたる本宗寺院の前身

近江浄土宗教団の形成

口伝相伝について愚見

シンポジウム

「五重相伝」をテーマとして、藤井実広、坪井俊映、小沢勇賢の三氏よりそれぞれ問題提起がなされ、藤吉慈海氏の司会で二時間にわたり熱心な討議が続けられた。

第十七回浄土宗教学大会

期 日 昭和四十六年十一月二十・二十一日

会 場 京都・仏教大学

特別研究発表

浄土教における救済概念の種々相

道の基礎的研究

浄土宗伝法史の研究 — 往生記の総合的研究 —

法然上人の浄土開宗と教団の形成

鹿ヶ谷法然院文書の研究

中世思想史における浄土教と倫理

近世浄土宗寺院に関する基礎的研究

宗派意識に関する調査研究

阿川 文正

平 祐輝

関野 良繼

魚尾 晃久

平 祐史

伊藤 唯貞

小松 説愨

一般研究発表

組織と主体性

道綽禪師の浄土観

聖光上人の教学的立場

十念についての諸問題

法然における罪業の自覚

論註に於ける曇鸞の特異点

法然上人浄土開宗の年時に就いて

浄影寺慧遠の弥陀本願観

法然の思想的背景についての一考察

「開宗と文」の読み方

浄土三脈の念々不捨釈

浄土開宗の文に関する正義と異義

法然上人の現代的理解について

鎮西教学についての一考察

『決定往生集』第五修因決定章について

善導大師の起行について

善導大師における戒と懺悔

徳本上人近江撰化に関する新資料

法然教学の主体性 其十

— 教義の義勢論 其三 —

応身仏について

法然浄土教の基本的立場

— 特に現代の法然教学に対する批判について —

山田 正道

佐藤 健

後藤 尚孝

愛宕 顕昌

大北 裕生

金子 真補

津村 諦堂

深貝 慈孝

高橋 弘次

福富 海岳

岸 覚勇

服部 英淳

清水 澄

江島 俊雄

明山 安雄

小林 尚英

三枝樹隆善

柴田 鳳慧

高橋 松海

松崎 可定

坪井 俊映

聞名と称名

法然上人における随順本願と偏依善導

大集経における法滅記事について

Garbha について

仏教の原理としての縁起の思想

中論の縁起思想についての考察

大品般若経の三昧について

初期仏教に於ける無我の考察

—特に認識の問題をめぐって—

浄土の存在性について

大悲闡提思想について

異部派教義考

般舟三昧経諸本の成立について

ビルマにおけるパーリ語大蔵経の編纂

安楽集玄譚について

朝鮮浄土教における無量寿経諸本の受容

日本浄土教における無量寿経諸本の受容

明治・大正期における無量寿経受容の問題

寿経と観経の認識論的関連 (2)

マウルヤ王朝治下における仏教の変容

チベット文学研究 (一)

合讚における三十六願経

チベット人の浄土教受容

神学と現象学 — 宗学と神学(5) —

竹中 信常

香月 乗光

谷上 昌賢

神谷 正義

大成 善雄

真田 康道

平 祐輝

田中 典彦

沢田 謙照

成田 貞寛

宅見 春雄

本部 円静

佐藤 良純

藤堂 恭俊

賀幡 亮俊

伏見 誓寛

近藤 徹称

山本 啓量

春日井真也

金子 英一

梅辻 昭音

香川 孝雄

峰島 旭雄

浄土教美術について

末法思想と縁書

勅修御伝を拝読して

奈良時代の教化僧

能分改格について

仁和寺濟暹律師について—特に歿年を中心として—

法然上人の和歌 — 似雲の周辺 —

阿弥陀仏像論

沖繩と仏教

「はからい」と「あるがまま」について

開宗の史的接点

温室経疏と医学

宗教関係大学と宗教教育

織田信長と浄土宗

否定命題と仏教文学(法然法語の一側面)

文雄の教学史上における位置

妙行心要集について

隋唐時代における「法華経」の研究講説

普寂の華嚴思想

白旗寂恵本『末代念仏授手印』について

法然院の草創について

同和地区寺院の成立と構造

— 丹波西誓寺文書による —

浄土宗と疑経—布経の新展開

藤吉 慈海

安居 香山

稲垣 良徹

中井 真孝

野田 秀雄

金子 寛哉

神 泰純

竹本 寿光

藤井 正雄

小野 泰博

三山 全信

杉田 暉道

芹川 博通

井川 定慶

石田 肇

伊藤 文昭

福原 隆善

佐藤 心岳

石橋 真誠

大橋 俊雄

宇高 良哲

嵐 瑞徹

牧田 諦亮

法然上人の御臨終について

未定

シンポジウム

情報化時代における教化の在り方

戸松 啓真

中村 康隆

五重伝法における「機」

阿弥陀仏と観音菩薩 —チベット文学研究(2)—

浄土教の報恩思想について

発願文の読み方について

念仏と戒 —浄土教の倫理性を中心として—

法然上人と南部諸師

法然浄土教の三心釈についての考察

浄土宗と存覚

「順彼仏願故」について

三祖の撰機本願説について

法然上人の機と行について

諸行本願義について

宗義の新しい表現について

浄土宗義の理解について

—「彼此三業業不相捨離」をめぐる—

浄土宗義の理解について —阿弥陀仏論—

浄土宗義の理解について —念仏論を中心に—

浄土宗義の理解について

—とくに浄仏国土思想と往生について—

浄土宗義の表現について —安心を中心として—

法然上人の思想的位置づけと価値

—浄土宗の教えと現代思想—

如来蔵思想研究序説

三心釈の実践概念について

柴田 哲彦

金子 英一

大南 竜昇

三枝樹隆善

高橋 弘次

成田 貞寛

坪井 俊映

三田 全信

福富 海岳

小沢 勇貫

服部 英淳

後藤 尚孝

藤吉 慈海

藤本 浄彦

小林 尚英

福原 隆善

真田 康道

広川 堯敏

河波 昌

藤堂 俊英

北崎 耕堂

第十八回浄土宗教学大会

期日 昭和四十七年十一月十八日・十九日

会場 東京・大正大学

特別研究発表

維新时期浄土宗の基礎的研究

古典文芸に描かれた法然上人像

開宗以前における法然上人

徳本上人の教化について

浄土教における如来蔵思想

近世浄土宗寺院の基礎的研究

—特に京都十九ヶ寺について—

宗派意識に関する調査研究(一)

鹿ヶ谷法然院文書について

一般研究発表

法然上人の戒観史考

三田 全信

玉山 成元

芹川 博通

中井 信孝

香川 孝雄

戸松 啓真

藤堂 恭俊

神 泰純

野田 秀雄

北崎 耕堂

藤堂 俊英

河波 昌

廣川 堯敏

真田 康道

福原 隆善

小林 尚英

藤本 浄彦

後藤 尚孝

藤吉 慈海

服部 英淳

小沢 勇貫

福富 海岳

三田 全信

坪井 俊映

成田 貞寛

高橋 弘次

三枝樹隆善

大南 竜昇

金子 英一

柴田 哲彦

撰大乘論無性釈について

宗学と神学(6) — その諸問題 —

法然上人の還相回向

kamma-vāda と viriya-vāda

自然・虚無之身について

三昧発得記の研究 — 醍醐・報恩院本を中心として —

法然上人に於ける三部経の選定過程について

三転十二行相について

紫柏真可の生涯

異部教義の問題

証空教学における開会について

権社と実社

法然教学における選取と選捨

善導大師における一行三昧について

法然上人の選択の意義

中国における『大智度論』の研究講説

義灯律師の甘露苑について

珍海の『安養知足相对抄』について

捨閉闍提の文に關して

怨靈について

近世中期商人の信仰

— 特に河内屋可正日記を中心として —

増上寺文書の研究

「若き日の法然」顯彰

杉田 正善

峰島 旭雄

土屋 光道

田中 典彦

金子 真補

嵐 瑞澄

大谷 旭雄

真野 竜海

牧田 諦亮

宅見 春雄

堀 隆広

池見 澄隆

丸山 博正

深貝 慈孝

津村 諦堂

佐藤 心岳

伊藤 真徹

明山 安雄

伊藤 正穂

鷺見 定信

田中 祥雄

宇高 良哲

長沢 普天

室町時代における浄土教信仰

— 公卿の日記を中心として —

鎌倉時代における浄土教画について

教化と福祉

当麻曼陀羅下縁九品段の絵相について

岩手の念仏劍舞の研究

浄土教における女人往生説の系譜

江戸時代に於ける専修念仏と現世祈禱

創唱的宗教と民族的宗教との接点について

道綽禅師における懺悔について

北涼曇讖の授戒について

Adisesu の Paramārthasāra について

信仰と随想

南海寄帰内法伝と医学

末法入年仏教伝来説について

法然上人の思惟に於ける特質について

法然教学の主体性 其十四

シンポジウム

開宗八百年を如何に生かすか

西田 円我

成田 俊治

秦 隆真

塩竈 義弘

吉田 光覚

大橋 俊雄

井川 定慶

中村 康隆

佐藤 健

三輪 晴雄

武山 耕道

峰崎 成孝

杉山 暉道

若林 隆光

松崎 可定

高橋 松海

問題提起者

吉水 智承

深谷 常玄

宮林 昭彦

石上 善応

司 会

第十九回浄土宗教学大会

期日 昭和四十八年十一月三・四日

会場 京都・知恩院和順会館

特別研究発表

各宗より見た法然上人

一般研究発表

西山浄土宗	福井忍隆氏	法然門下の選択集観	広川 堯敏
真宗	石田充之氏	謡曲詩材上に於ける法然上人の一考察	吉水 琢磨
日蓮宗	紀野一義氏	法然における念仏三昧の問題	服部 正穂
天台宗	福井康順氏	法然上人の機根論に就て	津村 諦堂
		法然上人と小教盛	榊 泰純
		法然上人の思惟の特性(その二)	松崎 可定
		—その近代性について—	戸松 啓真
		黒谷沙門源空と円頓戒	藤吉 慈海
		法然上人における禪について	服部 英淳
		往相と還相	佐藤 健
		安樂集と五念門	谷上 昌賢
		末法について	平 祐輝
		円頓戒について	三輪 晴雄
		唐護法沙門法琳について	宇高 良哲
		徳川幕府創業期の宗教統制	石橋 真誠
		—特に中央集権体制の確立過程について—	藤井 正雄
		華嚴と念仏 —定仙の華嚴通関について—	上原 光道
		教団改革をめぐる問題	中村 康隆
		未定	片川 博通
		仏名会の消失 —儀礼の反俗化と卑俗化—	西川 円我
		おてつき運動の課題 —47・48年調査結果—	中井 真孝
		中世末期師檀關係の固定化をめぐるって	柴田 哲彦
		貞安上人について	
		近世浄土宗伝法史における二の問題	
長谷川匡俊	金子 真補	長谷川匡俊	
玉川 成元	稲垣 良徹	長谷川匡俊	
長沢 普大	福原 隆善	長谷川匡俊	
法然上人と南都		法然上人と南都	

維新期の浄土宗(1) — 名譽学天の晩年について —

今昔物語集における夢について

敦煌本提謂経の歴史

当麻曼荼羅考 — 敬首の宝船釈について —

霊場番外の遺跡の研究 — 嵯峨清涼寺について —

嘉禄法難以後専修念仏の地方社会への浸透

明治初年の知恩院

「指方立相」の宗教学的意味

シンポジウム

開宗八百一年後の宗門教化の方策

野田 秀雄

鷺見 定信

牧山 諦亮

塩竈 義弘

三田 全信

嵐 瑞徽

井川 定慶

竹中 信常

共通テーマ「懺悔論」

一般研究発表

anusaya の訳語問題

入阿毘達磨論におけるチベット訳と漢訳の相違点

古代チベットにおけるチベット人の著作活動について

瑜伽論の戒波羅蜜について

大集経の成立問題

法華経論における仏身について

無性の心意識説について

慈悲について

六朝時代における涅槃経の研究講説

— とくに健康を中心として —

俱舍論業品研究ノート

ケサル物語 — カチエ章について —

Adisesa の Paramārthasāra について(3)

竜樹における三時の論証

如来蔵経論にみられる光明について

一切衆生有如来蔵の論証

法然上人の中阿仏教観

大品般若経の研究 — 特に異訳諸本に関する疑問 —

司 会 戸松 啓真

真野 竜海

坪井 俊映

藤堂 恭俊

西村 実則

中村 隆敏

小野田俊蔵

富田 生久

谷上 昌賢

林 善信

杉田 正善

庄子 仙城

佐藤 心岳

松濤 泰雄

金子 英一

武田 耕道

原 裕

神谷 正義

藤堂 俊英

牧田 諦亮

森山 清徹

第二十回浄土宗教学大会

期 日 昭和四十九年十一月十六・十七日

会 場 東京・増上寺

指導講演

韓国浄土教と仏教の現状

特別研究発表

共通テーマ「懺悔論」

恵谷 隆成

土屋 光道

中川 大倫

口中礼讚無常偈の素材	香川 孝雄	起行の本質に触れる「と」と「を」について	小橋 麟瑞
中論第二十四章諸註釈の研究	真田 康道	無懺称名について	高橋 弘次
梁沈約の「弥陀仏銘」「釈迦文仏像銘」について	三輪 晴雄	当麻曼荼羅考 — 中台三十七尊について —	塩竈 義弘
般舟三昧経の唯心思想について	本部 円静	浄土宗文献センターの資料蒐集について	堀 隆広
異類の助業について	広川 堯敏	三浦地方における十夜法要	鷲見 定信
還相廻向と二人の歴史家	袖山 栄真	三浦地方の念仏講	芹川 博通
韓国の浄土教について	愛宕 顕昌	百万遍念仏の研究	吉田 光寛
法然上人の他方について	津村 諦堂	キリスト教の成立とインド思想	大成 善雄
法然上人と往生礼讚	明山 安雄	『西方指南抄』原資料考	三田 全信
法然七人の「選択」思想	藤本 浄彦	徳川家康の増上寺諸堂宇造営年時考	宇高 良哲
浄土教の認識論的考察	山本 啓量	大本山増上寺名称について	村上 博了
浄土布薩戒	井川 定慶	悔過の姿容	中村 康隆
乗雲の阿弥陀如来像	藤堂 恭俊	法然上人と証真法印	福原 隆善
善導大師の実践論	小林 尚英	一言芳談における八貧について	池見 澄隆
一枚起請文における決定について	佐藤 健	万里小路家と清浄華院	西田 円我
法然上人の観想の問題	服部 正穩	鎮流祖伝にみられる問題点	平 祐輝
法然教学の主体 その十八		鎮流祖伝について	中井 真孝
— 無量寿経の次元(超について) —	高橋 松海	念仏と芸能	長沢 普天
仏教学・宗学・宗乗学について	小林 説愍	京都の寺院	加藤 信孝
法然上人の思惟の特性 その三		沖繩開教と在俗習俗との間	藤井 正雄
— 華嚴的性格について —	松崎 可定	仏教儀礼の二形態	竹中 信常
マスコミの現代と浄土教	堀山 良謙	関東十八檀林の制定について	嵐 瑞徴
法然上人と観経疏	三枝樹隆善	一村落寺院の開創伝承について	平 祐史
晩年の法然上人	藤吉 慈海	維新後の浄土宗 ②	

—山口講学場と触頭の交代について—
シンポジウム

教化の体験と方法

野田 秀雄

問題提起者

野村 盛之

高橋 真了

佐藤 治子

金田 進徳

司 会 宮林 昭彦

第二十一回浄土宗教学大会

期 日 昭和五十年十一月八・九日

会 場 京都・仏教大学

特別講演

米迎図の展開(スライド使用)

京都国立博物館普及室長 金沢 弘氏

善導大師をめぐる問題

華頂短期大学長・仏教大学教授 塚本善隆氏

一般研究発表

第一部会

順漸考

安楽集に引用する『法句経』について

浄土教的宗教体験の特質について

永観律師の宗教体験について

唐代浄土教書における兜率西方対比について

長沢 普天

佐藤 健

藤本 浄彦

福原 隆善

小沢 勇慈

法然浄土教における「機」について
布施戒について

決定往生と現在の終末論

浄土教美術とは何か

『教相十八通』における観仏と念仏

『往生論註』に引用された『大智度論』の譬喩

法然上人著作の引用文について

—善導大師を中心として—

善導大師の懺悔について

「法然上人の思惟の特性」その四 —通別と主伴—

法然教学の主体性 其十九

無量寿経の次元 其五

次元確立の二十七願文について

法然上人の現証浄土について

曇鸞大師の回向論

法然上人の他力について

浄土教的宗教体験と世界観

法然上人における「試」について

三部経大意における至誠心積について

第二部会

文雄の研究(1)

—文雄の首領学上に果した役割について—

沙石集に現われたる浄土教思潮

阿弥陀経における福祉思想

後藤 尚孝

柴田 哲彦

峰島 旭雄

藤吉 慈海

服部 淳一

斎藤 晃道

小林 尚英

稲岡 了順

松崎 可定

高橋 松海

服部 正穂

金子 真補

津村 諦堂

河波 昌

大谷 旭雄

坪井 俊映

伊藤 文昭

塩竈 義一

北崎 耕堂

念仏と和歌

時岡の遺言をめぐって

当麻曼陀羅考

—逆蓮華の形と意味について—

マルクス主義と浄土教

浄土宗における道光の位置

開眼と洒水

広律伝訳以前の戒律と一考察

勅修法然上人伝の「年」と「季」について

不浄観と忌

福田行誠の同徳論について

初期増上寺領の一考察

維新期の浄土宗 ③ —報恩寺小清規について—

後奈良天皇の浄土信仰

中国における『般若経』の研究講説

聖覚の法然治病譚について

知恩院宮門跡の設置について

往生記の史的見解

二祖曼陀羅について

第三部会

般若経における「三昧」について

般若経と阿闍仏信仰

『大宝積経論』に於ける一、二の問題
般若経の縁起説

神 泰純

平 祐史

塩徹 義弘

大成 善雄

玉山 成元

中村 康隆

三輪 晴雄

金子 寛哉

池見 澄隆

山中 祥雄

宇高 良哲

野田 秀雄

中井 真孝

佐藤 心岳

伊藤 唯真

嵐 瑞濃

三田 全信

井川 定慶

森山 清徹

岸 一英

藤堂 俊英

原 裕

『智度論』における般若舟三昧

般若経と三乗の問題

阿含経典よりみたインド社会において

経歴の華嚴思想

道宣の戒学観

「ラリム・タルケン」第十七章について

ツォンカパの二諦説

ケサル物語 — dnyal-gling について—

摩訶止観における菩提心序論

俱舍論における愛(一) — taga について—

『三昧経類』考

俱舍論随眠品研究ノート

仏教後期論理学派における Samānya の問題(一)

Kānakalavāṣa について

四分律考

不彼作性について

転識論の特色

シンボジウム

宗門子弟の育成について

本部 円静

小沢 憲珠

神谷 正義

石橋 真誠

宮林 昭彦

小野田俊蔵

真山 康道

金子 英一

林 善信

西村 実則

大南 竜昇

松満 泰雄

白崎 顯成

武田 耕道

稲垣 良徹

山本 啓暁

成田 貞寛

山口 謙存

井桁 雄弘

野上 幸

阿川 文正

水谷 幸正

司 会

問題提起者

司 会

仏教論叢一覽

第八号 (昭三十五・三・十五)

第五回浄土教学大会

特別研究

相承の意義について —— 二祖三代相承の教えるもの ——

三代宗義に於ける念仏諸行論

近江における浄土宗教団の展開

ハリバドラ小註の研究(1)

—— チベット訳「現観莊嚴(論)」と名づける

般若波羅蜜多(經)要釈 —— の註」和訳

一般研究

法然上人語録の研究

一枚起請文の教学的位位置について

往生の念仏と人格形成の念仏

日課念仏について

元興寺智光の本願観についての一考察

二祖三代教学に対する教権の提唱について

般舟三昧経における念仏

念の一考察

千賀 真順	伊藤 唯真	戸松 啓真	阿川 文正	木村 貫学	松崎 可定	別府 信空	伊藤 真徹	滝 安雄	坪井 俊映	香川 孝雄	石上 善応
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------

阿舎に於ける生天思想の一断面

—— 慈悲あるいは四梵住との関連に於いて ——

唯識所現の浄土

良遍の念仏論序説

嘉祥の浄土教について

仏教史伝の成立に就て

門前町についてその現代的性格

池田光政の宗教政策と民間信仰

一ツ日小僧出現 —— 宗教の粉飾 ——

看病用心抄について

近世に於ける護法運動の展開とその思想

近世浄土教寺院の成立と発展

1 本宗寺成立の諸類型

2 惣堂について —— その発展・機能 ——

3 近江(湖南地域)における本宗教団の発展

4 我々の寺はどうして出来たか

第九号 (昭三十七・三・二十七)

第六、七回浄土教学大会

特別研究

法然上人の御忌について

平野 真完	近藤 徹称	成田 貞寛	藤原 了然	宅見 春雄	吉山 雅男	鳴谷 円我	中村 康隆	鈴木 成元	恵谷 隆戒	成田 俊治	平 祐史	伊藤 唯真	竹田 聰洲	伊藤 真徹
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------

浄土観の系譜

選択集への心理学的アプローチ

智光の浄土教思想研究序説

法然とその教団に対する弾圧運動について

一般研究

法然教学における業

二祖の位置づけ

善光寺における浄土教的性格の確立に関する私見

法然の他力観について

善導教学における苦楽の理解

世親菩薩の報身論

如来蔵思想経論の成立とその相互関係

葬送儀礼と祖先供養

西福寺の成立について

「迷信」の機能とその心理性

「金剛宝戒章真偽弁」について

南都浄土教と光明山寺をめぐる一考察

法然上人の回心と聖道門との関係について

善導十徳

「称名」の原語について

諸行生不論

別所と散所

法然の茶毘に関する疑問

釈尊の偈宝建立の精神

佐藤 賢順

竹中 信常

明山 安雄

成田 俊治

香川 孝雄

鈴木 成元

鷹司 誓玉

松崎 可定

三枝樹隆善

金子 真補

石橋 真誠

鳴谷 円我

佐藤 行信

藤井 正雄

峰島 旭雄

明山 安雄

伊藤 真徹

大橋 俊雄

香川 孝雄

金子 真補

鳴谷 円我

鈴木 成元

成田 貞寛

法然上人の起行に於ける規定と無規定

善導教学における罪悪意識

示観凝然『往生註論義』について

道宣の戒律観の一考察

熊谷蓮生房の浄土信仰

ハリバドラ小註の研究(二)

第十号(昭三十九・十・三十一)

第八回浄土教学大会

念仏三昧の本質と称名

一般研究

浄土宗における神祇信仰の系譜

選択集撰述の理由

法然教学の主体性

法然教学に於ける弁証法的性格

現代思想と念仏信仰の生活

行誠上人の布教について

「極楽浄土九品往生義」における称名思想について

曇鸞大師の往生思想

仏教寺院の地縁類型

Pandhi 讃願 —— ニカーヤ阿舎における ——

佐藤賢順博士の宗教哲学思想

第九回浄土教学大会

一般研究

別府 信空

三枝樹隆善

峰島 旭雄

宮林 昭彦

阿川 文正

真野 竜海

服部 英淳

大橋 俊雄

鈴木 成元

高橋 松海

松崎 可定

峯崎 成孝

渡部 成実

佐藤 成順

金子 真補

藤井 正雄

平野 真完

峰島 旭雄

法然上人の筆蹟などについて

——比較研究の立場から——

浄土教の非神話化批判

阿弥陀仏信仰の起源

——渡辺照宏博士の説への反論——

統法然教学に於ける弁証法的性格

曇鸞大師の浄土観

善導教学における「観」について

法然門下における隆寛の位置

カニシカ王の仏典結集の信憑性

忍激上人の「持戒念仏論」に就て

法然上人伝記の重写について

如法経聖としての法然上人

田辺哲学と浄土教

宗教における制度の機能と近代化

——近代化の概念とアプローチをめぐって——

円台寺趾石塔婆群の研究

称名念仏の現代的意義

——シンポジウムの経過について——

彙報

第十一号(昭四十一・十二・二十七)

第十回浄土教学大会

特別研究

選択集の総合的研究

——選択集の現代化について

——安楽集の引文について——

浄土教の人間観

——選択集の現代語訳とその問題点

『選択集』撰述の理由

浄土信仰の「現代的」理解への序説

(宗学の方法について)

大乘の帰結としての浄土教——無量寿経の研究——

伝統宗学の現代的理解

「宗学の現代的理解」ということ

蓮社念仏研究序説

中国に於ける浄土教受容の特殊性

——特に唐代を中心として——

心性罪福因縁集と永観の密教的名号観

——特に第七念仏項の影響から——

法然上人伝の諸問題

——知恩講私記より見たる法然上人伝の系統

法然上人門下の教理的研究

真野 竜海

真野 竜海

戸松 啓真

峰島 旭雄

石上 善忠

鈴木 成元

田丸 徳善

近藤 徹称

岩城 成忍

賀幡 亮俊

鷹司 誓玉

梅辻 昭音

伏見 誓寛

服部 英淳

戸松 啓真

金子 真補

柴田 哲彦

大谷 旭雄

阿川 文正

——鎮西・西山を中心とした教判論——

法然上人伝の成立史的研究 丸山 博正

一般研究

唯心浄土説について 服部 英淳

無量寿経と法蔵菩薩 福富 海岳

浄土宗における阿弥陀仏号の依用について 大橋 俊雄

法然上人の阿弥陀仏観 ——その一—— 高橋 弘次

特に三身論と二身論説について 高橋 松海

法然教学の主体性 ——その七—— 賀幡 亮俊

浄土教経典解釈学の新しい立場 峰島 旭雄

——義警観徹の解釈学の意味——

宗学と神学(一) アッシューカ王法勅解釈の立場 ——「一切の人は

皆これ朕の子である」の章について—— 春日井真也

寺院と布教団 ——宗教の現代化——二 藤井 正雄

M・ウェーバーの「経済倫理」の概念 芹川 博通

僧伽監摩考 網干 善教

黒田聖人考 三田 全信

浄土開宗の年時問題 井川 定慶

無量寿経に於ける七宝の取扱 岩城 成忍

第十一回浄土教学大会

特別研究

伝統宗学の現代的理解

廬山慧遠と曇鸞との思想関係 金子 真補

白居易と浄土教

永観と法然 柴田 哲彦

法然上人伝の諸問題 ——立教開宗の理解に就て 大谷 旭雄

法然門下の教理史的研究 阿川 文正

往生決定の時期 ——往生についての理解—— 丸山 博正

選択集の総合的研究 戸松 啓真

変革期における浄土宗教団とその教育 土屋 光道

——特に明治維新时期を中心として—— 石井 俊恭

善導教学の基礎的構造 服部 英淳

大乘仏教思想の研究 ——華嚴経如来性起品について 香川 孝雄

新興教団の構造論的研究 安居 香山

既成教団と新興教団の組織構造の比較 竹中 信常

——組織における人間の主体性—— 安居 香山

宗教教団の政治的アプローチの限界 宮林 昭彦

仏教教団の組織と新興教団 藤井 正雄

仏教諸宗派の組織構造の改変 芹川 博通

各教団の構造組織とそれをささえるもの

天理教団の構造の特殊性 山ノ井大治

——特に布教組織について——

一般研究

称名と唱題について 千賀 真順

法然上人の阿弥陀仏観 ——その二——

特に三身論にまつわる問題 高橋 弘次

信空の白川本房について 三田 全信

浄土宗における現世利益の系譜

新発見の法然史料

法然教学の主体性 —— その九 ——

宗学と神学(一)

法然上人伝に描かれた音楽 —— その一 ——

浄土三部経如法経の次第

所謂「五悪段」について

『無量寿経』序説

無量寿経「速義述文賛」について

—— 二、三の特徴とその意義 ——

無量寿経諸訳と十住毘婆沙論との交渉における諸問題

—— 五十三仏対照の成果から ——

七仏通誠偈の倫理的立場と無量寿経との交流

廬山慧遠と曇鸞との思想関係について

南海寄帰内法伝にみられる医学について

組織の再編成 —— 宗教の現代化(一) ——

宗教集団の類型(一)

シンポジウム

往生浄土の現代的理解

—— この問題の意味について ——

第十二号 (昭四十三・三・三十)

第十二回浄土教学大会

特別研究

「浄土宗義を宗教教育にいかにかかしているか」

一般研究

疎外の系譜と浄土教的メカニズム

浄土教に於ける無生法忍について

「往生浄土」の理解について

法然上人伝に於ける「説戒」について

三善為康の浄土教信仰について

南無阿弥陀仏

法然教学の能動的主体性

—— 教学のベルグソンの把握について ——

法然上人の学問観について

観智国師存心門下における正普廓山の地位

日本浄土教史上に於ける横川首楞嚴院二十五三昧会の念仏

教義理解の伝承と発展

仏教的靈魂論序説

因縁心釈論開決記の著者について

南海寄帰内法伝にみられる医学(その二)

第十三回浄土教学大会

特別研究

「法然上人の思想史的研究」について

法然上人の往生思想の展開

平野 誓寛

山田 弁信

竹中 信常

山本 啓量

千賀 真順

三田 全信

伊藤 真徹

福富 海岳

高橋 松海

大橋 俊雄

宇高 良哲

早坂 博頭

宅見 春雄

松崎 可定

大南 竜昇

杉田 暉道

大橋 俊雄

伏見 誓寛

金子 真補

杉田 暉道

藤井 正雄

芹川 博通

賀幡 亮俊

梅辻 昭音

清水 澄

奈良 博順

大谷 旭雄

戸松 啓真

浄土宗伝法史の研究序説

——末代念仏授手印の伝承本について——

浄土宗発展の基礎的研究

浄土教教理の現代的反省における一、二の問題

丸山 博正
梶村 昇

懐感の伝記について——特に歿年を中心として——
テイリツヒの信仰論理と浄土教
浄土宗と現代人

成田 寛哉
藤本 浄彦
杉田 暉道
藤吉 慈海

阿川 文正

概旭乗 KYOKUJYO OMUNE の生涯

藤吉 慈海

玉山 成元

シンポジウム

大島 祥仙

伏見 誓寛

浄土宗義を学校教育にいかにか生かすか

大島 祥仙

岩城 成忍

滝 俊立

賀幡 亮俊

石橋 真誠

梅辻 昭音

竹本 寿光

近藤 徹称

可会 牧 達雄

一般研究

『愚管抄』に於ける法然上人観

宗学と神学(二) ——メタ神学の提唱

五重伝法の組織について

法然教学の能動的主体性 その二

——教学の人間の把握に就いて——

授手印の宗義行相に関する諸派の異説

法然浄土教における啓示について

名体不離のご名号について

念仏現益の論理

念仏の習俗化と個性化

第三転法輪としての浄土教

『ミリンダ王の問い』と浄土教

立石寺夜行念仏の阿弥陀仏信仰

特別研究

自力と他力 ——現象学的解釈学的アプローチ——

峰島 旭雄

浄土教の倫理性について

——心浄の思想を中心として——

沢山 謙照

法然上人の往生思想の展開

大谷 旭雄

浄土宗発展の基礎的研究 (2)

——特に三河浄土宗寺院の調査結果を中心に

宇高 良哲

「おてつき」運動の教団史的研究

芹川 博通

我国における念仏儀礼の研究

成田 俊治

浄土宗伝法史の研究(其の一)

——末代念仏授手印の総合的研究——

柴山 哲彦

第十三号(昭四十四・三・三十)

第十四回浄土教学大会

浄土宗伝法史の研究(其の二)

——『手次状』私考——

一般研究

三心の心理構造

善導大師の『観経疏』に於ける無生法忍

懐感禪師に於ける浄土の三界撰不撰論

『四十八卷伝』複写について

法然上人の『往生要集釈書』の成立について

浄土布教法の根底としての法然上人の信仰について

開宗のご文と一枚起請文

法然教学の能動的主体性 その三

——教学の人間の把握について——

法然念仏の真理表現について

浄土教に於ける死の取扱について

『観門要義鈔』について

——特に観門の道理を中心として——

『臨終講式』について

『看病用心』について

大樹寺開山勢濟愚底について

『宝性論』における仏身論

信仰の特質としての個別性と関与性

——念仏の存在論的考察——

宗教と芸術に関する随想

古代僧官考 ——特に十師について——

阿川 文正

竹中 信常

山本 法純

金子 寛哉

井川 定慶

坪井 俊映

金子 真補

福富 海岳

高橋 松海

伊藤 正穩

愛宕 頌昌

広川 堯敏

三田 全信

伊藤 真徹

佐々木洋之

水谷 幸正

藤本 浄彦

峯崎 成孝

中井 真孝

南北朝期の奥州における神社の位置

禅僧 鈴木正三について

シンポジウム 幼児の宗教教育について

現行の教育制度から見た幼児教育の位置

幼児の宗教教育と浄土教学との関連

幼児の宗教教育の現状

第十四号(昭四十五・三・三十)

第十五回浄土宗教学大会

特別研究

浄土教者の宗教体験の研究序説

自力と他力(統)

——現象学的解釈学的アプローチ——

善導大師の倫理観

善導大師の『観経疏』の訳注

念仏三昧室王論における念仏観の特色

遊逆房門照について

——特に法然上人との関係を繞って——

近世から近代にかけての浄土宗教化活動の様相

——三河地方念仏講の実態調査とその研究——

“おてつき運動”と教団再編成の問題点

一般研究

往生想と引接想の念仏

浄土教の心理型

渡辺 清

杉山 暉道

渡辺 真澄

福井 豊信

形部 英一

藤吉 慈海

峰島 旭雄

深貝 慈孝

三枝樹隆善

小沢 燧珠

伊藤 唯真

牧 達雄

藤井 正雄

服部 英淳

竹中 信常

仏教認識論上の思惟と正受

実相身、為物身について

懐感の教学から見た善導大師の報土観

——華胎と似無漏の浄土を中心として——

往生要集における同行善知識の思想

法然浄土教の研究 ——特に懺悔について——

再び法然上人の佗びの法門を論ず

口称念仏の秘鍵

ご本願の弥陀名号について

俊乘房重源の東大寺再建について

当麻奥院本尊の遷移について

初期浄土宗伝法に於ける花押と手印

醍醐本法然上人伝記成立考

中世末期にみられる寺院経済機関について

近世初期における知恩院と増上寺

福田行誠と渡辺隸山

——観音像の造立を中心として——

H蓮の法難 ——小松原法難について——

寺封の成立について

Pamāna (Pramāna) のこと

浄土教における宗教的主体性の問題(一)

——“一向専念”と“撰取不捨”——

所謂非神話化について

黙阿弥劇に見えたる浄土・日蓮信仰と民間信仰

山本 啓暁

金子 真補

金子 寛哉

久下 隆

坪井 俊映

高橋 松海

静永 洪澄

宿富 海岳

西田 門我

井川 定慶

三田 全信

梶村 昇

佐々木洋之

宇高 良哲

大橋 俊雄

荻須 真教

中井 真孝

花木 泰堅

藤本 浄彦

愛宕 颯昌

古水 琢磨

慈悲思想の具現化について

シンポジウム

現代における教化の問題点

問題提起者

香月 乗光

戸松 啓真

上野 肇雄

後藤 真雄

司 会 宅見 春雄

第十五号 (昭四十六・三・三十)

第十六回浄土宗教学大会

特別研究

道の基礎的研究序説(1) ——道の語について——

浄土教における如来蔵思想

寿経と観経との認識論的関連

浄土教者の宗教体験

慈恩大師の浄土観

善導大師の『観経疏』の訳注(その二)

往生記の総合的研究序説

九卷伝と四十八卷伝

慈本尼の信仰と教化活動

一般研究

三昧発得

絶対的念仏

北崎 耕堂

真野 竜海

水谷 幸正

山本 啓暁

河波 昌

大南 竜昇

三枝樹隆善

柴田 哲彦

三田 全信

牧 達雄

竹中 信常

藤吉 慈海

名号について — 特に万徳所帰について —
 宗学と神学(4) — 状況倫理と浄土教倫理 —
 浄土教における宗教的主体性の問題(二)
 — “選択”の概念をめぐる —
 法然浄土教における善導教学の受容について
 — 特に諸行本願義の批判に関連して —
 往生の三身観 — 岡師往生観の一理解 —
 法然教学の主体性 其九
 — 法然教学の義勢論 —
 宗学研究資料 三題
 宗学研究の基本的な一側面について
 — 特に経典観を中心として —
 五種正行の系列について
 往生浄土論註の末巻について
 『群疑論』及び『安樂集』に引用される『法句経』につい
 て
 曇鸞大師の御伝記を拝してその浄土帰入と布教教化
 を偲ぶ
 聖光上人の選択集観
 法然門下禅寂と月講式
 『一言芳談』の性格
 名越派の五重相伝について
 浄土教の起源推定の問題点
 中央アジアの浄土教と法然浄土教

高橋 弘次
 峰島 旭雄
 藤本 浄彦
 坪井 俊映
 松崎 可定
 高橋 松海
 福富 海岳
 吉水 光慈
 小沢 勇慈
 藤堂 恭俊
 金子 寛哉
 金子 真補
 江島 俊雄
 三田 全信
 丸山 博正
 嵐 瑞激
 春日井 真也
 賀幡 亮俊

インド、パキスタンの旅より
 — 浄土教との連関において —
 仏性論について(一)
 — 特に心性本淨説と如来藏思想について —
 初期仏教における無我の考察(一)
 — 特にその立場について —
 大乘莊嚴経論における国土清浄思想
 仏教における身体観
 新羅浄土信仰について
 滅罪と往生 — 六往生伝を中心に —
 貝塚本願寺と宮田頼雄
 檀林法度の研究
 中世末期における本末争いについて
 増上寺所蔵「蝦夷善光寺御寄附金勘定帳」について
 日蓮の浄土教批判についての一考察
 脱先祖化と無縁仏
 「おてつぎ」運動と信行奉仕団
 三心釈の実践概念について
 第十七回浄土宗教学大会
 特別研究
 道の基礎的研究序説(2)
 — 道の語について —

近藤 徹称
 神谷 正義
 田中 典彦
 小沢 憲珠
 杉田 暉道
 中井 真孝
 成田 俊治
 井川 定慶
 宇高 良哲
 佐々木洋之
 田中 祥雄
 荻須 真教
 藤井 正雄
 芹川 博通
 北崎 耕堂
 真野 竜海

第十六号(昭四十七・三・三十)

浄土教における「救済」概念の種々相

法然院文書の研究

法然上人の浄土開宗と教団の形成

近世浄土宗寺院に関する基礎的研究

——その前提として——

中世思想史における浄土教と倫理(一)

宗派意識に関する調査研究

一般研究

神学と現象学 —— 宗学と神学 ——

浄土三派の念々不捨者の釈について

「開宗と文」の読み方

開宗の文に関する正義と異義

義勢論 其三 途轍について

—— 第一回教化団長会議の各位に呈する小論

論註に於ける曇鸞の特異点

善導大師の起行について

道綽禪師の人間観

聖光上人の教学的立場

白旗寂恵本「末代念仏授手印」について

十念についての諸問題

マウリヤ王朝治下における仏教の変容

初期仏教に於ける無我の考察

—— 特に認識の問題をめぐって ——

「三昧」からみた「道行」系『般若経』の「常啼菩薩品」

「曇無竭品」について

「中論の縁起」についての一考察

応身仏について —— 弥陀応身私考 ——

仏教の原理としての縁起の思想

阿弥陀仏像論

Garbha について

Gshon-nu-zla-med-kyi-gsam-rgyud の研究

朝鮮浄土教における無量寿経諸本の受容について

日本浄土教における無量寿経諸本の受容

明治・大正期における無量寿経受容の問題

開宗の史的接点

法然上人浄土宗開宗の年時に就いて

—— 諸学説の批判と四十三歳説の確立 ——

鹿ヶ谷法然院の草創について

織田信長と浄土宗

文雄上人の教学史上における位置について

合讃における三十六願経

徳本上人近江撰化に関する新資料

能分改格について

仁和寺済暹律師について

—— 特に歿年を中心として ——

同和地区寺院の成立と構造

—— 丹波西誓寺文書による ——

浄土教美術ノート

平 祐輝

真田 康道

松崎 可定

大成 善雄

竹本 寿光

神谷 正義

金子 英一

賀幡 亮俊

岩城 成忍

近藤 徹称

三田 全信

津村 諦堂

宇高 良哲

井川 定慶

伊藤 文昭

梅辻 昭音

柴田 鳳慈

野田 秀雄

金子 寛哉

——

——

嵐 瑞激

藤吉 慈海

問題提起者

芹川 博通

浄土教と恩思想

——特に法然上人を中心として——

大南 竜昇

法然上人の「三昧発得記」の研究

——醍醐・報恩院本を中心として——

嵐 瑞澄

「順彼仏願故」について

福富海岳師の「開宗の文」に関する発表について

服部 英淳

宗義の新しい表現について

浄土宗義の理解について —— 阿弥陀仏論 ——

藤吉 慈海

浄土宗義の理解について —— 念仏論を中心に ——

小林 尚英

浄土宗義の表現 —— 安心を中心として ——

福原 隆善

浄土宗義の表現について

—— 起行を中心として ——

金子 寛哉

浄土宗義理解の一視点 —— とくに「彼此三業不相捨離」

をめぐって ——

藤本 浄彦

浄土宗義における往生の理解

—— とくに浄仏国土思想との関連において ——

真田 康道

法然上人の思想的位置づけと価値論

—— 浄土宗の教えと現代思想 ——

河波 昌

宗学と神学 (6) —— その諸問題 ——

自然虚無之身について

峰島 旭雄

発願文の読み方について

当麻曼陀羅下縁九品の絵相について

三枝樹隆善

浄土宗と存覚

関東十八檀林制度の確立

塩竈 義弘

三田 全信

第十七号 (昭四十八・三・三十)

第十八回浄土宗教学大会

特別研究

浄土教と如来蔵思想

香川 孝雄

浄土開宗以前における法然上人

—— 批判精神と宗教的人格への敬慕 ——

藤堂 恭俊

古典文芸に描かれた法然上人像の研究

—— 説話文学を中心として ——

柳 泰純

京都十九箇寺考

維新时期浄土宗の基礎的研究

—— 変革期にみる知恩院の実情 ——

中井 真孝

一般研究

法然上人の選択の意義

法然上人の還相廻向

「捨闇闍拋」の文に関して

法然上人の思惟の特性 —— 選択の基礎 ——

野田 秀雄

法然教学の主体性 其十四 —— 元祖の次元観 ——

津村 諦堂

土屋 光道

伊藤 正穩

松崎 可定

高橋 松海

——特に檀林住持の選出方法について——

称念上人の『甘露苑』について

江戸時代に於ける専修念仏と現世祈禱

如来藏思想研究序説

南海寄帰内法伝と医学

——個人衛生を中心として——

末法入年仏教伝来説について

創始的宗教と民族的宗教との接点

岩手の念仏剣舞の研究

Ādiśesa の Paramārthasāra 試訳 (1)

シンポジウム 開宗八百年を如何に生かすか

宇高 良哲

伊藤 真徹

井川 定慶

藤堂 俊英

杉田 暉道

若林 隆光

中村 康隆

吉田 光寛

武田 耕道

吉水 智承

深谷 常玄

宮林 昭彦

三昧経典と文殊菩薩

地方における浄土宗檀林の展開 (一) ——瓜連常福寺檀林に

おける末寺、大衆騒動の意味するもの —— 長谷川匡俊

維新时期浄土宗の基礎的研究

——伊藤無閑について——

一般研究

念仏の功德について —— 法然上人を中心に ——

法然上人の機根論について

法然上人の思惟の特性 (その二)

法然上人の浄土観

『選択集』と証空

『選択集』の付属について

法然上人と禅について

二祖の見た法然上人像

専修念仏の地方社会への浸透

——朝日山信寂の播磨義を中心として——

番外の遺跡の研究 ——嵯峨清涼寺——

江戸幕府初期の仏教統制

——特に中央集権体制の確立過程について——

地方における浄土宗檀林の展開 (二)

——江戸崎大念寺を中心として——

維新时期の浄土宗 (一)

——名誉学天の晩年について——

明治初年の知恩院

大南 竜昇

野田 秀雄

金子 真補

津村 諱堂

松崎 可定

真山 康道

玉山 成元

後藤 尚孝

藤吉 慈海

金子 寛哉

嵐 瑞澂

三田 全信

宇高 良哲

長谷川匡俊

野田 秀雄

井川 定慶

高橋 弘次

峰島 旭雄

坪井 俊映

藤堂 恭俊

和漢語灯録の検討について ——

浄土教の倫理性 (その二)

——とくに懺悔と滅罪について——

浄土教と対話の原理

第十八号 (昭四十八・三・三十)

第十九回浄土宗教学大会

特別研究

浄土宗における実践体系の研究

法然教学の基礎的研究

——和漢語灯録の検討について——

浄土教の倫理性 (その二)

——とくに懺悔と滅罪について——

浄土教と対話の原理

藤堂 恭俊

坪井 俊映

高橋 弘次

峰島 旭雄

野田 秀雄

井川 定慶

おてつき運動の課題

——四十七・四十八年調査結果——

浄土教の思想史的把握と思想構造

無量寿経における業と信

——帝王乞人の譬を媒介として——

五悪段再論

三十六願経について ——その後の問題——

平等覚経における一、二の問題

小品系般若経における「廻向」について

小品般若経（羅什訳）における「大乘」と

「摩訶衍」について

金剛般若経の見仏説

安樂集における五念門の一考察

罪業と仏性についての一考察

光明思想と如来蔵思想

『中論』の時間説について

アビダルマにおける不善根

仏教後期論理学派における Samānya の問題 (一)

Adisesa Paramārthasāra 試論 (一)

謡曲詩材上における法然上人の一考察

当麻曼荼羅考 —— 敬首の宝船釈について ——

特別研究

各宗より見た法然上人

西山浄土宗 西山短大学長 福井 忍隆氏

芹川 博通

峰島 旭雄

近藤 徹称

岩城 成忍

梅辻 昭音

賀幡 亮俊

岸 一英

森山 清徹

大南 竜昇

佐藤 健

大成 善雄

藤堂 俊英

原 裕

西村 実則

白崎 顕成

武田 耕道

吉水 琢磨

塩竈 義弘

シンポジウム

開宗八百一年後の宗門教化の方策

真 宗 竜谷大学教授 石田 充之氏

日 蓮 宗 宝仙短大教授 紀野 一義氏

天 台 宗 大正大学学長 福井 康順氏

問題提起者 久米原達丈

吉沢 堯洲

佐藤 良智

恒川 武敏

司 会 水谷 幸正

仏教文化研究一覽

第十三号 (昭四十一・九・一)

鎌倉二位禅尼への消息と背後考

日本浄土教思想史上における凡夫性自覚過程について

歴史のダイナミズムの解明

—人類学的アプローチをめぐる覚書—

実範『病中修行記』について

—その構成と念仏思想—

信の確実性について

三田 全信

恵谷 隆戒

藤井 正雄

大谷 旭雄

峰島 旭雄

仏伝に現われた「七歩」の意味
中国仏教における戒体論 (一)

『臨終講式』について

浄土教と賤民層について

戦国武将の信仰

石上 善応
宮林 昭彦

三田 全信

伊藤 唯真

玉山 成元

第十六号 (昭四十五・三・三十)

一枚起請文註釈書日録の作製と撰者考

浄土宗伝法史の研究 (その一)

—『末代念仏授手印』の総合的研究—

一、伝法史上に於ける『授手印』の意義とその地位

二、国師本『末代念仏授手印』について

三、向阿本『末代念仏授手印』について

四、『授手印』の宗義行相に因する諸派の異説

曇鸞浄土教の倫理性

善導大師の倫理観

嘉祥大師における仏典解釈法の特質

—中論三段分科について—

劇文学と浄土教 特に黙阿弥物の研究

藤堂 恭俊

阿川 文正

柴田 哲彦

大橋 俊雄

金子 真補

加藤 善浄

深貝 慈孝

佐藤 成順

古水 琢磨

第十四号 (昭四十三・三・三十)

無生法忍の浄土教的展開

浄土宗における現世利益の系譜

初期仏教における人間形成論

浄土教における人間形成論

法然上人の立教開宗とルターの宗教改革 (一)

ハリバドラ小註の研究 (4)

徹定上人年譜稿

山本 啓量

大橋 俊雄

高橋 弘次

香川 孝雄

清水 澄

真野 竜海

牧山 諦亮

第十五号 (昭四十四・三・二十)

禅と念仏との問

藤吉 慈海

第十七号 (昭四十六・三・三十一)

浄土宗開創前後における法然上人の課題をめぐって

藤堂 恭俊

黒田聖人の研究

三田 全信

自力と他力 —— 現象学的解釈学的アプローチ

峰島 旭雄

法然上人の特戒問題史考

三田 全信

慈恩大師の浄土観

大南 竜昇

法然院文書の研究

善導大師の『観経疏』の訳註

三枝樹隆善

——特に忍叡の時代を中心として——

宇高 良哲

『念仏貞本日記』と『念仏行者御法儀断集』について

牧 達雄

中世後期・近世初頭の知恩院と京都門中

中井 真孝

第十八号 (昭四十七・三・三十)

道の源流

真野 竜海

曇鸞の往生論註に於ける認識論

山本 啓量

第二十号 (昭四十九・三・三十)

往生記の総合的研究

柴田 哲彦

近世における法然上人遺跡巡拝について

伊藤 唯真

浄土宗初期の六時礼讃

榑 泰純

法然上人と平重衡(その一)

榑 泰純

藤之寺攷

野田 秀雄

皇学所への献本について

野田 秀雄

現浄土宗教学院理事

稲岡寛順(教学院長)・塚本善隆(研究所長)・佐藤密雄(主幹)・服部英淳(東部主任)・伊藤真徹(西部主任)・恵谷隆成・佐藤良智・竹中信常・坪井俊映・戸松啓真・中村康隆・藤吉慈海・藤原弘道・藤原了然・松濤誠廉・古屋道雄(常任)

浄土宗教学院書記

東部 宮林昭彦・佐藤行信・阿川文正・丸山博正(現)
西部 平 祐史・香川孝雄・伊藤唯真・成田俊治・高橋弘次(現)

近世仏教学の確立は、さかのぼると明治維新における廃仏毀釈運動の大いなる嵐に対する危機意識が礎となり、仏教護法のための覚醒的動きが、やがて教学の近代化へと通じたのである。

廃仏毀釈の痛撃も、ひとえに僧侶自身の墮落による当然の結果として厳しく反省し慚愧して、持戒堅固を強く主張し、仏教本来の面目に立ちかえって仏教の護持復興を叫ばれた人に、福田行誠上人がおられた。明治高僧伝中の第一人者として、「八宗の泰斗」、「仏法の柱石」と仰がれた福田行誠上人は『釈門新規三策』を著わしてつぎのように述べている。

「仏家の廃仏を悲しむは、寺塔の破壊をかなしむに非ず、衣食の減ずるを悲しむに非ず、官録を失するを悲しむに非ず、唯天人に此至善の道を失するを悲しむなり。僧侶の興法を念じ、廃仏を防ぐ、只此れが為なり」。

一般僧侶の歎き悲しみは、廃仏毀釈の嵐によって寺塔が破壊され、衣食に窮せしめられ、世俗的な權威の失墜に向けられていた。しかし、行誠上人は、このような形骸の亡失には目もくれず、仏道の精神の失われんことを悲しんで、興法利生の道こそ、僧侶の理想であることを闡明にしているのである。やはり同時代に養鷗徹定上人も『仏教不可斥論』を著して、仏教の軽んずべきでないことを力説し、仏教界の奮起に大きな力を与えられた。

浄土宗の教学界は、近世において華々しい活躍を続け、仏教学界をリードするとともに、そとはまた全日本仏教会の障目の的でもあった。かかる歴史的なあゆみが、現代の浄土教学界の基盤にあるところから、とくに付録として、近世浄土教学界のあゆみと、浄土宗教学院の直接関係物故の諸先生の事績を記録としてとどめることとした。

近代浄土宗教学のあゆみ

諸政を一新して新しい政治体制をうちたてようとした明治新政府は、宗教に対しても祭政一致・神仏分離を旗印に画期的な政策をとろうとした。明治元年、政府は神仏の混淆を禁じて神祇事務局をおき、翌二年、教導職取調局を設けて太政官の上に神祇官を位置せしめ、やがて神祇官は神祇局と改める、というように、神道を基調とした国家主義を鮮明にうちだしていった。同五年、「僧侶ノ肉食妻帯蓄髮勝手タルベキ」布令が出され、苗字も付けなければならなくなった。この布令が出されたことにより、僧侶自身の意志によって行動できるようになった。自由意志によって行動できるようになったことは、教団からの離脱を容易ならしめたことを意味している。こうして教団組織は内部から崩壊するきざしがみえたばかりではなしに、神祇省が廃され教部省がおかれると、三条の教則、十七兼題が定められて、僧侶にも教導職として、これを講ぜしめた。増上寺に神仏合併の大教院が置かれたのも、この年のことである。本尊阿弥陀如来は徳川三代将軍の霊廟台徳院廟に移され、代りに須弥壇には神鏡がおかれて天御中主尊が祀られ、注連繩がはりめぐらされて造化三神の神殿と呼ばれた。三門前には白木の鳥居が立てられ、僧侶は神官の衣服を身にまとい神饌を供し、僧侶でありながら仏教本来の教義信仰を説くこともできず、ひたすら敬神主義を宣布しなければならなかった。

こうした弾圧は、やがて仏教を衰滅せしめるものであるとして仏教界から反撃を受けることになったが、こうした

とき浄土宗でも反抗と自戒の運動がでてきた。その先達となったのが養鷗徹定と福田行誠であった。徹定は『仏教不可斥論』を著わして仏教の軽んずべからざる所以を力説する一方、当時の新しいイデオロギーとして移入されてきたキリスト教に対しても『笑耶論』『破提字子』など、多くの著述をものして防衛につとめた。徹定が外に向って仏教の擁護を説いたとき、行誠はむしろ教団の内部に向って白肅と反省を求め、近代社会における僧侶として戒律生活と学問への志向を説き、宗門将来のために学校を経営し宗徒の養成に力をつくすべきことを教示している。二人は前後して知恩院住職となり管長となるとともに、他宗の先覚者たちと協力し各宗同盟会を組織して正法の擁護と宣揚につとめたが、こうして二人の正法復興の熱意は青年宗侶をふるいたたせる契機となった。

檀林制度の廃止後、増上寺山内および知恩院にそれぞれ勸学院が設置され、山口に講学場が設けられ、東西の勸学院はその後東部あるいは西部の宗学校・大学林と改称されたが、徹定のもっとも期待した学僧は岸上飯嶺であり、當時行誠は諸宗共立の英語学校の創立を企てている。岸上は『説法惟中策』の名著を残して明治十八年四十八歳の若さで没したが、彼は「早くから宗学の不振を憂えて、明治三年ごろから浄土宗教壇を東西両部に設立せられんことを主張していた教学人」であった。その薫陶をうけた人たちのなかから林彦明・桑門秀我・郁芳随円・大門了康らが出ている。

大学林が設けられた当時の監督は、西部が智相堅雄、東部は黒田真洞で、黒田は智積院弘現や泉涌寺旭雅に師事して性相を学んだ学者であったが、時たまたま起った行政的東西分立によって生じた抗争を教学の面でもつたらしめた功績は大なるものがあつた。二十年七月「浄土宗学則」が定められ、増上寺山内天光院に浄土宗学本校、東京・京都・山口・長野・鎮西・仙台・愛知・大阪に支校がおかれた。浄土真宗大谷派で行われた海外留学制度は浄土宗でも採用され、三十一年九月荻原得定が博物学研究のためアメリカ合衆国へ派遣されたのを皮切りに、翌三十二年七月には概旭乗が南方仏教研究のためシャムへ、続いて荻原雲来・渡辺海旭・矢吹慶輝らが留学している。また内地留学制度も設けられ、比叡山・高野山・法隆寺など諸所で研究に従事したもの八十余名に達したが、その嚆矢は岡村学順であった。

二十八年七月、専門科唯識部を卒業した渡辺海旭・荻原雲来・望月信亨は、九月内地留学生となり、渡辺は比較宗教学、荻原は印度仏教史、望月は天台学を専攻することになった。望月は比叡山に登り、五智院に起居し、清水竜山(日蓮)・大森禪戒(曹洞)・福田堯顥・末広照啓(天台)らとともに天台学を学んだが、荻原・渡辺は、のち海外留学生となつてドイツに渡つた。荻原は三十二年七月、渡辺は翌年四月渡独し、ともにカイザー・ウィルヘルム第二世大学のロイマンに師事して梵語・パーリ語を学修し、かたわら宗教学・印度仏教などを研鑽した。ロイマンにはのち大橋戒俊・若井信玄も師事したが、ロイマンは「虫眼鏡のやうな善く見える眼鏡を掛けて、文章の一画一片を正しく確かに見る人」で学問に厳しい学者であつた。そのロイマンが、常に口にしたのは荻原のことで、「荻原こそはドイツの学風を会得し、自分の心血を伝へ、師の使命を辱しめず、このロイマンが学風を愈々宣揚せる天晴れの学者よ」と讃嘆していたという。荻原は七年、渡辺は十一年在独し、ドクトル・フィロゾフィエの学位を得て帰朝したが、荻原はドイツでは主として梵文『俱舍論釈』や『菩薩地』の研究をつづけ、帰朝後は『梵漢対訳仏教辞典』『印度の仏教』『大藏経南条目錄補正索引』『梵文菩薩地』等多くの出版を成しとげ、成果を世に問うている。渡辺は滞独中『密教発達論』『孔雀王経の研究』『普賢行願讃諸本の比較研究』をすすめて、帰朝後は芝中学校長、宗教大学・東洋大学教授、大正大学理事長、さらには浄土宗執綱として八面六臂の活動をつづけたが、そうしたなかでも大きな業績は『大正新修大藏経』全八十五巻の刊行を都監として成しとげたことである。渡辺は高楠順次郎・小野玄妙と結んでトリオを形成し、異体同心となり、その刊行に力をそそいたが、その中心となつて活躍したのは小野であつた。彼は二十三歳のとき『仏教年代考』を著わして以来、『仏教之美術及歴史』『仏教美術概論』『仏教文学概論』『大乘仏教芸術史の研究』をはじめ多くの著述を残し、仏教美術・仏教文学・仏教天文学など、それぞれの分野で新開拓をなしたが、浄土宗のなかで生活しながらも、学派的宗門的背景には恵まれていなかった。まったく自力で身を立て大きな足跡を残した人であつた。だが小野なくしては『大日本仏教全書』にしても『仏書解説大辞典』にしても完成しない、それほど彼は資料の所在をよく知っていた人であつたという。

『大日本仏教全書』は、望月の『仏教大辞典』の編纂刊行を助成するという意図をもつて計画された事業であつた。

百五十冊の書物を発行することによって資料の披見が自由になり、刊行費用も捻出することができるというのである。しかし、世界大戦の余波をうけ、物価の高騰などの諸事情のため思ったほどの助成を受けることはできなかったらしい。望月は仏教学・宗乗学を専攻して伝統仏教学の護持につとめたが、その研究法は護教的教権主義に終始することなく、時代の新方法を取り入れた、より科学的、実証的な、実証主義的合理主義ともいべきものであった。二十九年『法然上人全集』、四十一年『仏教大年表』を編纂し、つづいて『仏教大辞典』全七巻を完成させたが、こうした作業を通して研究をすすめた結果、『略述浄土教理史』『浄土教の起源と発達』『浄土教概論』『支那浄土教理史』『大乘起信論の研究』等の業績を成しとげている。

明治三十三年東京帝大を卒業した椎尾弁匡は、大島泰信とともに小石川伝通院の西側に興学舎という学寮を設立して学生の指導にあたった。興学舎はのち水道端に移ったが、ここで多くの有為な学者や教育者が育てられた。ここから学問のメッカ東京帝大に入った人も少くない。矢吹慶輝・藤田寛随・大村桂蔵・山口察常・大野法瑞・須之部量学・岩井竜海・田中徹（木又）らがそれである。矢吹は宗教学、藤田は東洋史、大村は教育学、山口は漢文学、大野は西洋史、須之部は哲学、岩井は社会学、田中は英文学を専攻したが、それより先に東京帝大に学んだ人には、宗教学を専攻した椎尾と大島、心理学の笹本戒浄、哲学の石塚童学がいた。椎尾・大島・矢吹は姉崎正治門下の俊逸で、椎尾はのち共生会という信仰運動を起したり、衆議院議員になり政界で活躍したこともあるが、原始仏教経典・アビダルマ・大乘仏教の研究を合理的、批判的精神をもってなしとげた学匠で、その成果は『仏教哲学』『仏教経典概説』等に集約されている。また三康文化研究所を設立するなど、一世の師表として幅広い研究をつづけてきた。矢吹は再度渡欧し、大英博物館に所蔵していたスタイン発掘の燉煌出土本を整理研究して『三階教之研究』『鳴沙余韻』等の大著を上梓するかたわら、摩尼教の研究にも手を染めたが、後者はついに完成を見ることなしに没した。『三階教之研究』によって恩賜賞を拝受したが、彼の研究態度は精緻であるとともに、東西思潮動向の比較類同と、このことを通じての仏教思潮の新解釈にあったという。石塚は青山学院のコーツの助力を得て『勅修御伝』四十八巻の英訳を完成し、『セイント・ホーネン』として出版している。山口は『仁の研究』によって昭和十一年三月学位を得、大正大

学の文学部長をつとめたこともあったが、長らく北京大学に在って教鞭をとっていた。藤田は淑徳高女、大村は芝中の校長をつとめ、須之部は浦和高校、岩井は広島高等師範の教授として宗の内外で活躍した。

興学舎で学んだ人はこうした人たちばかりではない。岩崎敲玄・大野法道・奥平法海といった多くの人がいて、大正・昭和の浄土宗教学界に活躍したことも忘れてはならない。ここで洗礼を受けた人たちは、近代的研究を身につけていったが、他面、「毎土曜日には、必ず一室に集って如法に宗規の勤行をやり、あとは色々信仰談や経験談があり、時としては相当議論に花が咲いたこともあった」というように信行の策励にもつとめていた。近代的研究とは実証的、合理主義的研究である。こうした研究がおしすすめられるかぎり、信仰や神秘のベールにおおわれていたものは、理性の白日のもとに、その身をあらわにしなければならぬ。それははまた伝統を破壊し信仰を崩壊させるかもしれない。そうした意味で經典成立の歴史的研究とか、大乘非仏説論は一時世間を賑わせた。

浄土宗学本校は、三十一年浄土宗高等学院と改称され、四十年には宗教大学と改められて、初代校長には黒田真洞が就任した。その後、校長は四十四年九月大鹿愍成、大正二年九月土川善激、同三年望月信亨とかわった。大鹿は初め岸上について宗乗と唯識とを学んだが、唯識こそわが意を得たものであるといつて、当時東における唯識の巨匠といわれた卍山実弁について攻究することになった。実弁の彼に対する期待も大きく、大鹿が何かの理由で休むと「今日は愍成が見えておらぬから」といつて講義しないこともあったという。こうして期待された大鹿も、岸上の西部大造林への赴任ににともない、実弁のとめるのもきかないで入洛した。この頃、京都には泉涌寺に旭雅がいた。旭雅は西の唯識学者であり、ここで黒田や武田芳淳と机を並べて学び、後年宗教大学や叡山大学・京都帝大などで唯識や因明を講じた。彼には六花真哉・小林瑞浄・三枝樹貫道・大島徹水・滝川秀音・鈴木豊善・福原隆成という七人の弟子があり、世に大鹿門下の七羅漢と呼ばれている。旭雅について教えを受けた人には、このほか土川善激・太田密道・真野順戒・林弁我・桑門秀我がいた。しかし、土川は唯識学者としてよりも宗学者として著名で、晩年は知恩院専修道場の上首に就任して宗学者の養成に力を尽した。彼が還暦を迎えたとき、単なる祝賀会ではなしに、後世宗学界に裨益するものを残そうではないか、それが宗乗を命と一生を捧げた彼に対する報恩事業となるものだ、ということ

「土川勸学宗学興隆会」が設けられ、宗典の校合と出版が計画された。『選択集』『末代念仏授手印』が出版されたのも、宗学者としての片鱗を物語っている。土川について上首になったのは林彦明で、時に小林瑞浄・福島愍雄・石橋誠道が首座となった。林は因明、小林・福島・石橋は宗乗を講じた。林が古稀を迎えたときも、上川同様『三卷七書』『新訂授菩薩戒儀』を校訂出版している。福島は仏教専門学校の四代、小林は五代、石橋は六代のそれぞれ校長をつとめた学僧であった。

黒田・大鹿とともに明治三十九年八月勸学に叙せられたのは勤息義城であった。彼は山下現有が「上人の行業清淨にして、学博く徳高し、まことに蓮門の棟梁、教壇の巨匠」とたたえたほどの学匠で、宗乗を泉谷西寿寺の堪忍、唯識を智積院の弘現から受けたが、こうした人たちの学問は旧仏教学、旧宗乗学ともいうべき、伝統的な、一字一句をいやしくもしない訓詁註釈の学問であった。勤息が俱舍論を講義するにしても、選択集をやっても、科段をきり、典拠となるべきページを一々指摘して、大論の何丁、安樂集の何丁と教示したというのは、その現われに他ならない。こうした研究法は、江戸時代以来の伝統をうけついでたものであり、当時の宗乗学者は宗乗一本で他をかえりみないということはなかった。余乗では俱舍・唯識・天台・華嚴が広く学修され、浄土宗人として宗乗は必須の教養科目としてだれしも学ばなければならなかったから、宗乗と余乗は車の両輪みたいなもので、両者をあわせ学んでいたようである。宗乗でも勤息・桑門が訓詁註釈を主としていたとすれば、神谷大周の宗乗は福田行誠の学風をうけた達意的なものであった。神谷は増上寺や伝通院の檀林で宗乗を究めたばかりではなしに、俱舍・因明も修めれば禅学も学び、また経書をも学ぶという諸宗兼学の学僧で、明治二年四月には唯我昭舜・赤松光映（天台）、高岡増隆・大崎行智（真言）、優陀日輝・新井日薩（日蓮）、大洲鉄然・鳥地黙然（真宗）という諸宗きっての人たちに互して各宗同盟会を組織して排仏の非を説いて回った。学問より布教への歩みは、新政府の手によって排仏毀釈はおろか破仏にまでなりかねないという、心ある人たちのやむにやまれぬ感情からほとばしりてた護教的精神の現われであったが、彼はこのときを境に布教にも力をそそぐことになった。石井教道は神谷に深く傾倒して宗乗を学んでいるが、神谷は大基について宗乗を修めた。宗乗の流れに賢州・鸞州・大基と次第する学脈があり、その大基について学んだのが神谷であったか

ら、彼は学脈の正統をもって任じていたという。神谷の宗学研究には愛宗護法の態度が滲みでていた。これが伝法問題や聖附教学への考察となつて、勤息との論争へと発展する主因となつていった。

伝法問題は、行誠が「譜脈私案」を草し、寺院住持歴代の系譜はいわゆる伽藍譜ともいうべきものであつて、一宗法統の血脈とは別なものである、知恩院はこの両者を混淆して用いている、知恩院歴代の系譜中に聖光・良忠をさしはさむことは史実を無視するものである、したがつて今後伝授する場合、血脈は関東檀林の風に倣つてほしい、と知恩院門主徹定に一書を寄せたのが、そもそもこの論争の出発点になつてゐる。これに対し徹定は知恩院譜脈は吉水正統である所以を「答弁譜脈私案」にまとめて酬いた。その後行誠はまたもや初重に『往生記』を用いるのはよくない、『選択集』を用いるべきことを主張した。これが『伝語』であり、布薩戒を廃することを主張したのもこのときであつた。この説をさらに神谷が、その著『結縁五重筌諦』で支援したこと、神谷と勤息の論争が始まつた。勤息は福田・神谷の説に対して『伝語金録論』をもつて反駁し、伝法改正論を破斥したが、これで負けている二人ではない。論争は何年もつづいた。こうした論争について松濤賢定は「十七年甲申伝法譜脈に關し、東西に異議起るや、老司教(神谷大周)関東檀林耆宿の推すところとなりて會議に臨み、毅然記主三代説を扶持して一歩も譲らず、昧者を悔悟せしむ。又宗学は二藏頌義を研鑽して、罔祖の風格を景仰し、加之四林庵貞極師に私淑して、頗る伝法復古を主張す、所謂選択為本の伝法論是なり、以て護法の赤心を知るべし」(甘黙余影)と述べている。

明治後期仏教学界で新しい方法論が取り入れられ、新仏教研究の必要が叫ばれて、その研究が飛躍したとき、浄土宗学もそれまでの訓詁的な宗乘から脱け出ようとしていた。訓詁的な学修であるかぎり学問的論争は起り得ないが、神谷・勤息の論争がその後の浄土宗学に新生命を吹きこむ原動力となつたとすれば、彼らの論争の含む価値は偉大なものがあつたといえよう。

論争が契機となつていたか否かは別として、明治後期から浄土宗学が文献に幅広い考察を加えた学派と伝統宗学研究の学派に分れていったことは事実である。神谷には『結縁五重筌諦』の他、『選択集要義』『伝法沿革依憑詮考』があり、勤息には『選択集玄談』『科註起信論一心二門大意』がある。二つの学路のうち前者の学系に属する人に望月

信亨・石井教道が、伝統宗学護持の立場から宗乘研究をすすめた人に桑門秀我・加藤秀旭・今岡達音・松田貫了・阿川貫達あらかわかんたろうがいた。桑門は愛知支校から浄土宗本校に赴任したが、愛知支校時代すでに彼には「選撰念仏集講義」の著述があった。その識語に「予ガ今講述スル所ハ専ラ徹選撰決疑鈔及直牒ニ拠リ、宗意ノ精要ヲ陳ブルニ至テハ、広ク報夢五十余帖ノ定判ヲ守リ、傍ラ古賢先哲ノ指南ニ従ヒ、往々愚見ヲ加ヘ、偏ニ初学ニ便スルノミ、且ツ異論多岐ニ渉ルガ如キハ務メテ其正義ヲ挙ゲ、以テ迷ヒ無カラシムコトヲ庶幾ス」と述べているところによって、その学風を知ることができる。『四帖疏大意』『宗義綱要』『選撰集大意』等のほか、喜寿の賀を祝うにあたって門弟たちの手によって上梓された『出雲宗要』の著があるが、彼はまた淑徳高女の校長になったこともあれば宗務執綱に就任したこともあった。加藤には『浄土宗綱要』があり、もともと正確に一宗の精要を述べたものとして高く評価されている。今岡は宗教大学から正大教授への学路で、宗乘から浄土宗史の研鑽にあゆみをすすめた。明治三十八年浄土宗高等学院の教授を辞した彼は、ひたすら各地の宗門寺院を歴訪して秘蔵、埋没していた古書を調査するとともに、宗書の蒐集と整理を行なつて「浄土宗典の性質分類草案」を作成した。こうした調査が行われたればこそ『浄土宗全書』全二十巻が完成できたのである。今岡の宗史研究は浄土宗内にとどまらず、他宗との交流や比較研究にまで及び、特に口蓮や親鸞の伝記や著書については自由な立場から分析し、比較して辛辣な批判を加えている。『浄土宗全書』を法然上人の七百年御遠忌の記念事業としてつくりたいと発願したのは明治二十九年のことであり、それは八年の歳月を費して大正三年一月、全二十巻が完成したが、その後翌四年「統浄土宗全書」が宗書保存会から発行された。昭和三年十九巻が出て終っているが、当初の予定では十六巻であった。この仕事にたずさわって中心的役割を果たした人に岩崎敲さきこうげんや原田靈道はらだれいどうがいた。岩崎は『浄土宗史要』という書物を出している。浄土宗史の研究にもっとも早く手を染めた人であり、大島の『浄土宗史』とともに江戸時代の浄土宗を知るためには古典の感はあるにしても、しっかりした今もって利用にたえ得る好著である。原田は浄土宗教学部長から淑徳高女の校長になった人で、『統浄土宗全書』上梓のおりは発行者として、その名をならねている。

大正年代の浄土宗が誇りとしたのは「三勸学五博士」である。三勸学とは大鹿・勤息・桑門、五博士とは渡辺・荻

原・望月・椎尾・矢吹であったが、こうした人は氷山の一角ともいべきもの、その裾にひかえる多くの学人が仏教
学界の第一線で活躍していた。それは昭和年代に入ってもおとろえていない。「学問宗の浄土宗」として他宗の刊目
するところであったが、それにはまたそこに至るまでの長い準備時代があったことを忘れてはならない。

(大橋俊雄)

あ　と　が　き

浄土宗教学院が創立されて、はや三十年の星霜をへて今日にいたっている。その間終戦前後の混乱や、宗門分裂という不幸な出来事が重なり、教学院の事務所も方々に移転をし、関係資料や記録なども散逸してしまい、充分にその歴史的な経過を知ることができない。幸い宗門合同という、過去の宗教史にあまり例をみない快挙をなしとげたが、そのかげには教学関係者の共同研究を通じての交流など、目に見えない努力がなされたことを見失ってはならない。

浄土宗教学院が三十年を迎えるにあたり、創立の趣旨および経過の記録を残すために、三十年史の編纂が計画された。しかし、教学院創立当初の関係資料、および分裂後の仏教文化研究所関係のものも勿論であるが、案外に合同後教学院として新発足してからの資料も纏まっておらず、不充分であった。そのため「第一篇 教学院の創立とあゆみ」については、教学院十五年史にとどめられている記録を中心に編集した。編集者の石上善応先生が、教学院創立の生みの親である真野正順博士から創立当初の模様などを詳細にうかがい、また不充分の記録を克明に整理されているので、後世資料が不明になること

を危惧して、あえて掲載した。「第二篇 仏教文化研究所の設立」については、宗門分裂後のことゆえ、不明の点が多くあったが、設立当初からの主事であられた藤堂恭俊先生を煩わし、ご指示をいただいた。「第三篇 浄土宗教学院の新発足」については自明のことであるが、詳細な記録の段になると以外に明瞭でなく不完全であった。そのため多くの不備の点があろうかと思うが、至らざるは編集の責任であり、深くお詫びする次第である。

浄土宗の発展は、一に教学の興隆に期するが大であることは言を要しないが、現代の教学の礎として、仏教界をリードした近世の浄土教学の黄金時代を築かれた輝しい先達の余栄があることを忘れてはならない。その意味からして付録として、大橋俊雄・藤堂恭俊両先生にご執筆をいただき、「近代浄土宗教学のあゆみ」と「浄土宗教学院関係物故者略伝」を掲載した。

編集・校正にあたっては、藤堂恭俊・真野竜海・佐藤行信・阿川文正・丸山博正の各氏のご協力と、浄土宗出版事業協会主幹宝田正道・同理事長谷川宣丈両氏の助力をいただいたことを記して、深甚の謝意を表するものである。

(宮林昭彦)

浄土宗教学院三十年史

昭和51年11月10日 印刷

昭和51年11月20日 発行

発行 浄土宗教学院

監修 浄土宗宗務庁

〒605 京都市東山区林下町400
(電話) 京都 (541) 7131~3

編集 浄土宗出版事業協会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4
(電話) 東京 (436) 3351~4

印刷 (株) 共立社印刷所

〒101 東京都千代田区神田神保町3-10
(電話) 東京 (261) 2028

(非売品)



